

久宝寺遺跡

財団法人八尾市文化財調査研究会報告77

- I 久宝寺遺跡 (第28次調査)
- II 久宝寺遺跡 (第36次調査)
- III 久宝寺遺跡 (第37次調査)

2004年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

正 誤 表

財団法人八尾市文化財調査研究会報告77

		誤	正
53項	第34図	8 5YR6/4にぶい橙色砂礫混じりシルトを周溝内埋土に含めない。	
103項	第19図	土器棺墓401平断面図	土器棺墓401出土遺物実測図

久宝寺遺跡

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告77

- I 久宝寺遺跡 (第28次調査)
- II 久宝寺遺跡 (第36次調査)
- III 久宝寺遺跡 (第37次調査)

2004年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

は し が き

久宝寺遺跡は、大阪府八尾市西部の久宝寺、西久宝寺、南久宝寺、北久宝寺、亀井、北亀井、渋川を中心に東西1.6km、南北1.7kmに広がる縄文時代後期～近世の複合遺跡であります。

この久宝寺遺跡の南部を横断するかたちで占地している「旧国鉄竜華操車場」は、渋川・亀井に位置し、24.6haにおよぶ広大な敷地で、昭和13年に造られ、戦前・戦後の近畿圏の物流・経済を支える一大拠点としてその役割を担ってきました。しかしながら、高度経済成長の後半期には、列島を網羅する高速道路の整備拡大や一般道の整備が進むなかで鉄道輸送の役割が低下し、更に、国鉄の民営化に伴い多額の償還に充てるため売却処置が講じられ、昭和61年の国鉄民営化に先立つ昭和59年に廃止され、46年間の歴史に幕を閉じることとなりました。

同跡地については、昭和61年7月に八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が発表され再開発が具体化したことで、昭和63年と平成8年に八尾市教育委員会、平成7年に(財)大阪府文化財調査研究センター(現 大阪府文化財センター)により、遺跡確認調査が実施されています。

これらの遺跡確認調査を経て平成9年以降は、大阪竜華都市拠点地区内の道路部分を中心とした基盤整備ならびに主要建物を対象とした発掘調査が、当調査研究会と(財)大阪府文化財調査研究センターによって継続的に実施されており、縄文時代晩期～近代に至る遺構・遺物が検出される等の多大な調査成果が得られています。特に古墳時代初頭～前期においては、完全な形の割竹形木棺が検出された「久宝寺1号墳」をはじめとして約80基の墳墓が検出されており、中河内地域の当該期の墓制を知る上で貴重な資料を提供しています。

今回、平成11～13年度に実施しました大阪竜華都市拠点地区内における久宝寺遺跡第28次調査、第36次調査、第37次調査の内業整理が完了しましたので、報告書として刊行する運びとなりました。

本書が地域の歴史を解明していく資料として、又、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様へ深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々へ心から厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山 丈 司

序

1. 本書は、大阪府八尾市大字亀井他で計画された大阪竜華都市拠点地区内で平成11～13年度に実施した発掘調査の報告書を取録したものである。
1. 本書に取録した報告は、下記のとおりである。
1. 本書に取録したⅠ～Ⅲの調査報告の編集は原田昌則、金親満夫が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図(昭和61年測量・平成6年修正・平成8年7月編纂)、八尾市教育委員会発行の「八尾市埋蔵文化財分布図」(平成13年度版)、国土地理院地形図「大阪東南部(1/25000)」(平成10年3月1日)を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
1. 本書で用いた方位は、国土座標第Ⅳ系〔日本測地系〕の座標北を示す。国土座標数値については、平成14年4月1日から「日本測地系」から「世界測地系」への変更が行われているが、本報告では既往報告書との対応から「日本測地系」を使用した。
1. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に準拠した。
1. 遺構は下記の略号で示した。
井戸—SE 土坑—SK 溝—SD 小穴・柱穴—SP 落ち込み—SO
土器集積—SW 自然河川—NR 不明遺構—SX
1. 遺構図面の縮尺は、平面全図1/200・1/400、断面全図横1/300・縦1/40に統一した。部分図面の縮尺には1/10・1/20・1/30・1/40・1/50・1/80・1/100がある。
1. 遺物図面の縮尺は、1/4を基本とするが一部1/6・1/8・1/10がある。土器の断面については、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器は白、須恵器・陶磁器は黒、屋瓦・石器・木製品・土製品は斜線を用了。なお、黒色土器の煤付着範囲については粗い水玉を使用した。
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目次

はしがき

序

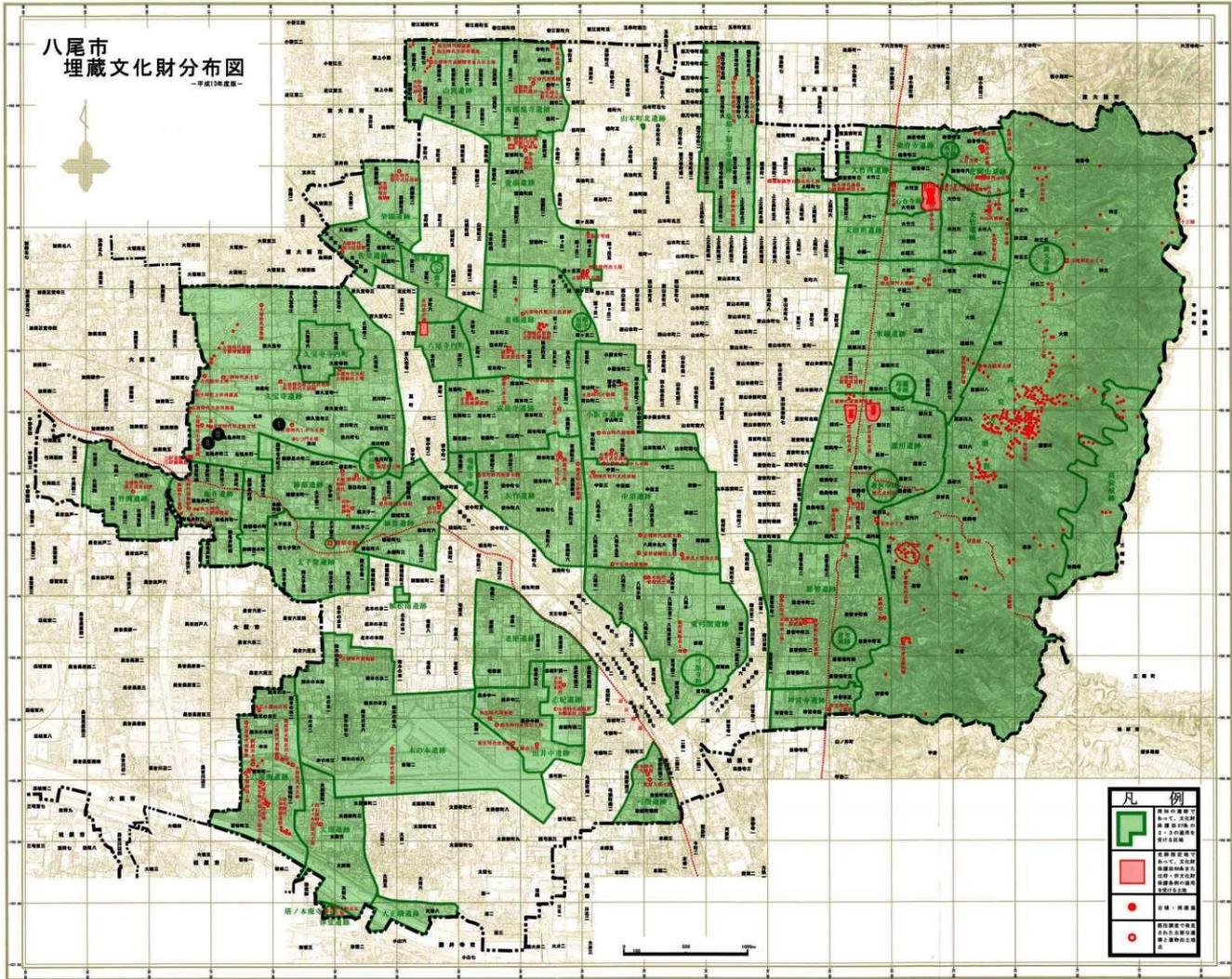
八尾市埋蔵文化財分布図

Ⅰ 久宝寺遺跡第28次調査 (KH99-28)	1
Ⅱ 久宝寺遺跡第36次調査 (KH2000-36)	67
Ⅲ 久宝寺遺跡第37次調査 (KH2001-37)	79

報告書抄録

八尾市 埋藏文化財分布図

—平成13年度版—



凡例	
	埋蔵文化財集中地区、埋蔵文化財発見地区、埋蔵文化財発見地区、埋蔵文化財発見地区
	埋蔵文化財発見地区、埋蔵文化財発見地区、埋蔵文化財発見地区
	埋蔵文化財発見地区、埋蔵文化財発見地区
	埋蔵文化財発見地区、埋蔵文化財発見地区



I 久宝寺遺跡第28次調査 (KH99-28)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市大字亀井他で計画された大阪電華都市拠点地区内で平成11年度に実施した区画道路1号線に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第28次調査(KH99-28-1~KH99-28-4)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第74号 平成9年7月31日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が都市基盤整備公団関西支社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成11年9月30日~平成12年2月1日にかけて西村公助・岡田清一が担当した。調査面積は2160㎡である。現地調査においては、伊藤静江・岩沢玲子・垣内洋平・川村一吉・巖崎潤子・後藤 喬・小林範彰・田高宣子・永井律子・中村百合・村田知子・吉川一栄が参加した。
1. 整理業務は、平成15年6月2日~平成16年3月25日に実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-伊藤・岩沢・加藤邦枝・永井・中村・村田・山内千恵子・吉川・若林久美子、図面トレース-北原清子・村井俊子・村田・山内、図面レイアウト-原田、遺物写真-垣内が行った。
1. 本書の執筆は、調査終了報告書および調査担当者との検討を基にして原田昌則が行ったが、第3章第3節第1面の不明遺構については岡田清一が行った。
1. 現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からの協力とご指導を受けた。
小林義孝・森屋直樹(大阪府教育委員会)、赤木克祝・福岡澄男・西村 歩・三宮昌弘・江浦 洋・後藤信義・佐伯博光・若林邦彦・本田奈都子((財)大阪府文化財センター)、松尾信裕・趙 哲済((財)大阪市文化財協会)、松田順一郎((財)東大阪市文化財協会)、都市基盤整備公団関西支社、(株)ワールド、池田工業(株)、安西工業(株)、(株)関西開発エンジニアリング、(株)近畿ウレタン、(株)ベックス(順不同・敬称略)
なお、自然科学分析および遺構保存については、下記の個人ならびに諸機関に委託した。
【出土人骨DNA鑑定】森泉俊幸(株)ベックス
【301号方形周溝墓の埋葬主体部の切り取りおよび保存処理】(株)近畿ウレタン
1. 土器の形式・編年および検出遺構で参考とした文献についてはP57に提示した。

本 文 目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 地理・歴史的環境	2
第3章 調査概要	12
第1節 調査の方法と経過	12
第2節 基本層序	15
第3節 検出遺構と出土遺物	21

1) 各調査区の概要	21
2) 遺構に伴わない遺物	56
第4章 自然科学的分析	59
第1節 久宝寺遺跡28次調査 (KH99-28) 出土人骨DNA鑑定業務	59
第5章 まとめ	64

挿 図 目 次

第1図 久宝寺遺跡周辺の遺跡分布図	3
第2図 調査地周辺の発掘調査位置図	9
第3図 調査地地区割り模式図	13
第4図 調査区設定図	14
第5図 1・2調査区基本層序	17-18
第6図 3・4調査区基本層序	19-20
第7図 SK102出土遺物実測図	21
第8図 SK102平断面図	22
第9図 SK105出土遺物実測図	22
第10図 第1面～第3面検出遺構平面図	23-24
第11図 SK105平断面図	25
第12図 SK106出土遺物実測図	25
第13図 SK106平断面図	26
第14図 SK107平断面図	27
第15図 SD115出土遺物実測図	30
第16図 SP124、SP132、SP133出土遺物実測図	33
第17図 NR101西壁断面図	35
第18図 SX101、SX102平断面図	36
第19図 SX102付近出土遺物実測図	37
第20図 SK102平断面図	38
第21図 SD201西壁断面図	39
第22図 1調査区 南部水田平断面図	40
第23図 2調査区 中部水田平断面図	42
第24図 4調査区 北部水田平断面図	43
第25図 NR201断面図	45
第26図 NR201出土遺物実測図	46
第27図 NR202西断面図	47
第28図 NR202出土遺物実測図	47
第29図 301号方形周溝墓出土遺物実測図	49

第30図	301号、302号方形周溝墓平断面図	50
第31図	301号方形周溝墓平断面図	51
第32図	301号方形周溝墓主体部平断面図	51
第33図	302号方形周溝墓出土遺物実測図	52
第34図	302号方形周溝墓平断面図	53
第35図	302号方形周溝墓主体部平断面図	53
第36図	S D301西壁断面図	55
第37図	第Ⅲ層出土遺物実測図	56
第38図	第Ⅴ層・第Ⅹ層出土遺物実測図	56
第39図	第Ⅻ層出土遺物実測図	57
第40図	本調査地周辺の古墳時代初頭前半（庄内式古相）～前期前半（布留式古相）の集落分布図	65

写 真 目 次

写真1	旧国鉄竜華操車場跡地から東方生駒山地を望む	1
写真2	4調査区第2面北部水田調査風景	15
写真3	S X102検出状況	37
写真4	N R201西壁検出状況	44
写真5	N R202検出状況	46
写真6	301号方形周溝墓埋葬主体部取り上げ風景	54

表 目 次

第1表	調査地周辺の発掘調査一覧表	10-11
第2表	調査区一覧表	12
第3表	S D122～S D125・S D127～S D134法量表	31
第4表	S D135・S D141・S D146・S D150法量表	31
第5表	S D136～S D140・S D142～S D149法量表	32
第6表	S P101～S P106法量表	32
第7表	S P107～S P112法量表	32-33
第8表	S P113～S P136法量表	33-34
第9表	S P137～S P162法量表	34
第10表	南部水田 水田法量表	41
第11表	南部水田 畦畔法量表	41
第12表	北部水田 水田法量表	44

図版目次

図版一	調査地遠景 調査地遠景		図版一三	28-2 調査区 NR202検出状況 28-2 調査区 NR202細部
図版二	28-1 調査区 第1面全景 28-2 調査区 第1面全景		図版一四	28-4 調査区 北部水田検出状況 28-4 調査区 同上
図版三	28-3 調査区 第1面全景 28-4 調査区 第1面全景		図版一五	28-3 調査区 301号方形周溝墓・ 302号方形周溝墓検出状況 28-3 調査区同上
図版四	28-1 調査区 SK102検出状況 28-1 調査区 同上 遺物出土状況		図版一六	28-3 調査区 301号方形周溝墓 検出状況 28-3 調査区 同上 主体部 完掘状況
図版五	28-2 調査区 SK104他検出状況 28-2 調査区 SK105検出状況		図版一七	28-3 調査区 302号方形周溝墓 検出状況 28-3 調査区 同上 主体部 検出状況
図版六	28-2 調査区 SK106検出状況 28-3 調査区 SK107検出状況		図版一八	28-1 調査区 下部調査状況 28-2 調査区 下部調査状況
図版七	28-3 調査区 SK108検出状況 28-3 調査区 SD115遺物出土状況		図版一九	28-3 調査区 下部調査状況 28-4 調査区 下部調査状況
図版八	28-2 調査区 NR101検出状況 28-1 調査区 溝および小穴検出状況		図版二〇	SK102、SK106、SD115、 SP132、SP133出土遺物
図版九	28-3 調査区 SX101・SX102 検出状況 28-3 調査区 SX101検出状況		図版二一	SX102、NR201、NR202
図版一〇	28-3 調査区 SX102検出状況 28-3 調査区 同上		図版二二	NR202出土遺物
図版一一	28-1 調査区 第2面全景 28-2 調査区 第2面全景		図版二三	301号方形周溝墓、302号方形周溝 墓、第Ⅲ層、第Ⅴ層、第Ⅹ層、第 Ⅺ層出土遺物
図版一二	28-3 調査区 第2面全景 28-4 調査区 第2面全景			

第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は、1935年(昭和10年)に小字西口・栗林(現八尾市久宝寺5丁目)で行われた道路工事中に船の残片とともに弥生時代中期～古墳時代の遺物が発見され、遺跡として認識されるようになった。考古学的な調査は1973年(昭和48年)度以降で、遺跡の西部を縦断する近畿自動車道建設の計画に伴い、(財)大阪文化財センター(現、(財)大阪府文化財センター)による試掘調査が実施されている。この調査では、弥生時代～中世に至る遺構・遺物が広範囲にわたって重層的に検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。昭和57年以降は大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道建設に伴う発掘調査、ならびに八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会・(財)東大阪市文化財協会による発掘調査が随所で継続して実施されており、縄文時代晩期～近世に至る遺構・遺物が検出されている。主な調査成果を調査順に列挙すれば、1983年(昭和58年)に(財)大阪文化財センターにより実施された久宝寺南(その2)では、古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される我国最古の準構造船の発見があり、内海の河内湖南岸に近接した久宝寺遺跡が当該期には「湾津」的な役割を果たした集落を形成していたことを示す資料として注目された。1991年(平成3年)に八尾市北亀井3丁目で当調査研究会が実施した第9次調査(K H91-9)では、古墳時代前期前半(布留式古相)の2棟の住居内から重圏文鏡と素文鏡が出土したほか、近接する地点からは墳丘長35mを測る前方後方墳の「久宝寺古墳」が検出されており、中河内地域における古墳文化受容期の在り方を知る上で貴重な資料を提供した。また、1994年(平成6年)に八尾市神武町で当調査研究会が行った第18次調査(K H94-18)では、古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される朝鮮半島の南部に淵源を持つ炉形土器・軟質両耳甕が出土しており、西接する大阪市の加美遺跡第1次調査(K M84-1)の1号方形周溝墓出土の陶質土器(朝鮮三国時代初頭)の存在とともに、遺跡範囲の西部を中心に、渡来系集団の集落が存在した可能性が強くなってきた。この様に、久宝寺遺跡では、特に古墳時代初頭～前期を中心として、広範囲にわたって数多くの集落が形成されたことが知られている。

今回の調査地点である旧国鉄竜華操車場跡地(約24.6ha)は、遺跡範囲の南部を横断する形で展開する広大な敷地で、遺跡総面積の約1/7を占めている。竜華操車場が1986年(昭和61年)に国鉄民営化に先立って廃止されると、同年7月に八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が発表され、再開発が進められることとなった。再開発はまず駅周辺から着手され、1988年(昭和63年)度の八尾市教育委員



写真1 旧国鉄竜華操車場跡地から東方生駒山地を望む(西から)

会による駅舎新設に伴う試掘調査を皮切りとして、駅舎および自由通路を対象とした当調査研究会による1990年(平成2年)度の第4次調査、1996年(平成8年)度の第20次調査、(財)大阪府文化財調査研究センターによる1995年(平成7年)度の95-8・9トレンチの調査が実施された。また、これらの調査と並行して、換車場北側の新線路予定地においては、1995年(平成7年)度に試掘調査(95-1~7トレンチ)が、さらに1995年(平成7年)度~1998年(平成10年)度には、換車場中央地下を南北に縦断する一般府道住吉八尾線の付け替えに伴う発掘調査(96-1、97-1、98-1・2トレンチ)が、それぞれ(財)大阪府文化財調査研究センターにより実施された。1997年(平成9年)度以降は、「八尾都市計画事業大阪電華都市拠点土地区画整理事業」の一環として、公共施設建設地および新設道路部分を中心とした発掘調査の計画が策定され、(財)大阪府文化財調査研究センター(現(財)大阪府文化財センター)及び当調査研究会による発掘調査が継続的に実施されている。これら一連の調査では、縄文時代晩期~近世に至る遺構・遺物が広範囲にわたって検出されている。その中でも特に新たに検出された約70基におよぶ古墳時代初頭~前期の墳墓群の存在は、古墳文化受容期における中河内地域の墓制の在り方を推定するうえで示唆に富む資料を提供する結果となった。

本書で報告する久宝寺遺跡第28次調査(KH99-28)は、平成11年度に区画道路1号線建設に伴って実施した発掘調査である。総調査面積は2160㎡を測る。発掘調査は八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき実施した。調査は「大阪電華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」に基づいて、住宅・都市整備公団関西支社(平成11年10月から都市基盤整備公団関西支社)、(財)八尾市文化財調査研究会とによる業務委託契約書の締結後、現地調査に着手した。

現地発掘調査期間は平成11年9月30日~平成12年2月1日である。内業整理業務は平成15年6月2日~平成16年3月25日に実施した。

第2章 地理・歴史的環境

久宝寺遺跡は、大阪府八尾市西部の久宝寺1~6丁目・西久宝寺・南久宝寺1~3丁目・北久宝寺1~3丁目・亀井・渋川・渋川町1~7丁目・神武町・北亀井町1~3丁目および東大阪市大連東5丁目・大連南2丁目一帯の東西1.6km、南北1.7kmの範囲に展開する縄文時代後期~近世にかけての複合遺跡である。久宝寺遺跡周辺の遺跡群は、近畿自動車道建設に伴う調査や市単位の調査が数多く実施されており、考古学的な蓄積資料も比較的多い。周辺に隣接する遺跡としては、北に佐堂遺跡・美園遺跡、東に宮町遺跡・八尾市内町遺跡・成法寺遺跡・竜華寺跡が長瀬川を挟んで対峙する他、南東に渋川廃寺、南に跡部遺跡・亀井遺跡、南西に竹湖遺跡、西に大阪市の加美遺跡が位置している。また、遺跡範囲内には遺跡名でもある久宝寺寺内町遺跡が存在している。

八尾市を包括する中河内地域の地勢は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を渋川に画されている河内平野の南部にあたる。河内平野の形成については、海水面の昇降による侵食面の移動と、旧人知川と渋川による堆積作用との相互作用によるものと考えられ



- | | | | |
|----------|------------|--------------|-----------|
| 1 若江遺跡 | 14 萱振遺跡 | 27 龜井北遺跡 | 40 榑松南遺跡 |
| 2 若江北遺跡 | 15 東郷遺跡 | 28 竹河遺跡 | 41 太子堂遺跡 |
| 3 上小阪遺跡 | 16 東郷南寺 | 29 亀井遺跡 | 42 菅沼南遺跡 |
| 4 小南江遺跡 | 17 穴太南寺 | 30 野部遺跡 | 43 瓜破遺跡 |
| 5 西郷遺跡 | 18 宮町遺跡 | 31 野部遺跡銅鐸出土地 | 44 瓜破南寺 |
| 6 山賀遺跡 | 19 佐堂遺跡 | 32 洲川南寺 | 45 三宅東遺跡 |
| 7 西郷南寺 | 20 八尾寺内町遺跡 | 33 成法寺遺跡 | 46 三宅東遺跡 |
| 8 西郷南寺遺跡 | 21 久宝寺内町遺跡 | 34 小阪合遺跡 | 47 長吉野山遺跡 |
| 9 衣領遺跡 | 22 久宝寺遺跡 | 35 中田遺跡 | 48 長原遺跡 |
| 10 物刀遺跡 | 23 加美遺跡 | 36 東弓南遺跡 | 49 城山古墳跡 |
| 11 加美北遺跡 | 24 長來南寺 | 37 矢作遺跡 | 50 六反古墳跡 |
| 12 友井東遺跡 | 25 平野寺前遺跡 | 38 亀草寺跡 | 51 蔵重遺跡 |
| 13 美園遺跡 | 26 平野環濠都市 | 39 榑松遺跡 | 52 別所遺跡 |
| | | | 53 大庭遺跡 |
| | | | 54 八尾南遺跡 |
| | | | 55 木の本遺跡 |
| | | | 56 老野遺跡 |
| | | | 57 志紀遺跡 |
| | | | 58 田井中遺跡 |
| | | | 59 太田遺跡 |
| | | | 60 河原遺跡 |
| | | | 61 本郷遺跡 |

第1図 久宝寺遺跡周辺の遺跡分布図(S=1/40000)

ている。特に、河内平野南部については、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が北西方向に放射状に流下しており、平野部にみられる自然堤防・扇状地性低地・三角州性低地等の地形形成については、これらの河川の堆積作用によるところが大きい。久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と平野川に挟まれた扇状地性低地に分類される沖積地に展開した遺跡で、現地表面の海拔高は9.5m前後を測る。以下、当遺跡周辺の遺跡を中心に時期ごとに概観してみる。

後水期の大阪平野（河内平野）の発達史については、梶山彦太郎・市原実由氏による研究により九つの時代に区分されている。それらの研究成果から考察すれば、遺跡周辺で人々の足跡が認められるのは縄文時代晩期で、河内湾の淡水化が進行し河内潟が形成された時期（河内潟の時代）にあたる。周辺遺跡では、新家・山賀・亀井の各遺跡から縄文時代晩期の土器片が出土しているほか、長原遺跡では集落が検出されている。本遺跡を含む中河内地域の沖積低地部においては、当該期の生活面が深層に埋没しているのが一般的であり、一部の調査を除けば、当該期の文化層まで調査深度が至らない場合が大半であり、遺跡の全体像の把握が困難な場合が多い。本遺跡内においては、近畿自動車道に伴う久宝寺北（その1）の調査で縄文時代晩期の遺物包含層がT.P.+4.7m前後に存在することが確認されている他、本調査地に近接した位置で（財）大阪府文化財センターにより実施された多目的広場の調査では、縄文時代晩期の埋壘が検出されている。弥生時代前期には、水稲耕作の導入に伴って河内潟に注ぐ河川により形成された微高地および自然堤防を中心に数多くの集落が営まれている。前期の古段階に成立するものとしては若江北遺跡・山賀遺跡・八尾南遺跡がある他、中段階から新段階にかけて成立するものとしては美園遺跡・亀井遺跡・城山遺跡・瓜破遺跡・長原遺跡・跡部遺跡・中田遺跡・田井中遺跡がある。本遺跡内では、前期新段階の集落が久宝寺南（その1・その2）、第23次調査（KH97-23）の第8調査区、水処理施設で検出されている。

弥生時代中期には河内潟の陸化に伴って、新たに瓜生堂遺跡・巨摩庵寺遺跡・若江北遺跡・加美遺跡・東郷遺跡・小阪合遺跡・木の本遺跡・東弓削遺跡・弓削遺跡が成立している。また、水稲耕作を中心とした安定した基盤を背景として、集落規模の拡大化を計っており、亀井遺跡に象徴される拠点集落の出現や瓜生堂遺跡2号方形周溝集落や加美遺跡のY1号墓に代表される大形の墳丘墓の存在は、弥生文化が昇華した証を可視的に示している。本遺跡内の居住域は、中期中葉から後葉（第Ⅲ様式・第Ⅳ様式）にかけては遺跡範囲の中央部から西部を中心に検出されている。墓域や生産域については、居住域の北西部や西部が利用されており、特に墓域については西接する加美遺跡を含めて大形の墳丘墓が検出されている。一方、当該期を象徴付ける銅鐸については、跡部遺跡第5次調査（AT89-5）で埋納された扁平紐式流水文銅鐸が検出されている他、亀井遺跡からは扁平式と突線紐式の銅鐸片が出土している。

弥生時代後期になると中期の生活面を流水堆積層が厚く覆っている例が平野部の各遺跡で検出されており、自然環境が不安定であったことが推定されている。前代から続く既存の集落は、環濠集落の解体に連動して等質的な集落が点在する散村的な集落形態に移行を余儀なくされたようである。本遺跡内では後期前半の集落が久宝寺南（その1）で検出されている程度で、前代に比して集落は減少している。後期後半の集落は、前代に比して増加しており、遺跡範囲東部の第8次調査（KH91-8）、北西部の府教委1991年度調査、南東部の第29次調査（KH99-29）で検

出されている。

古墳時代初頭(庄内式期)～前期(布留式期)においては、前代に比して集落の増加が顕著で、西岩田遺跡・山賀遺跡・瓜生堂遺跡・佐堂遺跡・友井東遺跡・美園遺跡・小若江北遺跡・久宝寺遺跡・亀井遺跡・加美遺跡・竹洲遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡・木の本遺跡・八尾南遺跡・長原遺跡・瓜破遺跡等で検出されている。この時期を通じての集落の在り方は前代と同様、土器型式の1型式ないしは長くても2型式程度の期間に居住域が移動を繰り返す形で推移したことが推定される。当該期の集落推移は、庄内式古相から中相にかけては漸増的な増加が認められるが、庄内式新相～布留式古相においては爆発的に集落数が増加し、布留式古相をピークとして集落が減少する流れが看取される。特に集落数が急増する庄内式新相～布留式古相においては、吉備・山陰・播磨・阿波・讃岐・摂津・東海・北陸・南関東等の各地域からの搬入土器の占める割合が高く、物的交流のほか、移住者等の人的交流も想定されている。久宝寺遺跡では、第18次調査(KH94-18)で朝鮮半島南部にその淵源を持つ方形土器・軟質両耳甕が出土しており、さらに西接する加美遺跡1次調査(KM84-1)の1号方形周溝墓からは陶質土器(朝鮮三国時代初頭)が出土していることから、交流が国内に留まらず海外におよんだことが窺われる。これらの要因としては、準構造造船に代表される造船技術の確立や北方に広がる河内湖を通じて海上交通が容易な地点に久宝寺遺跡が立地し港津的な役割を果たしたことに他ならない。一方、当該期における古墳については、方形周溝墓を中心とした前代の墓制形態が継承されるものの、布留式古相以降は、古墳文化受容の着実な浸透の中で、庄内式期に見られた等質な造墓形態から脱却して、墳形の多様化、主体部構造の変化、鏡類の副葬、埴輪の使用等の質的变化が進行し、前期後半段階において他地域に遅れて定型化した古墳の出現をみるのである。平野部で検出されたものに限定すれば、庄内式期では、加美遺跡・亀井北遺跡・久宝寺遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡・萱振遺跡・八尾南遺跡、布留式期では、加美遺跡・友井東遺跡・久宝寺南遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡等の遺跡で検出されている他、布留式新相には、中河内地域の首長層がヤマト政権との従属的な関係を結んだ結果として、萱振1号墳・美園古墳・塚ノ本古墳が出現している。久宝寺遺跡内では第9次調査(KH91-9)、第22次調査(KH97-22)、第23次調査(KH97-23)、第28次調査(KH99-28)、第37次調査(KH2001-37)、多目的広場、水処理施設で庄内式古相～布留式新相の墳墓が約80基検出されている。なかでも、多目的広場で検出された「久宝寺1号墳」では割竹形木棺や墳丘四隅に底部穿孔甕を配置する葬送儀礼の一端が明らかにされた他、第9次調査で検出された前方後方墳の「久宝寺古墳」を含めて中河内地域における古墳文化受容期の様相を推考するうえで示唆に富む資料を提供している。

古墳時代中期の集落位置は前代に符合した形で推移している。5世紀代の河内平野南部で集落を形成した集団は、南部の羽曳野丘陵で展開される古市古墳群の造営や、『紀紀』にみる治水事業を始めとする大規模な土木工事の推進の一躍を担っていたことは想像に難くない。久宝寺遺跡内においても、旧大和川水系の本流に設置された大規模な堰が検出されており、土木技術の向上や鉄製農具の進化と普及が河内平野の開発を推進した要因であったと推定される。また、当該期における須恵器や韓式系土器に代表される新出土器の出現や土木・工芸・馬銅等の新来技術の導入については、土器相の変化に表出されるように朝鮮半島を中心とする渡来系集団との関係が留意される。当該期の古墳は、小規模な方墳が主体で平野部においては全て埋没した形で検出され

ており、長原遺跡・八尾南遺跡・城山遺跡のように群集化するものと、友井東遺跡・巨摩遺跡・亀井遺跡・竹淵遺跡のような単独墳がある。続く、古墳時代後期の集落は山賀遺跡・友井東遺跡・萱振遺跡・矢作遺跡・中田遺跡・小阪合遺跡・東郷遺跡・久宝寺遺跡・太子堂遺跡・跡部遺跡・竹淵遺跡・長原遺跡で検出されており、比較的集落規模の小さなものが大半を占めている。当該期の集落の特徴としては、後期全般を通して継続する集落が少ないことや、後期前半に廃絶する集落が比較的多いこと、更には、後期後半段階に集落の増加と分散化が偏在化していることが指摘される。一方、後期古墳の推移は、長原古墳群が古墳造営を停止した後期中葉以降、平野部での築造は激減し、それ以降は生駒山地西麓部に展開する高安古墳群内に造墓位置を変えている。久宝寺遺跡内では、七ツ門古墳（6世紀中葉）が検出されており、長原遺跡内の七ノ坪古墳（5世紀末）とあわせて、平野部における数少ない横穴式石室を持つ古墳として貴重である。当該期の古墳の在り方は、小形方形墳を主体とする従前の墓制形態が、横穴式石室を主体部に持つ円墳へと変化する時期と符号しており、後期中葉以降は一部の例外を除けば、平野部が居住域と生産域、生駒山地西麓部が墓域としての分化が図られている。こうした推移の変化は、大和政権による地域の生産体制の強化が、再編成された在地系・渡来系の有力氏族に委ねられた結果を示すものと理解される。

当該期における遺跡周辺の文献史料としては、政治顧問として百濟から口羅を招き阿斗の桑市に館をつくり住まわせる『日本書紀敏達十二年七月(583)』、物部守屋と蘇我馬子の仏教の摂取をめぐる論争、守屋怒って阿部に帰る兵を集める、『日本書紀用明二年四月(587)』等があり、後の『和名類聚抄』（以下『和名抄』）にみる淡川郡の跡部郷に関わる有力豪族の物部連の枝族として阿刀氏との関係が考えられる。一方、郡名である「淡川」については、『日本書紀崇峻天皇即位前紀用明二年七月(587)』の「從_レ志紀郡_一。到_レ淡河家_一。」が初見であり、郡名としては河内国淡川郡の柏原廣山が兵衛を偽ったため土佐に流される『日本書紀持統三年七月(689)』が初見である。

飛鳥・奈良時代の集落は萱振遺跡・成法寺遺跡・東郷遺跡・久宝寺遺跡・太子堂遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・弓削遺跡・東弓削遺跡・長原遺跡等で検出されている。また、大和と難波津を結ぶ交通の要衝であった中河内地域は、大和飛鳥地域と同様、仏教文化の受容は早く、渡来系氏族集団を権越として多くの氏寺の建立が認められている。久宝寺遺跡を中心とする平野部に限って、『和名抄』による河内国の郡界別に区別すれば、若江郡の西郡麿寺(奈良時代前期～鎌倉時代)・東郷麿寺(飛鳥時代後期～平安時代前期)・弓削寺(奈良時代後期～鎌倉時代)、淡川郡の淡川麿寺(飛鳥時代前期～室町時代)・竜華寺(奈良時代後期～鎌倉時代)・鞍作麿寺(奈良時代)、志紀郡の五条宮跡(奈良時代後期～平安時代後期)、丹北郡の瓜破麿寺(奈良時代)がある。

一方、『続日本紀』には奈良時代後半の天平神護元年(765)～宝亀元年(770)の5年間に亘って若江郡南部を中心とした記事が記されている。全て、称徳天皇による3回におよぶ行幸に関連した内容で、「弓削行宮」「弓削寺」「由義宮」「由義寺」「竜華寺」が見える他、神護景雲三年(769)十月三十日の条には「詔_レ由義宮、為_二西京_一。河内国_レ河内職_一。…」のように若江郡の南部を中心とした一帯に「西の京」の造営が計画されている。翌年の宝亀元年(770)八月四日の称徳天皇崩御により、造都の中止を余儀なくされるが、一時期にあるにせよ「陪都」的な都の造営が計画され歴史の表舞台になったことは特筆される。

平安時代～鎌倉時代の集落は、萱振遺跡・佐堂遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・矢作遺跡・長原

遺跡で検出されている。当該期の集落は、条里区画に基づくものや主要街道、寺社周辺で成立したものが多くある。寺としては、若江郡に穴太魔寺(平安時代後半)、金性寺(平安時代後期)、金剛蓮華寺(平安時代前期)がある。式内社としては、若江郡9社(飯合・欠作・御野県主・弓削・都留美嶋・長柄・渋川・栗栖・加津良)、渋川郡2社(跡部・許麻)、志紀郡1社(楠本)がある。このうち、久宝寺遺跡範囲には許麻神社(久宝寺5丁目)、跡部神社(亀井2丁目)がある。許麻神社は『新撰姓氏録』の河内国諸蕃に記された高句麗系氏族の大狹連に関連するものである。跡部神社は『新撰姓氏録』の左京神別上に記された阿刀氏に関連するもので、石上朝臣(物部氏)と同祖の饒速日命の末裔とされている。なお、当該時期において久宝寺遺跡を包括する一帯は『石清水文書』延久四年(1072)九月五日「渋川郡漆条橋島里」に見るように、「橋島」と称されていたようである。「橋島」と称された範囲は古長瀬川と古平野川に挟まれた地域をさすものと考えられる。なお、遺跡範囲南西部の北亀井町2丁目には、大和西大寺の観尊が文永五年(1268)に十重金戒を講じたとされる釈迦堂跡(千光寺)がある。

室町時代～戦国時代の河内地域は、南北朝期の動乱、畠山氏の内乱に端を発する応仁の乱から戦国時代末期の織田信長の近畿統一に至る長きに亘って戦乱の渦中であったことに符合して、集落数の減少が顕著である。当該期における集落は、若江遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・亀井遺跡等で検出されているが、その多くが防御を目的として集約された集村形態に変化を余儀なくされたものと考えられる。遺跡範囲南西部の北亀井町2丁目には、初代河内国守護であった畠山基国の子、満家の開基である真観寺(応永年間1394～1428)、北部には西証寺(現顕証寺)を中心に天文十年(1541)に寺内特権を得て成立した「久宝寺寺内町」が存在している。

近世の集落は前代の集落と重複して推移している。近世の河内地域は、大坂城の城下町として大坂の都市化が進行する一方で、大消費地への生産物の供給や流通を担う役割を果たしたものと考えられる。なかでも、八尾周辺の本綿は「久宝寺本綿」として知られており、江戸時代中期の宝暦六年(1756)の「河内国渋川郡久宝寺村当子年植附書上帳控」によれば、村内耕地のうち綿作が約7割を占めていたことが窺える。このように、宝永元年(1704)の大和川付け替え以降は旧川筋の新田開発や中河内特有の「芋田」「掻き揚げ田」「島畑」と呼ばれる田畑混在の耕地形態の利用により綿作はさらに急速な発展を遂げ、明治の10年代に衰退するまで地場産品としての役割を果たしたようである。

註記

註1 大乘仏教の戒律に定める10種の重人ないましめ。

註2 八尾市歴史民俗資料館 2002『河内本綿関係資料集1 河内の綿作りと本綿生産』

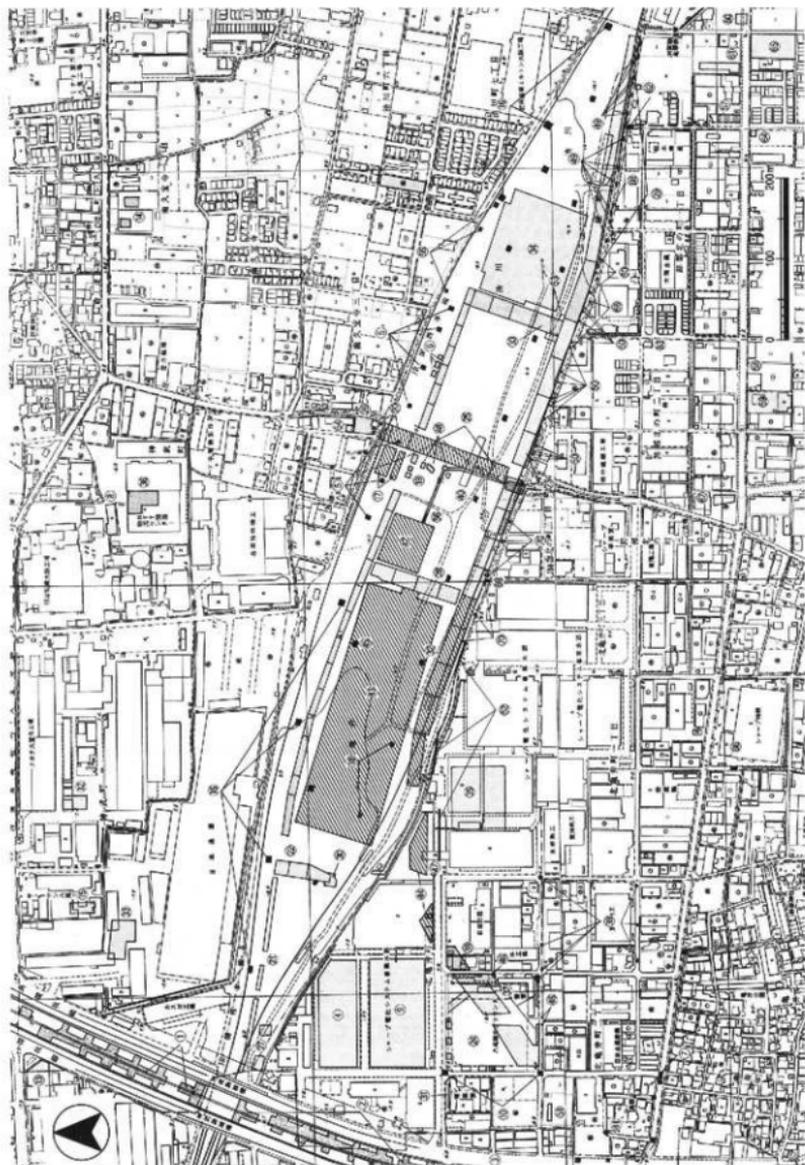
註3 大藏永常 天保4年(1833)『綿圖要務』

註4 大野 薫 1989「島畑の考古学的調査—大阪府池島遺跡の事例—」『郵政考古紀要15』郵政考古学会
本遺構については、大野氏に従って「島畑」を使用した。

参考文献

- ・赤木克規・村上年生他 1987『河内平野の動態1 近畿自動車道天理～吹山建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—プロローグ編—』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・梶山彦太郎・市原実 1986『大阪平野のおいたち』青木書店
- ・(財)大阪市文化財協会 1983『長原遺跡発掘調査Ⅲ』
- ・金光正裕他 1987『久宝寺北(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・松岡良恵他 1987『久宝寺南(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・一瀬和大他 1987『久宝寺南(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

- ・福永信雄 1997「河内潟東・南辺の弥生時代開始期における集落形態について」『宗教と考古学』金岡 恕の古墳をお祝いする会
- ・田代克己・今村道雄他 1981「瓜生堂遺跡Ⅲ 瓜生堂遺跡調査会
- ・田中清美 1986「加美遺跡の検討」『古代を考える43』
- ・安井良三他 1991「跡部遺跡発掘調査報告書—大阪府八尾市春日町1丁目日出土銅鐸—」『(財)八尾市文化財調査研究会報告31』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1997「久宝寺遺跡(第8次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告55』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・小林義孝・西川寿勝 1992「久宝寺遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会
- ・原田昌則・坪田真一・清 斎 2003「久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書—大阪電筆都市拠点地区竜華東西線4工区に伴う—」『(財)八尾市文化財調査研究会報告74』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1995「久宝寺遺跡出土の朝鮮半島系土器について」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第31回資料)』
- ・原田昌則 2001「久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書—大阪電筆都市拠点地区区画整理2号線に伴う—」『(財)八尾市文化財調査研究会報告68』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 2001「中河内地域における定型化する古墳以前の墓制について」『実証の地域史・村川行弘先生頌寿記念論集—』村川行弘先生頌寿記念会
- ・成海佳子 1992「久宝寺遺跡の調査概要」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第25回)資料』大阪府教育委員会
- ・原田昌則・吉田珠己・岡田清一・古川晴久・樋口 薫 1999「8.久宝寺遺跡第23調査(K H 97-23)」『平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助・岡田清一 2000「12.久宝寺遺跡第28調査(K H 99-28)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会 本書掲載
- ・清 斎・金澤満大 2002「11.久宝寺遺跡第37次調査(K H 2001-37)」『平成13年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会 本書掲載
- ・西村 歩 2001「久宝寺1号墳の調査成果」『大阪府埋蔵文化財研究会(第43回)資料』大阪府教育委員会、(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・西村 歩・南条直子 2003「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V」(財)大阪府文化財センター調査報告書第103集 (財)大阪府文化財センター
- ・後川恵太郎 2003「久宝寺遺跡墳墓群の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会(第46回)資料』大阪府教育委員会、(財)大阪府文化財センター
- ・(財)大阪府文化財センター 2002年8月21日「久宝寺遺跡現地説明会資料」
- ・(財)大阪府文化財センター 2003年5月24日「久宝寺遺跡現地公開資料」
- ・山田隆一 1994「古墳時代初頭前後の中河内地域—旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて—」『弥生文化博物館研究報告第3集』大阪府弥生文化博物館
- ・広瀬雅信他 1992「査振遺跡大阪府文化財調査報告書第39輯」大阪府教育委員会
- ・渡辺昌宏他 1985「美岡」大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター
- ・升藤 徹他 1978「長原」大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター
- ・後藤信義・本田奈都子 1996「八尾市亀井所在久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書—JR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う—」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第6集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・後藤信義 1998「久宝寺遺跡セツ門古墳現地検討会資料」(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・赤木克規他 2001「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第60集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・高井健司 1987「城下マシヨーン(仮称)建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(N G 85-23)略報」『昭和60年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪府教育委員会、(財)大阪府文化財調査研究会
- ・櫻井久之 2001「長原遺跡の小方墳」『大阪府埋蔵文化財研究会(第43回)資料』大阪府教育委員会、(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・亀井輝一郎 1976「大和川と物部氏」『日本書紀研究第九冊』塙書房
- ・坂本太郎他 1965「日本書紀下」(株)岩波書店
- ・森田康夫 1980「八尾編年史<古代・中世>」八尾市立図書館
- ・足利健亮 1986「山鏡京の宮城および京域考」『長岡京古文化論叢』中山修 先生古稀記念事業会(株)同朋舎出版
- ・山本 博 1971「竜田越」学生社
- ・古岡哲他 1988「考古編第1～5章」『増補 八尾市史(前近代)本文編』八尾市役所
- ・安井良三他 1991「大阪府八尾市寺院古文書調査報告書(月録)」八尾市教育委員会
- ・棚橋利光 2000「中世八尾における律宗の広がり」『研究紀要 第11号』八尾市歴史民俗資料館
- ・櫻井敏雄、大草一憲 1988「寺内町の基本計画に関する研究—久宝寺寺内町と八尾寺内町を中心として—」八尾市教育委員会



第2図 調査地周辺の発掘調査位置図(S=1/6000)

第1表 調査地周辺の発掘調査一覧表

№	調査名(番号)	調査主任	所在地	調査期間	文 献
1	久宝寺中(その2)	市教委 太文士	神武町	S57/75- S60/630	赤木克規・瀬和夫 1987 『久宝寺中(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター
2	亀井北(その1)	*	大阪市平野区加茂4-2	S59/371- S61/331	小野久隆・藤原文章 1985.3 『亀井北(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター
3	亀井北(その2)	*	大阪市平野区加茂4	S59/370- S61/116	奥 亮之・山本 弘 1986 『亀井北(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター
4	久宝寺1次(KH84-1)	八文研	北亀井3	S59/42- S76	原田昌嗣 1993 『久宝寺遺跡第1次調査』(KH84-1) 『八尾市遺跡文化財発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会37(財)八尾市文化財調査研究会
5	久宝寺遺跡(33-289)	市教委	亀井・渋川	S63/630- H125-28	辻江秀男 1989 『久宝寺遺跡(33-289)の調査』 『八尾市内遺跡和63年度発掘調査報告書』八尾市文化財センター 昭和63年度公事業 八尾市教育委員会
6	久宝寺4次(KH90-4)	八文研	亀井・渋川	R2/42- 6/12	坪田真一 1993 『久宝寺遺跡第4次調査』(KH90-4) 『八尾市遺跡文化財発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会41(財)八尾市文化財調査研究会
7	久宝寺5次(KH90-5)	*	北亀井2	H2/47/19- 4/22	高橋千秋 1991 『久宝寺遺跡第5次調査』(KH90-5) 『八尾市遺跡文化財発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会
8	久宝寺6次(KH90-6)	*	神武町17-20 ~27-38並	H2/9/3- 10/12	原田昌嗣 1993 『久宝寺遺跡第6次調査』(KH90-6) 『八尾市遺跡文化財発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会37(財)八尾市文化財調査研究会
9	久宝寺9次(KH91-9)	*	北亀井3-1 -72	H3/8/1- 12/3	成海佳子 1992 『久宝寺遺跡第9次調査』(KH91-9) 『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
10	久宝寺10次(KH91-10)	*	北亀井2-10	H3/10/2- 10/22	原田昌嗣 1992 『久宝寺遺跡第10次調査』(KH91-10) 『八尾市遺跡文化財発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会34(財)八尾市文化財調査研究会
11	久宝寺11次(KH91-11)	*	法正町6-34-35	H3/10/7- 10/18	白村公助 1992 『久宝寺遺跡第11次調査』(KH91-11) 『財)八尾市文化財調査研究会報告』
12	久宝寺13次(KH91-13)	*	神武町2-35	H3/12/16- H4/1/23	白村公助 1992 『17久宝寺遺跡第13次調査』(KH91-13) 『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
13	久宝寺14次(KH91-14)	*	神武町190-1	H4/5/26- 8/10	坪田真一 1993 『久宝寺14次調査』(KH91-14) 『平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
14	久宝寺17次(KH93-17)	*	久宝寺1-40	H5/7/19- 10/2	岡南博一 1997 『久宝寺遺跡(第17次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告書551(財)八尾市文化財調査研究会
15	久宝寺18次(KH94-18)	*	神武町13-146他	H6/9/7- 7/8	岡南博一 1997 『久宝寺遺跡第18次調査』(KH94-18) 『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
16	久宝寺(95-17トレンチ)	大文研七	亀井・渋川	H7/5/24- 12/20	本間史朗他 1996.3 『八尾市亀井・渋川地区 久宝寺遺跡・奄美地区発掘調査報告』(財)大阪府文化財調査研究会
17	久宝寺(95-89トレンチ)	*	亀井	H7/5/23- 12/20	後藤信徳・平山余都子 1996.3 『八尾市亀井所存 久宝寺遺跡・奄美地区(その1)発掘調査報告書』 『久宝寺寺域外・自治体跡跡めぐり』(財)大阪府文化財調査研究会
18	久宝寺(95-365)	市教委	渋川・亀井	H8/1/9- 7/12	岡南博一・吉田珠己 1997 『久宝寺遺跡(95-365)の調査』 『八尾市内遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財調査研究会37(八尾市教育委員会)
19	久宝寺(KH96-20)	八文研	渋川	H8/9/24- 11/14	坪田真一他 2000 『久宝寺遺跡第20次調査』(KH96-20) 『八尾市文化財調査研究会報告書66』
20	久宝寺196-197トレンチ	大文研七	渋川	H8/2/1-11 10/3/31	後藤信徳他 1998.3 『八尾市渋川所存 久宝寺遺跡・奄美地区発掘調査報告書Ⅱ-一般府道住吉八尾橋付近事業に伴う発掘調査』(財)大阪府文化財調査研究会センター・報告書 第60巻(財)大阪府文化財調査研究会
21	久宝寺22次(KH97-22)	八文研	亀井	H9/10/29- H10/1/13	原田昌嗣 2001 『久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書-大坂電器部品拠点地区西条地区第3工区発掘調査に伴う-』(財)八尾市文化財調査研究会報告書21(財)八尾市文化財調査研究会
22	久宝寺23次(KH97-23)	*	亀井・渋川	H9/10/23- H10/6/30	原田昌嗣・吉田珠己・岡南博一・吉川昭久 他 1999 『久宝寺遺跡第23次調査』(KH97-23) 『平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
23	久宝寺24次(KH98-24)	*	亀井・渋川	H10/2/10- H11/2/20	原田昌嗣 2001 『久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書-大坂電器部品拠点地区西条地区第3工区発掘調査に伴う-』(財)八尾市文化財調査研究会報告書62(財)八尾市文化財調査研究会
24	久宝寺25次(KH98-25)	*	北亀井	H11/1/29- 7/15	原田昌嗣・坪田真一 基本のみ・吉川昭久 1999 『10久宝寺遺跡第25次調査』(KH97-25) 『平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
25	久宝寺(98-1-98-2)	大文研七	渋川	H10/3/16- H11/1/4	赤木克規他 2001 『久宝寺遺跡・奄美地区発掘調査報告書Ⅲ』(財)大阪府文化財調査研究会センター・調査報告書 60巻(財)大阪府文化財調査研究会センター
26	久宝寺26次(KH99-26)	八文研	神武町193-1	H11/3/23- 8/20	岡南博一他 2002 『久宝寺遺跡(久宝寺)和成町93-1の道路築造に伴う久宝寺遺跡第26次発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告書22(財)八尾市文化財調査研究会
27	久宝寺27次(KH99-27)	*	北亀井3-1 -72	H11/5/17- 7/21	西村公助 2000 『久宝寺遺跡第27次調査』(KH99-27) 『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
28	久宝寺28次(KH99-28)	*	亀井	H11/9/1- H12/3/10	本書1掲載
29	久宝寺29次(KH99-29)	*	渋川	H11/9/1- H12/11/30	原田昌嗣・坪田真一・吉川 2003 『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書Ⅳ-阪電部品拠点地区西条第3工区発掘調査に伴う-』(財)八尾市文化財調査研究会事業報告23(財)八尾市文化財調査研究会
30	久宝寺30次(KH99-30)	*	亀井・渋川	H12/1/30- 3/17	原田昌嗣・西村公助・岡南博一 2000 『13久宝寺遺跡第30次調査』(KH99-30) 『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
31	久宝寺31次(KH99-31)	*	亀井	H12/2/8- 3/30	西村公助 2000 『14久宝寺遺跡第31次調査』(KH99-31) 『(財)八尾市文化財調査研究会報告書65』(財)八尾市文化財調査研究会
32	久宝寺(99-1-5)	大文研七	亀井	H11/3/2- 12/24	未報告
33	久宝寺32次(KH99-32)	八文研	神武町136他	H12/3/13- 6/8	森本のみ 2000 『15久宝寺遺跡第32次調査』(KH99-32) 『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
34	久宝寺33次(KH2000-33)	*	渋川	H12/5/9- H13/2/28	成海佳子・橋口 隆・斎藤典夫 2001 『久宝寺遺跡第33次調査』(KH2000-33) 『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
35	久宝寺34次(KH2000-34)	*	亀井3-41	H12/7/18- 11/25	岡南 2001 『13久宝寺遺跡第34次調査』(KH2000-34) 『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

番号	調査名(略号)	調査主体	所在地	調査期間	文 献
36	久宝寺35次(KH2000-35)	八文研	神武町1番 29	H12/10/16 ~11/14	森本のぐみ 2001 「6.久宝寺遺跡第35次調査」(KH2000-35)〔平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書〕(財)八尾市文化財調査研究会
37	久宝寺36次(KH2000-36)	*	北亀井町	H13/1/10- 2/23	本書目掲載
38	久宝寺37次(KH2001-37)	*	亀井	H13/9/10- 11/17	本書目掲載
39	久宝寺38次(KH2001-38)	*	北亀井町2- 3	H14/1/9- 12/20	渡辺千秋 2003 「Ⅱ久宝寺遺跡第38次調査」(KH2001-38)〔財)八尾市文化財調査研究会報告書75〕(財)八尾市文化財調査研究会
40	久宝寺39次(KH2001-39)	*	亀井	H14/1/22- 9/30	草田昌記・成澤洋子・森本のぐみ・金藤満夫 2003 「16.久宝寺遺跡第39次調査」(KH2001-39)〔平成14年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書〕(財)八尾市文化財調査研究会
41	久宝寺40次(KH2001-40)	*	北亀井2	H14/2/19- 7/29	森本のぐみ・坪田真一 2003 「Ⅲ久宝寺遺跡第40次調査」(KH2001-40)〔財)八尾市文化財調査研究会報告書76〕(財)八尾市文化財調査研究会
42	多目的広場	大文研七	亀井	H13/2/27- H14/3/22	西村 歩・南条直子 2003 「久宝寺遺跡・電車地区発掘調査報告書V」〔(財)大阪文化財センター調査報告書 第103集〕(財)大阪文化財センター
43	水処理施設(その1-その2)	*	亀井	H14/3/20- H14/2/28	未報告
44	電車東西線(その2)	大府文セ	亀井	H14/1/22- 8/31	未報告
45	水処理施設(その3)	*	亀井	H14/4/1- H16/2/27	未報告
46	久宝寺41次(KH2000-41)	八文研	亀井町2	H14/7/29- 8/19	吉村公助 2003 「Ⅳ久宝寺遺跡第41次調査」(KH2000-41)〔財)八尾市文化財調査研究会報告書75〕(財)八尾市文化財調査研究会
47	久宝寺42次(KH2000-42)	*	亀井町3- 41	H14/8/30- 10/24	樋口 真 2003 「19.久宝寺遺跡第42次調査」(KH2000-42)〔平成14年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書〕(財)八尾市文化財調査研究会
48	久宝寺43次(KH2000-43)	*	渋川	H14/10/7- 11/25	坪田真一・金藤満夫 2003 「20.久宝寺遺跡第43次調査」(KH2000-43)〔平成14年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書〕(財)八尾市文化財調査研究会
49	久宝寺44次(KH2000-44)	*	渋川	H14/11/26- ~H13/3/10	青田清一 2003 「Ⅴ久宝寺遺跡第44次調査」〔財)八尾市文化財調査研究会報告書76〕(財)八尾市文化財調査研究会
50	久宝寺45次(KH2000-45)	*	新郷北の町 1-2・渋川	H14/11/29- ~H15/3/10	成海生子 2003 「Ⅵ久宝寺遺跡第45次調査」〔財)八尾市文化財調査研究会報告書76〕(財)八尾市文化財調査研究会
51	久宝寺46次(KH2002-46)	*	亀井	H15/1/30- 2/10	金藤満夫 2003 「23.久宝寺遺跡第46次調査」(KH2002-46)〔平成14年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書〕(財)八尾市文化財調査研究会
52	久宝寺47次(KH2002-47)	*	北亀井2・ 3	H15/2/28- 3/31	成海生子 2003 「24.久宝寺遺跡第47次調査」(KH2002-47)〔平成14年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書〕(財)八尾市文化財調査研究会
53	久宝寺48次(KH2000-48)	*	渋川	H15/3/10- 8/31	坪田真一 2003 「25.久宝寺遺跡第48次調査」(KH2000-48)〔平成14年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書〕(財)八尾市文化財調査研究会
54	久宝寺49次(KH2000-49)	*		H15/8/11- 8/28	未報告
55	久宝寺50次(KH2000-50)	*	渋川	H15/6/23- 6/3	未報告
56	久宝寺51次(KH2000-51)	*	亀井	H15/6/19- 7/31	未報告
57	跡部(S56調査)	市教委	春日町1- 57	S56/11/9- 11/19	高木貞光 1983.3 「第6章 跡部遺跡発掘調査概要報告」〔八尾市埋蔵文化財発掘調査機関報1980-1981〕八尾市教育委員会
58	跡部1次(A T82-1)	八文研	跡部本町1- 3	S57/10/1- 10/5	西村公助 1983 「11. 跡部遺跡」跡部57年度における埋蔵文化財発掘調査とその成果と教養 八尾市教育委員会
59	跡部4次(A T88-4)	*	跡部本町1- 4-1	S63/10/1- 10/22	西村公助 1989 「19. 跡部遺跡(第4次調査)」〔八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度〕(財)八尾市文化財調査研究会編25
60	跡部5次(A T89-5)	*	春日町1- 45-1	E1/10/15- 11/30	安井長三郎 1993 「1. 跡部遺跡発掘調査報告」一人版附八尾市春日町「了山土銅器」(財)八尾市文化財調査研究会報告
61	跡部7次(A T92-7)	*	春日町1- 47-48	H4/7/9- 8/10	原山昌記 1993 「1. 跡部遺跡(A T92-7) 第7次調査」〔八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書〕(財)八尾市文化財調査研究会報告
62	跡部9次(A T92-9)	*	春日町1	H4/10/7- 10/13	原山昌記 1993 「1. 跡部遺跡(A T92-9) 第9次調査」〔八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書〕(財)八尾市文化財調査研究会報告
63	跡部14次(A T99-14)	*	新郷北の町 1丁B	H5/11/18- 12/10	渡辺千秋 1994 「1. 跡部遺跡第14次調査」(A T99-14)〔財)八尾市文化財調査研究会機関報1992〕(財)八尾市文化財調査研究会
64	跡部17次(A T94-17)	*	千手堂1	H6/9/16- 11/18	成澤洋子 1997 「2. 跡部遺跡第17次調査」(A T94-17)〔財)八尾市文化財調査研究会報告書38〕(財)八尾市文化財調査研究会
65	跡部23次(A T96-23)	*	春日町4- 4	H9/2/21- 3/31	原田昌記 1997 「2. 跡部遺跡(A T96-23) 第23次調査」〔平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書〕(財)八尾市文化財調査研究会報告
66	跡部28次(A T98-28)	*	跡部本町4- 7/6	H10/6/29- 7/6	森本のぐみ 2000 「1. 跡部遺跡第28次調査」(A T98-28)〔(財)八尾市文化財調査研究会報告書65〕(財)八尾市文化財調査研究会
67	跡部	市教委	新郷北の町 2	H13/10-11	小林義孝 2002 「跡部遺跡」〔大阪府埋蔵文化財調査報告書2001-6〕大阪府教育委員会
68	跡部33次(A T2002-33)	八文研	新郷北の町 1-2・春日	H14/5/16- 9/9	成海生子他 2003 「1. 跡部遺跡第33次調査」(A T2002-33)〔(財)八尾市文化財調査研究会報告書75〕(財)八尾市文化財調査研究会
69	跡部34次(A T2002-34)	*	新郷北の町 3	H14/9/2- 9/11	坪田真一 2003 「1. 跡部遺跡第34次調査」(A T2002-34)〔(財)八尾市文化財調査研究会報告書75〕(財)八尾市文化財調査研究会
70	跡部35次(A T2002-35)	*	新郷北の町 3	H14/12/9- H15/1/14	金藤満夫 2003 「1. 跡部遺跡第35次調査」(A T2002-35)〔(財)八尾市文化財調査研究会報告書75〕(財)八尾市文化財調査研究会
71	亀井4次(KH96-4)	*	亀井町1- 2	H6/2/12- 2/21	西川清久 1998 「Ⅴ亀井遺跡 第4次調査」(KH96-4)〔(財)八尾市文化財調査研究会報告書68〕(財)八尾市文化財調査研究会

凡例 大阪府教育委員会(市教委)・八尾市教育委員会(市教委)・(財)大阪府埋蔵文化財調査研究会(大阪府セ)・(財)大阪府文化財調査研究会(大阪府セ)・(財)八尾市文化財調査研究会(八文研)

第3章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、旧国鉄の竜華操車場跡地で計画された「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」に伴うものである。平成9年度以降、上記の計画に伴う基盤整備事業の一環として、新設道路、公共施設建設を中心とした発掘調査が(財)大阪府文化財調査研究センター(現大阪府文化財センター)、(財)八尾市文化財調査研究会により継続して実施されている。本書で報告する久宝寺遺跡第28次調査(KH99-28)は、平成11年度に区画道路1号線築造工事に先立って(財)八尾市文化財調査研究会が実施した調査である。

調査地は、JR大和路線久宝寺駅南西約150mを起点として南北方向に伸びる新設道路構築予定地で、東西幅18.8m、南北幅115.2m、面積2160㎡を測る。調査では調査区を4分割し、南から1調査区～4調査区と呼称した。したがって、各調査区の規模は東西幅18.8m×南北幅28.8m、面積541.4㎡となる。各調査区の調査期間等の詳細は第2表に示した。

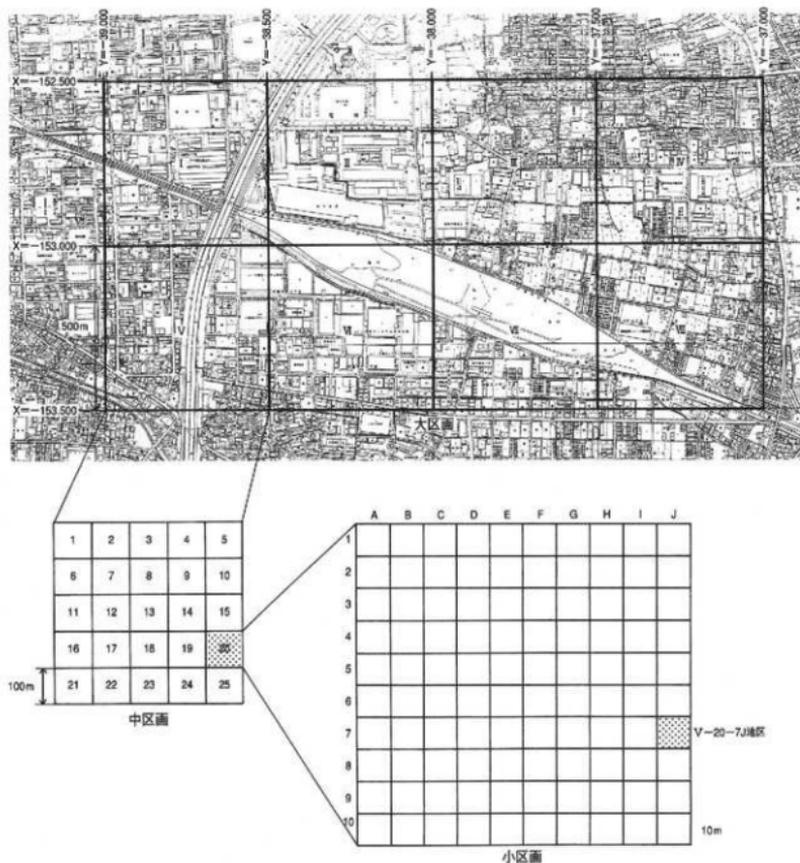
調査では、八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき調査深度を決定した。調査方法は上部調査として、現地表(T.P.+9.0m前後)下約2.0mまでの盛土、現代の作土層を機械掘削した後、以下0.5m前後を人力によって掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。さらに、上部調査終了後に下部調査として、道路下管路埋設部分を対象として幅4.0m、深さ0.8～1.0mのトレンチ調査を実施した。

各調査区は鋼矢板打設により調査区を囲繞する方法をとり、調査終了後に鋼矢板を転用するかたちで調査を進めた。但し、4調査区北西隅部分については既存建物の基礎部分にあたるため鋼矢板の打設位置を若干変更している。なお、各調査区の四方には地層観察用のセクション(幅0.5m)を設定している。

調査区全域の地区割については、第3図に示した竜華操車場跡地周辺を含む東西2km、南北1kmにわたって、国土座標第VI系〔日本測地系〕(原点-東経136°00'、北緯36°00'・福井県越前岬付近)を基準として設定した大区画・中区画・小区画を使用した。この地区割基準は、竜華操車場跡地内において平成9年度以降に継続する発掘調査に対応する為に、本調査研究会が独自に設定したものである。大区画は500m四方で全体を8区(I～Ⅷ)に区分し、北西隅の区画をIとし南東隅をⅧと呼称した。中区画は大区画を100m単位に25区(1～25)に区分し、北西隅の区画を1とし南東隅を25と呼称した。小区画は中区画を10m単位に区画し、地区の呼称については、東西方向はアルファベット(西からA～J)、南北方向は算用数字(北から1～10)で示し、1A地区～10J地区とした。以上の区分法を使用して、個々の地区表記においては、第3図の凡例で示したような表示方法を取った。なお、小区画内の地点表示については、国土座標値〔日本測地系〕

第2表 調査区一覧表

地区名	東西幅(m)	南北幅(m)	面積(㎡)	調査期間	担当者
1調査区	18.8	28.8	541.4	平成11年11月22日～平成12年1月17日	西村公助
2調査区	18.8	28.8	541.4	平成11年9月30日～平成11年11月19日	*
3調査区	18.8	28.8	541.4	平成11年11月22日～平成12年2月1日	岡田浩一
4調査区	18.8	28.8	541.4	平成11年9月30日～平成12年11月26日	*



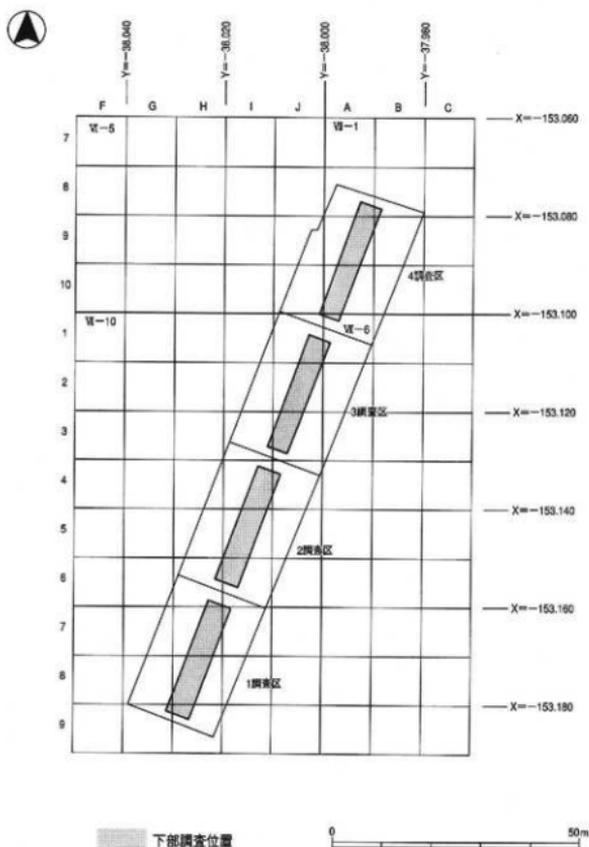
第3図 調査地区地区割り模式図

を入れる方法を取った。調査面の呼称については、人力による調査で検出された面を上部より「第1面」とした。遺構番号については、報告書作成段階に各調査区の調査面を統一した後、遺構毎に1調査区から順番に通し番号を付けた。遺構名は、遺構略号の後に面番号を付与し、3桁の遺構番号と合わせて表記した。[凡例SD101]。

現地調査での面ごとの平面図の作成は、各調査区あたり2回のクレーン使用による航空写真測量(1/20・1/100)と平板測量(1/50・1/100)を併用した。調査区周囲の地層断面図は1/20とし、主な遺構の平・断面図については1/10・1/20に統一した。

調査の結果、上部調査では2面(第1面・第2面)に亘る調査を実施し、古墳時代中期・古墳

時代後期・飛鳥時代・奈良時代・平安時代前期・中世・近世に至る遺構・遺物を検出した。下部調査では、3調査区の第3面で古墳時代初頭後半（庄内式新相）に比定される方形周溝墓2基（301号方形周溝墓・302号方形周溝墓）を検出している。出土遺物はコンテナ（40×60×120cm）24箱が出土している。なお、第3面で検出した2基の方形周溝墓（301号方形周溝墓、302号方形周溝墓）の内、特に遺存状態が良好であった301号方形周溝墓の埋葬主体部については、展示資料として活用するために遺構の切り取り保存を実施した。また、埋葬主体部から出土した2体の人骨については、性別等のデータから2体の関係等を明らかにする目的でDNA鑑定を依頼している。詳細は第4章第2節に示した。



第4図 調査区設定図(S=1/1000)

第2節 基本層序(第5・6図)

調査区全体を通して西壁で観察された弥生時代中期～近代までに堆積した地層を層相から16層(第0層～第Ⅴ層)に大別し、基本層序としてローマ数字で示した。その他の地層名は、調査区毎に算用数字で示した。全体の層序の特徴としては、第Ⅰ層～第Ⅲ層を除けば沖積地に特有な洪水氾濫を起因とする水成堆積物の累重により複雑な地層を形成している。第Ⅳ層～第Ⅴ層においては、1調査区北部から2調査区の南部に存在した東西方向に伸びる自然河川による自然堤防の形成やそれに付随した低湿化を示す水成堆積層が認められ、古墳時代前期前半(布留式古相)～古墳時代前期後半(布留式新相)については閉塞された沼沢地状の環境であったことが推定される。第Ⅹ層は1～4調査区で共通して認められた地層で、土壌化が顕著で黒色系の色調を呈する地層で当地一帯の古墳時代初頭(庄内式期)の鍵層となっている。第Ⅹ層以下については、1・2調査区がシルト・粘土を基調とする第Ⅺ層・第Ⅻ層が堆積するのに対して3・4調査区では極細粒砂～中粒砂が優勢な河川堆積物で層厚が50～80cmを測る第Ⅼ層が堆積している。第ⅩⅣ層・第ⅩⅤ層は2～4調査区で認められたシルト混粘土～粘土を基調とする層相で、第ⅩⅤ層上面については弥生時代中期～後期の水田面の可能性がある。

第0層：竜華操車場造成時(昭和13年10月操業)の客土層で層厚1.3m前後を測る。上面の標高は1調査区南部でT.P.+9.00m、4調査区北部でT.P.+8.50mを測る

第Ⅰ層：竜華操車場造成直前の水田作土層。シルト～細粒砂混粘土を基調とする層相である。色調はN3/0暗灰色～5B2/1青黒色である。層厚0.15～0.30mを測る。

第Ⅱ層：2調査区においては粗粒砂を基調とするがそれ以外は細粒砂～細礫混シルトが中心である。床土特有のグライ化が顕著な層相で1～5層に分層される。色調は7.5Y4/3暗オリーブ～10BG4/1暗青灰色である。層厚0.15～0.50mを測る。古墳時代中期～近世の遺物を含む。

第Ⅲ層：粘土質シルト～極細粒砂を基調とする。色調は5B4/1暗青灰色～2.5Y7/4浅黄色である。層厚は0.1～0.4mを測る。上面が古墳時代中期前半～江戸時代の遺構を検出した第1面である。

第Ⅳ層：粘土～シルト質粘土を基調とする。管状のマンガン斑が顕著である。色調は7.5YR6/8橙色～N6/0灰色である。層厚は0.15～0.35m。上面が古墳時代前期後半(布留式新相)の水田を検出した第2面である。

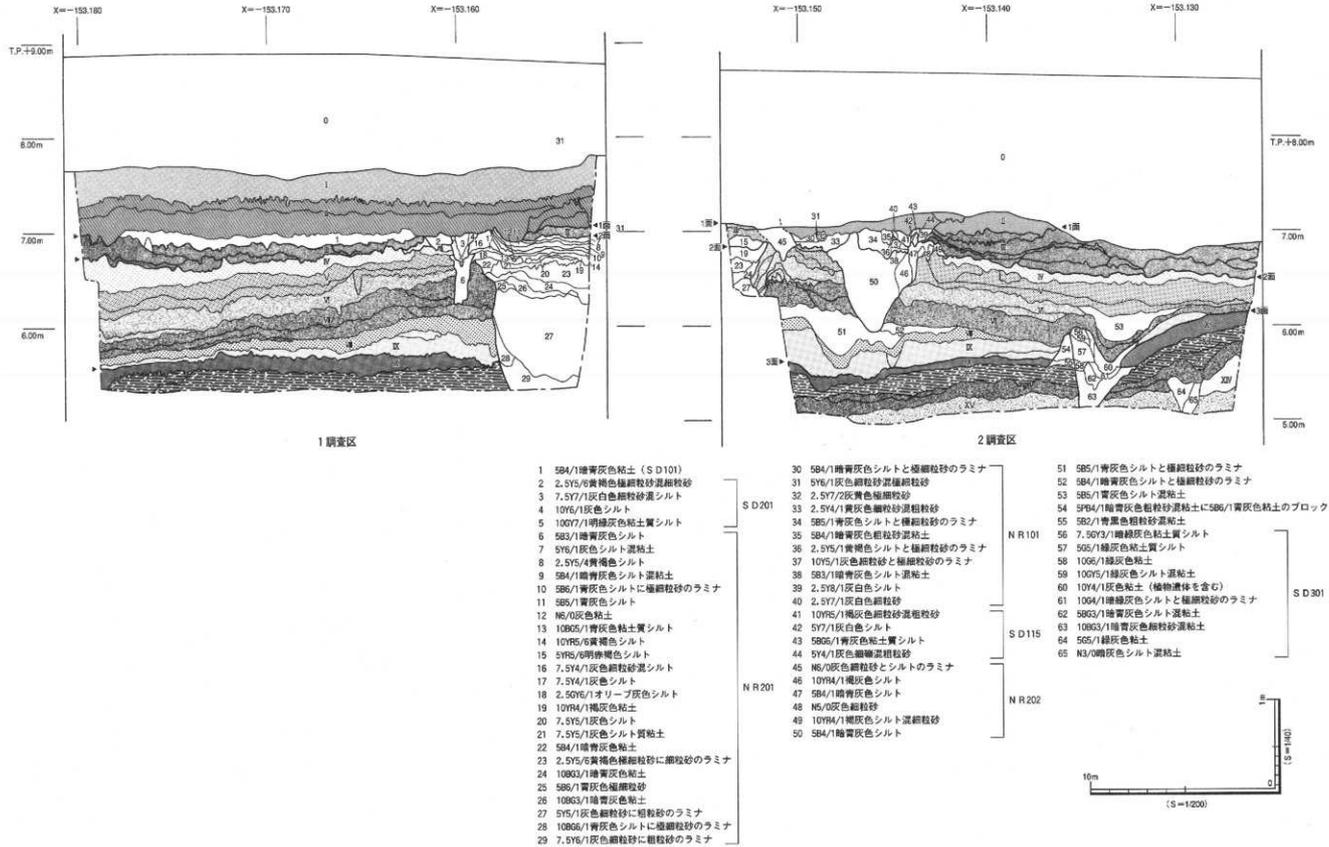
第Ⅴ層：粘性の強い粘土が主体で、1調査区では未分解の植物遺体を多く含む他、3・4調査区では管状のマンガン斑が顕著である。1層ないしは2層に分層される。色調は10BG7/1明青灰色～5PB3/1暗青色である。層厚0.1～0.4mを測る。第3面で検出した方形周溝墓の上面を覆う地層である。遺物は弥生時代後期末～古墳時代初頭(庄内



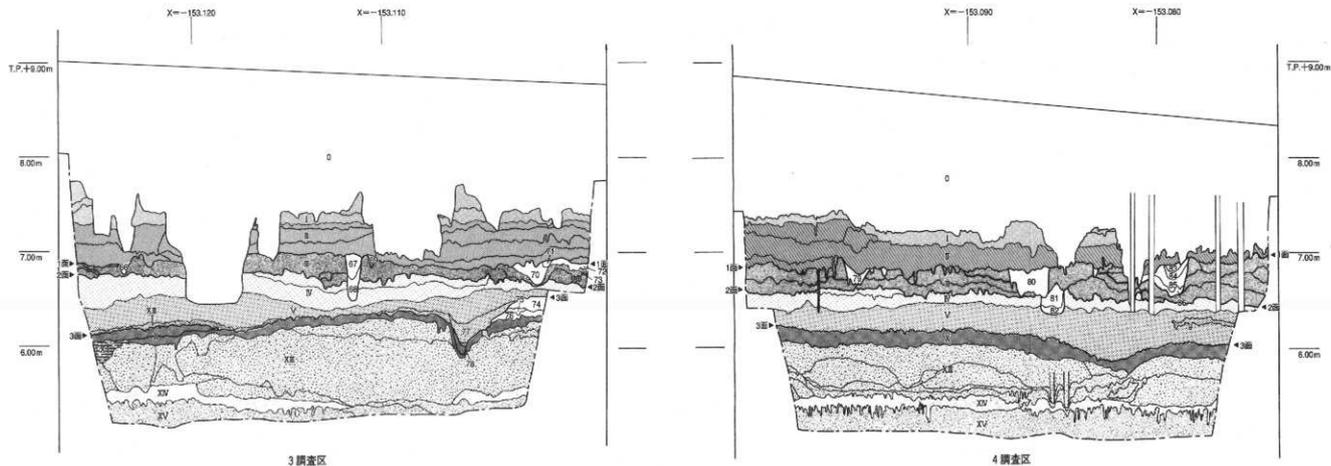
写真2 4調査区第2面北部水田調査風景(東から)

式期)の遺物が極少量出土している。

- 第VI層：1・2調査区で検出した。シルトと極細粒砂のラミナから成る淘汰不良の層相を呈する。色調は5B6/1青灰色である。層厚は0.05～0.3mを測る。
- 第VII層：1～3調査区で検出した。粘土～粗粒砂混粘土を基調とするもので一部極細粒砂の水平ラミナの他、植物遺体を多く含む。色調は5PB5/1青灰色～N3/0黒色。層厚0.05～0.43mを測る。
- 第VIII層：1・2調査区で検出した。10BG3/1暗灰色粘土を基調とする。層厚0.05～0.25mを測る。
- 第IX層：1・2調査区で検出した。シルトに極細粒砂のラミナが見られる層相である。色調は10BG5/1青灰色～10G5/1緑灰色である。層厚0.05～0.5mを測る。
- 第X層：1～4調査区で検出した。2調査区の北部の境として南に向かって下がっており高低差は最大で0.45mを測る。粘土～細粒砂混粘土を基調とするもので、水田面を構成する1・2調査区では粘土が主体となる。3・4調査区では細礫を含む粘土質シルトが主体となる土壌化層で植物遺体や牛痕が認められる。色調は10BG5/1青灰色～5B2/1青黒色。層厚0.15～0.4mを測る。上面が古墳時代初頭後半(庄内式新相)の遺構構築面で1・2調査区では水田(水田301)、3調査区では本層をベースとして構築された方形周溝墓2基(301号方形周溝墓・302号方形周溝墓)を検出している。
- 第XI層：1～3調査区で検出した。粘土を主体としており、植物遺体を多く含む。色調は5BG5/1青灰色～5BG4/1暗青灰色である。層厚は0.2～0.35mを測る。
- 第XII層：2調査区で検出した。粘土～粗粒砂混粘土を主体としている。色調はN3/0黒色～5B3/暗青灰色。層厚0.05～0.25mを測る。弥生時代中期の遺物を極少量含有する。
- 第XIII層：3・4調査区で検出した。極細粒砂～中粒砂を主体とする河川堆積物である。色調はN8/0灰白色～5PB4/1暗青灰色である。層厚0.45～0.85mを測る。遺物は出土していない。
- 第XIV層：2～4調査区で検出した。シルト混粘土～砂質シルトを主体としている。色調は5PB7/1明青灰色～5PB5/1青灰色である。層厚は0.1～0.2mを測る。
- 第XV層：2～4調査区で検出した。粘土～粘土質シルトを主体としており、植物遺体の他、小枝等を多量に含む。色調は5B7/1明青灰色～5BG3/1暗青灰色である。層厚は0.3m以上。4調査区では上面に多数の踏み込みと畦畔状の高まりがみられることから水田の可能性がある。なお、東接する多目的広場の調査で検出された第5-1面(弥生時代後期)の水田との対応が考えられる。



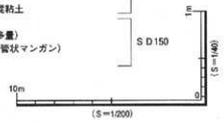
第5図 1・2区調査区基本層序



3 調査区

4 調査区

- | | | | | | |
|----|-----------------------------------|------------|----|--------------------------------------|---------|
| 66 | 10YR8/6黄褐色極細粒砂 (S D 122) | | 79 | 7.5YR7/2Lにぶい褐色シルト (管状マンガシ) (S D 155) | |
| 67 | 10YR8/1灰白色極細粒砂 | | 80 | 10YR5/6黄褐色シルト (S K 112) | |
| 68 | 10B67/1明黄灰色シルトと10YR7/6明黄褐色極細粒砂の互層 | S D 126 | 81 | 7.5YR6/6褐色細粒砂混シルト | |
| 69 | 10YR7/6明黄褐色粘土質シルト (S D 124) | | 82 | 5B2/1青灰色砂質シルト (ブロックま透入) | S K 202 |
| 70 | 2.5Y7/6明黄褐色シルト | S X 101 | 83 | 5B6/1青灰色粘土質粗粒砂混シルト | |
| 71 | 7.2黒より粘土 | | 84 | 5B4/1暗黄灰色シルト質細粒砂混粘土 | |
| 72 | 5P67/1明黄灰色極細粒砂—細礫 | | 85 | 10YR8/6明黄褐色シルト | |
| 73 | 10B67/1明黄灰色砂質シルト | | 86 | 7.5YR3/1黒褐色粘土質シルト (管状マンガシ) | |
| 74 | 10YR7/4Lにぶい黄褐色細礫混粘土質シルト | | 87 | 10YR8/6黄褐色砂質シルト | |
| 75 | N3/0暗灰色砂質シルト | 301号方形周溝遺土 | | | |
| 76 | N3/0暗灰色砂礫混シルト | | | | |
| 77 | 10B67/1明黄灰色粘土 | 301号方形周溝遺土 | | | |
| 78 | 10B67/1明黄灰色粘濁粘土 | | | | |



第6図 3・4 調査区基本層序

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 各調査区の概要

・第1面(第10図、図版二～八)

1調査区～4調査区で検出した。検出面は現地地表下1.8～2.0m(T.P.+7.00～6.85m)付近に存在する第Ⅲ層上面である。検出した遺構には古墳時代中期～江戸時代に比定される井戸1基(SE101)、土坑13基(SK101～SK113)、溝50条(SD101～SD150)、小穴60個(SP101～SP160)、自然河川1条(NR101)、不明遺構2基(SX101・SX102)がある。

井戸(SE)

SE101

1調査区北西部のVI-10-6H地区で検出した農耕用の井戸である。SD102の東肩を切っている。掘方の平面形状は方形で、一辺3.2m前後を測る。掘方はほぼ垂直に掘られており、そのほぼ中央部に径0.7mを測る井戸側が設置されているが上部が抜き取られており、検出時点では桶井戸側2段のみが残存していた。検出した桶井戸側より下方1.2m迄井戸側内の調査を実施したが、湧水が多めで壁面が崩壊する危険性があった為、途中で掘削を中止している。掘方の埋土は10YR4/4褐色粗粒砂混粘土(N4/0灰色粘土のブロック含む)で、井戸側内は5Y4/1灰色細粒砂混粘土(5YR2/1黒褐色粘土のブロック含む)である。井戸側内と掘方からは近世の陶磁器の他、井戸側用瓦が出土していることから、桶井戸側を重ね最上部に瓦井戸側を持つ構造の井戸で、河内一浩氏分類のⅢ類にあたる。

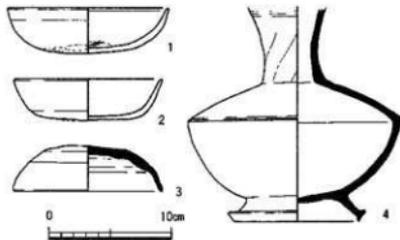
土坑(SK)

SK101

1調査区南部のVI-10-8・9H地区で検出した。北部でSD106を切り、南端でSP103に切られている。平面形状は不整隅丸方形で、長辺1.7m、短辺1.6mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.07mを測る。埋土は10YR4/2灰黄褐色粘土の単一層である。遺物は出土していない。

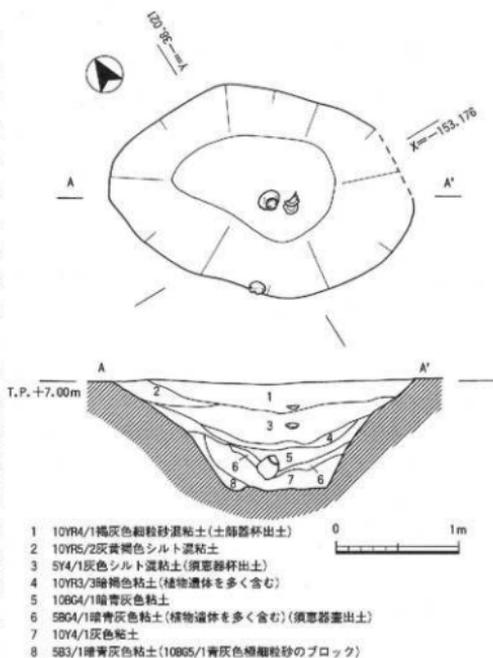
SK102(第7・8図、図版四・二〇)

1調査区南東部のVI-10-8H・I地区で検出した。平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径2.45m、短径1.6mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.89mを測る。埋土はシルト質粘土～粘土を主体とする8層から成る。遺物は1層、3層、6層から飛鳥時代中期～奈良時代前期に比定される土師器杯や須恵器杯蓋・壺などが出土している。4点(1～4)を図化した。内訳は土師器杯C2点(1・2)、須恵器杯蓋1点(3)、台付長頸壺1点(4)である。1は土師器杯Cで1層から出土した。ほぼ完形で口径13.1cm、器高3.8cmを測る。内外面の調整は器面風化のため不明瞭。色調は淡褐灰色で胎土は精良。外面の口縁部から底部にかけて約2/3におよぶ黒斑が認



第7図 SK102出土遺物実測図

められる。2は1と同様1層から出土している。1/2以上が残存しており、口径12.0cm、器高3.5cmを測る。内外面の色調は器面風化のため不明瞭。色調は淡橙色である。胎土は精良であるが、0.5~2mm大の赤色酸化土粒が散見される。3は須恵器杯蓋で一部を欠く以外は完存している。口径12.0cm、器高3.7cmを測る。色調は淡灰青色で胎土、焼成共に良好である。4は高台を有し稜角を呈する体部から細長い口縁部が伸びる須恵器長頸壺である。頸部の中位以下が完存しており、残存高17.8cm、体部最大径17.4cm、高台径10.2cm、高台高2.0cmを測る。色調は灰白色で胎土中に2~5mm大の長石が散見される。焼成は堅緻で頸部外面と体部下外面に自然釉が降着している。出土遺物の時期は1~3が飛鳥時代中期と推定されるが4



第8図 SK102断面図

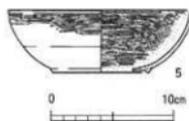
については奈良時代前半が推定されるため、遺構廃絶時期は奈良時代前半が考えられる。

SK103

1調査区北部のVI-10-7H地区で検出した。円形の掘方で、径1.2mを測る。掘方はほぼ垂直に掘り込まれており、検出した部分での深さは0.68mを測る。埋土は上から1層5B5/1青灰色粗粒砂混粘土、2層5PB3/1暗青灰色粗粒砂混粘土、3層5B6/1青灰色シルト混粘土、4層5B4/1暗青灰色粘土、5層10Y6/1灰色シルト、6層10BG4/1暗青灰色粘土で、土坑内からは近世の陶磁器や瓦が出土している。また、掘方中央の4層上面には桶底の円形が残存していることから、桶を埋置した肥溜めの性格の遺構であったと推定される。構築時期は江戸時代中期以降であろう。

SK104 (図版五)

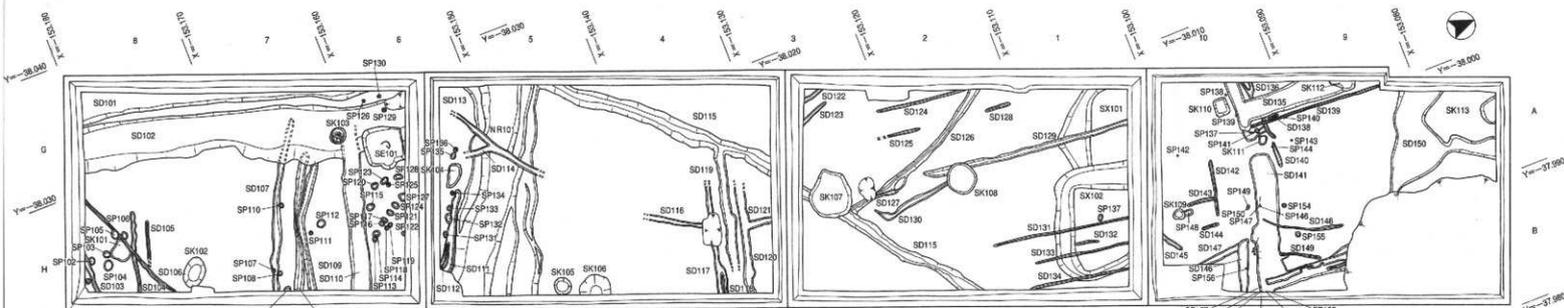
2調査区南部のVI-10-6H・I地区で検出した。東-西に長い楕円形で長径2.0m、短径1.04mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.11mを測る。埋土は7.5YR5/4に多い褐色シルト混粘土の単一層である。遺物は出土していない。



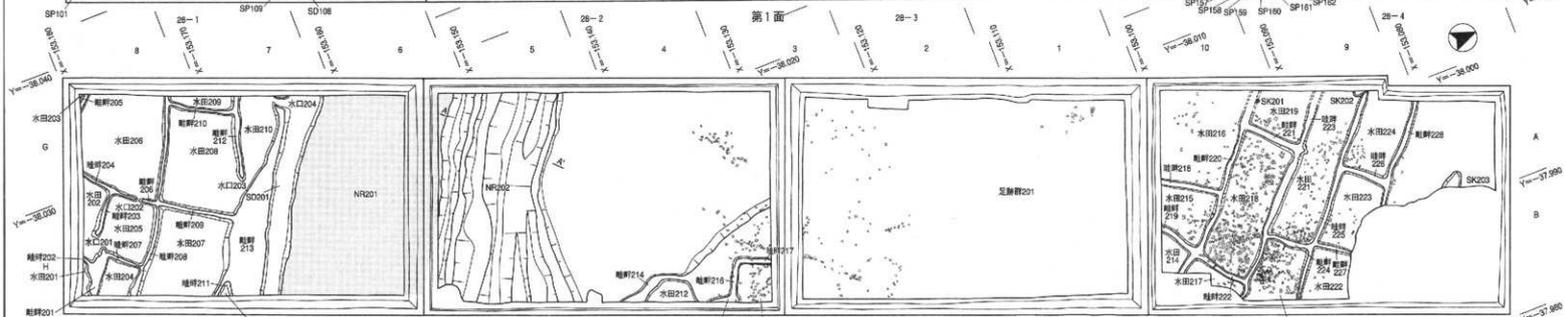
第9図 SK105出土遺物実測図

SK105 (第9・11図、図版五)

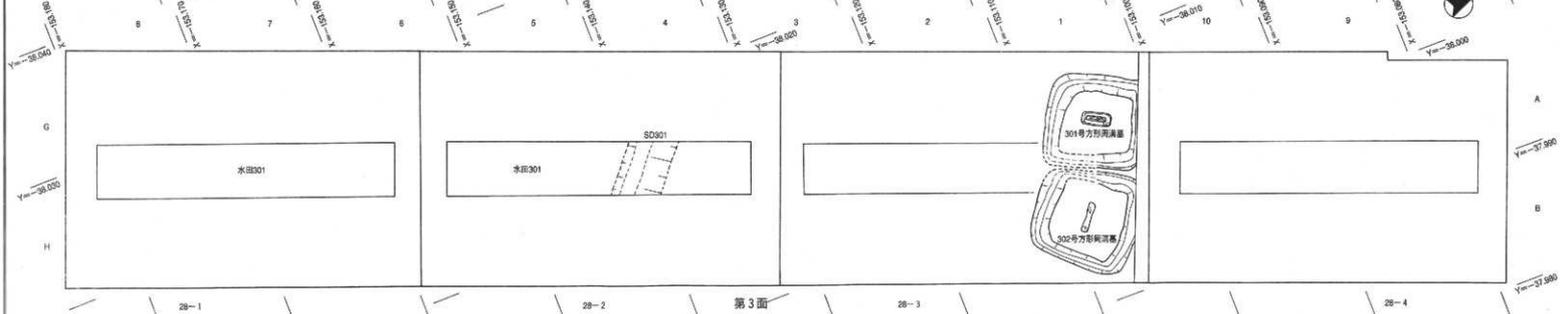
2調査区中東部のVI-10-5J地区で検出した。不整形円の掘方で径1.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.34mを測る。埋土は



第1面



第2面



第3面

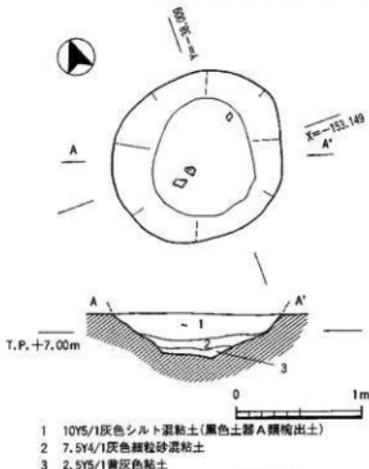
第10図 第1面~第3面検出遺構平面図



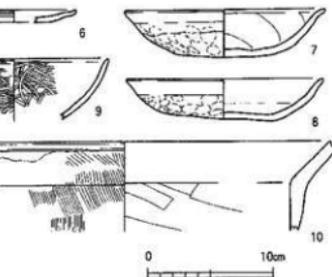
1層10Y5/1灰色シルト混粘土、2層7.5Y4/1灰色細粒砂混粘土、3層2.5Y5/1黄灰色粘土で、1層から土師器、黒色土器、石材等の破片が出土している。黒色土器A類椀1点(5)を図化した。5の黒色土器A類椀は全体の約1/2程度が残存している。復元口径15.0cm、器高5.2cm、高台径7.8cm、高台高0.3cmを測る。体部は深目の椀形で高台は小さく断面三角形を呈する。口縁端部内面に沈線状の段が巡る。器面調整は体部外面上位が横方向のヘラミガキ、以下がナデ。体部内面は横方向の密なヘラミガキが施されている。煤の付着範囲は内面および体部上半で、それ以外の色調は淡褐灰色である。胎土は精良である。橋本久和氏分類のI期A類杯Aに対応するもので9世紀後半に比定される。佐藤隆氏分類では平安時代II期古段階(9世紀第1四半期～第3四半期)に比定される。

SK106(第12・13図、図版六・二〇)

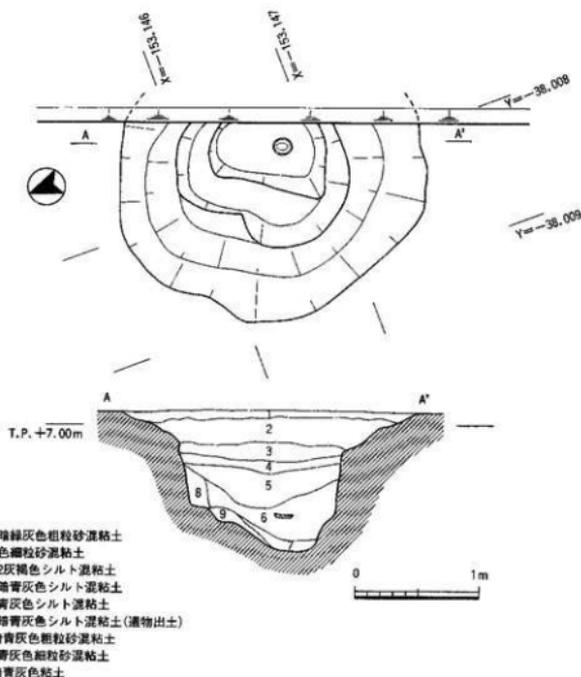
SK105の北側に隣接する。東部は調査区外に至るが、掘方形状は円形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅1.62m、南北幅2.4mを測る。断面形状は上部にテラスをもち、逆台形の2段掘りで、深さ1.14mを測る。埋土は断面形状に沿ってシルト混粘土～粘土が優勢な9層(1～9層)から成る。遺物は3～6層を中心に土師器、瓦器が少量出土している。5点(6～10)を図化した。6は「て」の字状口縁を呈する土師器小皿の小破片である。復元口径10.2cmを測る。色調は淡灰褐色。胎土は精良である。7・8は土師器中皿で8が完形、8が口縁部の一部を欠く。7が口径16.0cm、器高4.0cm。8が15.8cm、器高3.3cmを測る。共に水平な底部から体部が斜上方に伸びて口縁部付近で小さく外反している。内面は底部がナデ、口縁部がヨコナデで外面は口縁部上半がヨコナデ、以下は指頭圧痕が顕著に残る。色調は共に褐灰色で胎土は精良である。9は和泉型瓦器椀の小破片である。復元口径15.3cmを測る。体部内外面共に密なヘラミガキである。色調は黒灰色、胎土は精良である。尾上実氏分類のI-2・3期にあたる。10は土師器甕の小破片である。復元口径33.0cmを測る。器面調整は外面の口縁部から体部がタテハケ、内面は口縁部がヨコナデ、体部は板ナデを多用している。内外面に煤と内面に炭化物の付着が認められる。色調は褐灰色、胎土中に0.1～2mm大の長石・石英・赤色酸化土粒を多く含む。なお、スコープにおいては角閃石の含有が認められるため中河内産と考えられるが類例は少ない。遺構の



第11図 SK105平断面図



第12図 SK106出土遺物実測図



第13図 SK 106断面図

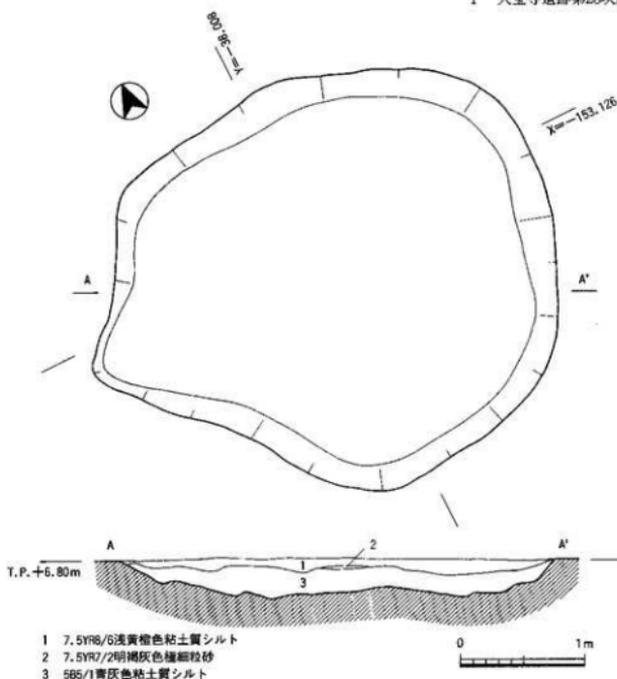
帰属時期は土師器小皿・中皿、および瓦器碗の特徴から、佐藤隆氏編年の平安時代IV期古段階(11世紀後半)が推定される。

S K 107 (第14図、図版六)

3 調査区南部のVI-10-3 J 地区で検出した。東部でSD 115を切っている。平面の形状は不定形で東西幅3.55m、南北幅3.40m、深さ0.32mを測る。断面は皿状を呈する。埋土は上から7.5YR8/6浅黄橙色粘土質シルト、7.5YR7/2明褐灰色極細粒砂、5B5/1青灰色粘土質シルトに分層される。遺物は3層から土師器および須恵器の小破片、平瓦、石材等が少量出土したが時期を明確にし得たものはない。

S K 108 (図版七)

3 調査区中央部のVI-10-2 J 地区で検出した。SD 129・SD 130を切っている。平面の形状は不整形円形、断面は逆台形を呈する。長径2.42m、短径2.26m、深さ0.58mを測る。埋土は7層が堆積しているが、そのうちの2～6層は粘土質シルトや細粒砂～中粒砂がブロックで混入している。遺物は出土していない。



第14図 SK107平面断面図

SK109

4 調査区南部のⅦ-6-1A地区で検出した。北部でSP148を切っている。平面の形状は不整形円形、断面はU字状を呈する。長径0.90m、短径0.75m、深さ0.41mを測る。埋土は粘土質シルトを主体とする4層に分層される。遺物は出土していない。

SK110

4 調査区南西部のⅥ-5-10J地区で検出した。平面の形状は隅丸長方形、断面は逆台形を呈する。長辺1.4m、短辺1.04m、深さ0.21mを測る。埋土は7.5YR5/8明褐色シルトと10BG7/1明青灰色粘土質シルトの互層である。遺物は、土師質甕のほか須恵器、陶磁器の小破片が出土している。

SK111

4 調査区西部のⅦ-1-10A地区で検出した。平面の形状は隅丸方形、断面は皿状を呈する。長辺0.75m、短辺0.60m、深さ0.18mを測る。埋土は上層が10BG4/1暗青灰色粘土質シルト、下層が7.5YR6/8褐色シルトの2層に分層できる。遺物は出土していない。

SK112

4 調査区西部のⅥ-5-9J地区で検出した。西部が調査区外に至る他、SD135を切ってい

る。検出部分で東西幅0.82m、南北幅2.07m、深さ0.19mを測る。埋土は10YR5/8黄褐色シルトの単一層である。遺物は須恵器、瓦質播鉢の小破片が出土している。

S K 113

4 調査区北西部のⅦ-1-8 A地区で検出した。掘方の北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅2.20m、南北幅1.17m、深さ0.34mを測る。埋土は7.5YR7/6橙色粘土質シルト、7.5YR4/4褐色シルト、7.5YR8/3浅黄褐色極細粒砂の互層である。遺物は近・現代に比定される土師器、陶磁器の小破片が少量出土した。

溝 (S D)

S D 101

1 調査区の西壁に沿って検出した溝で、S D 102の西側に並行して伸びる。西肩は調査区外に至る。検出部分で検出長23.0m、幅2.2m、深さ0.2mを測る。埋土は5B5/1青灰色粗粒砂混粘土の単一層である。溝内からは近世の陶磁器や瓦片が出土している。

S D 102

S D 101の東側に隣接して北北東-南南西に直線的に伸びる溝で、S D 107・S D 108・S D 110を切り、S E 101に切られている。検出長25.5m、幅2.9~4.8mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は5B5/1青灰色粗粒砂混粘土で、溝内からは近世の陶磁器や瓦が出土している。

S D 103

1 調査区南東隅のⅥ-10-9 H地区で検出した。東-西に直線的に伸びる溝で、検出長3.0m、幅0.3~0.4mを測る。溝の北側の一部はS P 102に切られる。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は上から1層10YR5/6黄褐色シルト混粘土、2層10YR4/1褐色細粒砂混粘土の二層である。遺物は出土していない。

S D 104

1 調査区南東部のⅥ-10-8・9 H地区で検出した。東-西に直線的に伸びる溝で、S D 106に切られている。検出長6.5m、幅0.3~0.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.05mを測る。埋土は10YR6/1褐色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S D 105

S D 104の北側に並行して東-西に伸びる溝である。検出長3.2m、幅0.25mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.05mを測る。埋土は1層10YR5/6黄褐色シルト混粘土、2層10YR4/1褐色細粒砂混粘土である。遺物は出土していない。

S D 106

1 調査区南東部のⅥ-10-8・9 H地区で検出した。北東-南西に直線的に伸びる溝で、S K 101・S P 105・S P 106に切られている。検出長10.0m、幅0.25mを測る。断面形状はV字形で、深さ0.11mを測る。埋土は10YR6/1褐色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S D 107

1 調査区北部のⅥ-10-7 H・I、8 I地区で検出した。東-西に伸びる溝で、S P 107・S P 108・S P 110・S D 102に切られる。検出長13.5m、幅0.7mを測る。断面形状は逆台形で、深

さ0.08mを測る。埋土は1層7.5YR3/3暗褐色細粒砂混粘土、2層7.5YR6/1褐灰色粘土質細粒砂である。遺物は出土していない。

SD108

SD107の北側に並行して東-西に伸びる。検出長11.0m、幅0.7mを測る。溝はSD102・SD109に切られる。断面形状は逆台形で、深さ0.21mを測る。埋土は1層5YR5/1褐灰色シルト混粘土、2層7.5YR5/6明褐色シルト混粘土、3層10YR7/1灰白色シルトである。遺物は土師器の小破片が1点出土したが時期は明確でない。

SD109

SD108の北側で検出した。検出部分に屈曲する部分を認めるが概ね東-西に伸びるものでSD108を切っている。検出長10.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.13mを測る。埋土は上から1層10YR4/1褐灰色シルト混粘土、2層5Y7/1灰白色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

SD110

1調査地の北部のVI-10-7H・I地区で検出した。東-西に伸びる溝で、西端はSD102に切られている。検出長10.5m、幅1.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は1層10YR4/1褐灰色細粒砂混粘土、2層10YR4/2灰黄褐色細粒砂混粘土である。遺物は土師器の小破片が極少量出土しているが時期を明確に得たものはない。

SD111

2調査区南東隅のVI-10-6I地区で検出した。北西-南東に直線的に伸びるもので東部でSD112が合流している。検出長6.5m、幅0.44~0.62mを測る。断面形状はU字形で、深さ0.22mを測る。埋土は上から1層7.5YR5/1褐灰色シルト混粘土、2層10YR6/2灰黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SD112

2調査区の南部のVI-10-6I地区で検出した。北西-南東に直線的に伸びるものでSD111に合流している。検出長2.0m、幅0.23mを測る。断面形状は浅い皿形で、深さ0.08mを測る。埋土は1層7.5YR5/1褐灰色シルト混粘土である。遺物は出土していない。

SD113

2調査区南西部のVI-10-5・6H、5I地区で検出した。北東-南西に直線的に伸びるものでNR101を切る他、SD114が合流している。検出長8.5m、幅0.3~0.55mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.09mを測る。埋土は1層10YR5/2灰黄褐色細粒砂混粘土である。遺物は出土していない。

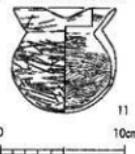
SD114

2調査区の南西部のVI-10-6H地区で検出した。南-北に直線的に伸びるもので北端がSD113に合流している。検出長8.8m、幅0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.13mを測る。埋土は1層10YR5/2灰黄褐色細粒砂混粘土である。遺物は出土していない。

SD115 (第15図、図版七・二〇)

2調査区西部から3調査区東部にかけて南西-北東に直線的に伸びるもので、SK107に切れ、SD119・SD127・NR101と合流している。検出長39.0m、幅0.9~1.6mを測る。断面形状

は逆台形ないしは「V」字形で、深さ0.5mを測る。埋土は極細粒砂～粗粒砂で充填されている。遺物は土師器小形丸底壺・甕・高杯といった古墳時代前期（布留式期）から須恵器の蓋杯といった古墳時代後期前半のものまで出土している。小形丸底壺1点（11）を図化した。球形の体部に斜上方に短く伸びる口縁部が付く小形丸底壺で体部径が口径を凌駕している。完形品で口径8.2cm、器高8.5cm、体部最大径8.2cmを測る。器面調整は風化が進行しており外面についてはやや不明瞭であるが、内外面共に底部を除く全面に横方向の密なヘラミガキが施されている。色調は赤褐色～淡褐灰色。胎土中は精良である。口縁部に打ち欠きと体部中位に径4mmの穿孔があることから供献土器に使用されたものと推定される。なお、東に隣接する地点で（財）大阪府文化財センターにより実施された多目的広場の調査では、1区の第3-1面（古墳時代前期以降）で本遺構に続く溝（SD102）が検出されており、その溝が「久宝寺1号墳」の西周溝を切る関係にあたることから、本遺物が久宝寺1号墳に伴う遺物の可能性が高く、古墳時代前期前半（布留式古相）とされる时期的にも矛盾するものでない。出土した遺物は時期幅が認められるが、遺構の廃絶時期は須恵器等から勘案して古墳時代後期前半が推定される。



第15図 SD115出土遺物実測図

SD116

2調査区北部のVI-10-4・5I、4J地区で検出した。北東-南西に直線的に伸びる。検出長4.6m、幅0.3～0.5mを測る。断面形状は浅い皿形で、深さ0.07mを測る。埋土は7.5YR5/2灰褐色細粒砂混粘土の単一層である。遺物は出土していない。

SD117

2調査区北部のVI-10-4I・J地区で検出した。東-西に直線的に伸びるもので、東部でSD118と合流している。検出長8.5m、幅0.4～0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.07mを測る。埋土は5Y5/1灰色細粒砂混粘土の単一層である。遺物は土師器の小破片が出土している。

SD118

SD117の北側で検出した。北西-南東に直線的に伸びるもので、西部でSD117に合流している。検出長2.4m、幅0.25～0.3mを測る。断面形状は逆台形で深さ0.08mを測る。埋土は5Y5/1灰色細粒砂混粘土の単一層である。遺物は土師器の小破片が出土している。

SD119

SD117の北側に並行して直線的に伸びるもので、西端でSD115に合流している。検出長9.4m、幅0.7～1.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.09mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土の単一層である。遺物は近世と思われる瓦の破片が出土している。

SD120

SD119の北側に並行して直線的に伸びるもので、SD121と合流している。検出長8.5m、幅0.6～0.8mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.06mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土の単一層である。遺物は出土していない。

SD121

SD120と合流して北-南に直線的に伸びる。検出長1.8m、幅0.4～0.6mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.07mを測る。埋土は10YR5/1褐灰色細粒砂混粘土の単一層である。遺物は土師

器の小破片が出土しているが時期は明確でない。

SD122～SD125・SD127～SD134

3調査区のはほぼ全域で検出した小溝群である。すべて耕作に伴う鋤溝と考えられる。いずれも概ね南北方向に並行して伸びるもので、法量は幅0.18～0.65m、深さ0.03～0.26mを測る。断面の形状は、碗状を呈する。埋土は、粘土質シルト～粗粒砂の単一層がほとんどである。遺物はSD131から、土師器、須恵器の小破片が少量出土している。各溝の法量等の詳細は第3表に示す。

第3表 SD122～SD125・SD127～SD134法量表(単位m)

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
SD122	VI-10-3I	1.65	0.34	0.09	10BG7/1明青灰色極細粒砂	
SD123	*	2.41	0.35	0.05	*	
SD124	VI-10-2・3I	7.00	0.21	0.04	10YR7/6黄橙色粘土質シルト	
SD125	*	2.75	0.20	0.04	*	
SD127	VI-10-3J	1.75	0.28	0.08	*	
SD128	VI-10-2J	2.03	0.24	0.05	*	
SD129	VI-10-1・2J	16.8	0.65	0.26	10G4/1暗緑灰色砂礫混シルト	
SD130	VI-10-2・3J	6.00	0.55	0.09	10YR8/1灰白色中粒砂～粗粒砂	
SD131	Ⅷ-6-1・2A	11.0	0.20	0.04	10G4/1暗緑灰色砂礫混シルト	土師器・須恵器
SD132	Ⅷ-6-1A	1.95	0.18	0.05	*	
SD133	Ⅷ-6-1・2A	7.50	0.20	0.03	*	
SD134	*	7.50	0.22	0.03	*	

SD126

3調査区中南部のVI-10-2I・J、3J地区で検出した。北西～南東に伸びるもので、南東端は、SK107およびSD115によって切られている。法量は検出長9.3m、幅0.5～1.0m、深さ0.1～0.3mを測る。断面の形状はV字状を呈する。埋土は上層が10YR8/1灰白色極細粒砂、下層が10BG7/1明青灰色シルトと10YR7/6明黄褐色極細粒砂の互層の2層で、ともにラミナが顕著である。遺物は上層から土師器、瓦質土器の小破片が極少量出土しているが時期を明確にし得るものはない。また、溝西部の底面では、平面が円形および楕円形を呈する径0.2～0.3m、深さ0.05～0.16mを測る3箇所を確認した。埋土はいずれも褐灰色粘土質シルトの単一層で、断面形は碗状を呈する。遺物はどの穴からも出土しなかった。その性格については不明である。

SD135・SD141・SD146・SD150

4調査区で検出したこれらの4条の溝については、坪界溝あるいは灌漑用の流路が想定されるが、確証が得られず推測の域を出ない。各溝の規模は、幅0.8～4.0m、深さ0.1～0.24mを測る。埋土は粘土質シルト～シルトの単一層である。断面の形状はどの溝も全て逆台形を呈する。遺物はSD135・SD141・SD146から、土師器皿・土釜・播鉢、国産磁器碗、瓦類、砥石といった多器種におよぶ破片が多量出土した。各溝の法量等の詳細は第4表に示す。

第4表 SD135・SD141・SD146・SD150法量表(単位m)

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
SD135	Ⅷ-5-9-10J	11.5	1.95	0.24	7.5Y7/3にぶい橙色シルト	土師器・須恵器・陶磁器・墨瓦・石製品
SD141	Ⅷ-1-10 A・B	16.0	2.35	0.10	10BG4/1明青灰色粘土質シルト	土師器・須恵器・陶磁器
SD146	*	4.15	0.80	0.08	*	土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・墨瓦
SD150	Ⅷ-1-8-9A	11.5	4.00	0.10	7.5YR3/1黒褐色粘土質シルト	

SD136～SD140・SD142～SD149

4 調査区の中央～南部にかけて検出した。すべて耕作に伴う鋤溝と考えられる。各溝の法量は、概ね幅0.2～0.74m、深さ0.4～0.11mを測る。断面の形状は、椀状を呈する。溝の埋土は、粘土質シルト～シルトの単一層がほとんどであるが、一部グライ化の影響で土色の見極めにくいものもある。遺物はからし土器、須恵器、陶磁器、屋瓦等の小破片が少量出土している。各溝の法量等の詳細は第5表に示す。

第5表 SD136～SD140・SD142～SD149法量表(単位m)

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
SD136	VI-5-10J、VII-1-10A	5.20	0.65	0.08	7.5YR5/1褐色粘土質シルト	
SD137	〃	1.77	0.74	0.06	〃	
SD138	VI-5-10J	0.87	0.21	0.04	10BG4/1暗青灰色粘土質シルト	
SD139	VI-5-9-10J	10.5	0.21	0.06	〃	
SD140	VII-1-10A	2.03	0.34	0.06	7.5Y5/1褐色粘土質シルト	
SD142	〃	4.42	0.25	0.04	7.5Y5/1褐色粘土質シルト	
SD143	VII-1-10A、VII-6-1A	2.20	0.25	0.06	〃	
SD144	VII-1-10A	1.40	0.20	0.03	7.5YR7/3におい褐色シルト	
SD145	VII-6-1A	1.80	0.36	0.11	7.5YR5/2灰褐色シルト	
SD147	VII-1-10A、VII-6-1A	3.80	0.50	0.06	〃	土師器・須恵器・陶磁器・屋瓦
SD148	VII-1-9-10A	9.00	0.26	0.08	5YR5/8明赤褐色シルト	
SD149	VII-1-10A・B	3.27	0.20	0.05	〃	

小穴(SP)

SP101～SP106

1 調査区南東部のVI-10-8・9H地区で集中して検出された小穴群である。平面形状では円形、楕円形がある。規模は径0.40～0.80m、深さ0.06～0.08mを測る。埋土は10YR4/2灰黄褐色細粒砂混粘土の単一層である。遺物は出土していない。各小穴の法量等の詳細は第6表に示した。

第6表 SP101～SP106法量表(単位m)

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
SP101	VI-10-9H	円形	0.43	0.40	0.06	10YR4/2灰黄褐色細粒砂混粘土	
SP102	〃	楕円形	0.58	0.48	0.07	〃	
SP103	〃	〃	0.60	0.50	0.06	〃	
SP104	〃	〃	0.80	0.70	0.08	〃	
SP105	〃	〃	0.65	0.60	0.06	〃	
SP106	VI-10-8-9H	〃	0.62	0.55	0.07	〃	

SP107～SP112

1 調査区北東部のVI-10-7H・I地区で検出した。散発的な広がりを持つもので平面形状は円形および楕円形を呈する。法量は径0.27～0.70m、深さ0.08～0.19mを測る。埋土はSP112が2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂の他は7.5Y4/3褐色極細粒砂混粘土の単一層である。遺物は出土していない。各小穴の法量等の詳細は第7表に示した。

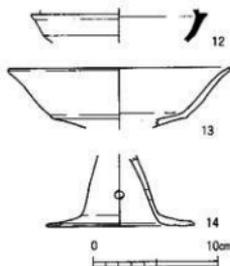
第7表 SP107～SP112法量表(単位m)

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
SP107	VI-10-7I	円形	0.30	0.30	0.19	7.5Y4/3褐色極細粒砂混粘土	
SP108	〃	〃	0.37	0.37	0.08	〃	
SP109	〃	楕円形	0.58	0.50	0.10	〃	
SP110	VI-10-7H	円形	0.40	0.40	0.11	〃	

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
SP111	VI-10-7I	楕円形	0.30	0.27	0.11	◇	
SP112	◇	◇	0.70	0.60	0.14	2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂	

SP113～SP136 (第16図、図版二〇)

1 調査区北部から2調査区南部のVI-10-6・7H・I地区で検出した小穴群である。南部がSD110、北部がSD111の間に密集しており、一部掘立柱建物を構成した柱穴が含まれている。上面の形状では円形、楕円形がある。規模は径0.25～0.75m、深さ0.07～0.50mを測る。遺物はSP124から須恵器、SP132・SP133から土師器が出土している。各小穴の法量等の詳細は第8表に示した。3点(12～14)を図化した。12はSP124から出土した須恵器杯身の小破片である。復元受部径14.2cmを測る。色調は青灰色で胎土は精良である。体部外面に灰かぶりか認められる。古墳時代中期後半に比定される。13はSP132から出土した土師器高杯の杯部で、約1/2が残存している。復元口径17.6cmを測る。杯体部は稜を境として斜上方に直線的に伸びるもので、口縁部付近で小さく外反している。内外面共に風化が著しく調整等は不明である。色調は明褐色で、胎土中に0.5～4mm大の長石・石英が多量に含まれている。古墳時代中期中葉の所産と考えられる。14はSP133から出土した土師器高杯の脚部で約1/2が残存している。裾径11.9cmを測る。器面調整は内外面共にナデ。スカシ孔は2個穿たれている。色調は橙色で胎土中に0.1～2mm大の長石・石英が含まれている。古墳時代中期中葉の所産と考えられる。



第16図 SP124(12)、SP132(13)

SP133(14)出土遺物実測図

第8表 SP113～SP136法量表(単位m)

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
SP113	VI-10-7I	円形	0.40	0.40	0.10	7.5Y4/2灰褐色シルト混粘土	
SP114	◇	楕円形	0.60	0.50	0.50	7.5Y4/2灰褐色シルト混粘土 2.5Y4/1黄灰色極細粒砂混粘土	
SP115	VI-10-7H	◇	0.65	0.49	0.13	◇	
SP116	VI-10-7I	円形	0.60	0.60	0.06	10YR5/6黄褐色細粒砂混粘土	
SP117	◇	楕円形	0.60	0.29	0.10	◇	
SP118	◇	円形	0.36	0.36	0.17	7.5Y4/2灰褐色シルト混粘土 2.5Y5/1黄灰色極細粒砂混粘土 2.5Y5/3黄褐色シルト混粘土	
SP119	VI-10-6・7I	楕円形	0.40	0.35	0.11	7.5Y4/2灰褐色シルト混粘土 10YR4/4褐色細粒砂混粘土	
SP120	VI-10-6・7H	◇	0.60	0.50	0.10	7.5YR4/1灰褐色シルト混粘土 10YR4/1褐色細粒砂混粘土 10YR3/1黒褐色粘土質細粒砂	
SP121	VI-10-6I	◇	0.60	0.45	0.15	7.5YR4/1灰褐色シルト混粘土 10YR3/3暗褐色細粒砂混粘土	
SP122	◇	円形	0.36	0.36	0.08	7.5YR4/1灰褐色シルト混粘土 10YR4/1褐色細粒砂混粘土	
SP123	VI-10-6H	楕円形	0.70	0.45	0.15	7.5YR4/1灰褐色シルト混粘土 10YR4/2灰黄色シルト混粘土	
SP124	VI-10-6H・I	◇	0.60	0.40	0.18	7.5YR4/1灰褐色シルト混粘土 10YR4/4褐色細粒砂混粘土 10YR4/1褐色シルト混極細粒砂	須恵器12
SP125	VI-10-6II	円形	0.30	0.30	0.15	7.5YR4/1灰褐色シルト混粘土 10YR4/2灰黄褐色粘土 10YR4/1褐色シルト混粘土	

遺構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 126	VI-10-6H	円形	0.26	0.26	0.25	2.5Y5/2暗灰黄色シルト混粘土 2.5Y4/2暗黄色細粒砂混粘土	
S P 127	VI-10-6H・I	楕円形	0.70	0.58	0.09	10YR5/1褐灰色シルト混粘土 5Y4/1灰色細粒砂混粘土	
S P 128	VI-10-6H	◇	0.70	0.42	0.11	10YR5/1褐灰色シルト混粘土 5Y4/1灰色シルト混粘土	
S P 129	◇	円形	0.28	0.28	0.25	2.5Y5/2暗灰黄色シルト混粘土 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂混粘土	
S P 130	◇	◇	0.25	0.25	0.25	◇	
S P 131	VI-10-6 I	楕円形	0.45	0.35	0.07	10YR5/2灰黄褐色シルト混粘土	
S P 132	◇	◇	0.75	0.36	0.14	◇	土師器13
S P 133	◇	円形	0.47	0.47	0.10	◇	土師器14
S P 134	◇	◇	0.32	0.32	0.18	◇	
S P 135	VI-10-6H	楕円形	0.40	0.35	0.08	◇	
S P 136	◇	◇	0.30	0.30	0.09	◇	

S P 137～S P 162

3調査区北部から4調査区中南部のVI-5-10J、VII-1-10A・B、VI-6-1A地区で検出した。上面の形状では、円形、楕円形があるが、数量的には円形が大半を占める。法量は径0.04～0.70m、深さ0.10～0.25mを測る。そのうち、4調査区で検出された小穴のうちS D 135、S D 141の周辺で検出されたものについては、径0.05～0.10m程度のものが大半であることからこれらの小穴については溝に伴う杭の痕跡(杭穴)の可能性が高い。

なお、杭穴としたものについては深さの確認はしていない。各小穴の法量・詳細については第9表に示した。

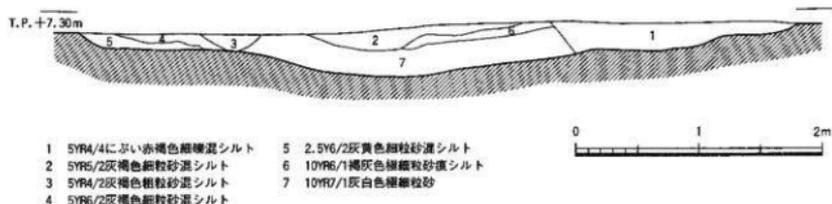
第9表 S P 137～S P 162法量表(単位m)

遺構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 137	VI-6-1A	楕円形	0.70	0.50	0.25	7.5GY3/1暗緑灰色粘土質シルト	
S P 138	VI-5-10J	円形	0.12	0.12	—	10GY7/1明緑灰色砂質シルト	杭穴
S P 139	◇	◇	0.18	0.14	—	◇	杭穴
S P 140	◇	◇	0.13	0.13	—	◇	杭穴
S P 141	◇	楕円形	0.36	0.28	0.13	10BG4/1暗青灰色粘土質シルト	
S P 142	◇	円形	0.12	0.12	—	10GY7/1明緑灰色砂質シルト	杭穴
S P 143	VI-1-10A	◇	0.11	0.11	—	◇	杭穴
S P 144	◇	◇	0.08	0.08	—	◇	杭穴
S P 145	◇	◇	0.07	0.06	—	◇	杭穴
S P 146	◇	◇	0.15	0.13	—	◇	杭穴
S P 147	◇	◇	0.07	0.07	—	◇	杭穴
S P 148	VI-6-1A	楕円形	0.70	0.45	0.11	5YR7/4にぶい褐色シルト	
S P 149	VI-1-10A	◇	0.23	0.18	—	10GY7/1明緑灰色砂質シルト	杭穴
S P 150	◇	◇	0.24	0.20	—	◇	杭穴
S P 151	◇	円形	0.25	0.25	0.11	5B6/1青灰色粘土質シルト	
S P 152	◇	◇	0.05	0.05	—	10GY7/1明緑灰色砂質シルト	
S P 153	◇	◇	0.15	0.15	0.12	5B6/1青灰色粘土質シルト	
S P 154	◇	◇	0.32	0.32	0.14	5YR7/4にぶい褐色シルト	
S P 155	◇	◇	0.37	0.37	0.10	◇	
S P 156	◇	◇	0.12	0.12	—	10GY7/1明緑灰色砂質シルト	杭穴
S P 157	VI-1-10B	◇	0.05	0.05	—	◇	杭穴
S P 158	◇	◇	0.10	0.10	—	◇	杭穴
S P 159	◇	◇	0.04	0.04	—	◇	杭穴
S P 160	◇	◇	0.05	0.05	—	◇	杭穴
S P 161	◇	◇	0.06	0.05	—	◇	杭穴
S P 162	◇	◇	0.06	0.06	—	◇	杭穴

河川(NR)

NR101(第17図)

2調査区南側のVI-10-5・6H、5・6I、6J地区で検出した。NR202の上部に位置する。北西-南東に伸びるもので、北岸にSD115と合流している。検出長17.0m、幅4.7~6.8mを測る。断面形状は皿形で、深さ0.47mを測る。埋土は1層5YR4/4にぶい赤褐色細礫混シルト、2層5YR5/2灰褐色細粒砂混シルト、3層5YR4/2灰褐色粗粒砂混シルト、4層5YR6/2灰黄色細粒砂混シルト、5層2.5Y6/2灰黄色細粒砂混シルト、6層10YR6/1褐灰色極細粒砂混シルト、7層10YR7/1灰白色極細粒砂である。遺物は土師器および須恵器の破片が出土した。およそではあるが、古墳時代後期にはこの河川は埋没したと思われる。



第17図 NR101西壁断面図

不明遺構(SX)

3調査区北部で、性格的に不明な遺構2箇所(SX101・SX102)を検出した。いずれもT.P.+6.9~6.75m付近に存在する第Ⅲ層および第A層を構築面とする。検出当初においては、いずれも平面形状から方形周溝墓あるいは方墳といった周溝を有する墓が想定されたが、①主体部をはじめ土師棺墓や土塚墓といった埋葬部分が確認されないこと、②墳丘盛土(ブロック土)の存在が明確に判断されず、検出時点ではフラットな面を呈していたこと、③供献された祭祀土器が出土しないこと、④北接する4調査区の同一面で本遺構の広がりや確認されないといった理由から墓と断定する根拠に乏しいものと判断した。また、墓以外の祭祀遺構や住居域に関する区画溝、あるいは生産域に伴う水路(溝内埋土に流水を示唆する砂層の堆積が見られる)であったこと等々が想定される。このように本遺構については多角的な要素を含むと考えられることから断定および否定は避け、性格的に不明な遺構と解釈した。今後、このような遺構の検出例の累積に伴い、詳細が明らかにされることを待って再度検討したい。次に、双方の遺構の年代については、後述するSX102付近から出土した土師器高杯や、溝内から出土した土師器から古墳時代中期初頭以降が推定される。また、北接する4調査区の第2面で検出した北部水田(布留式新相)は第Ⅳ層上面を構築面とすることから、これらの遺構は水田廃絶後に構築されたことが言える。

SX101(第18図、図版九)

3調査区北部のVI-10-1J地区で検出した。東西方向にやや彎曲して伸びる溝である。西部は調査区外に至り、東部はSX102により切られるため全容は不明である。検出規模は東西長5.5~5.9m、幅1.0~2.6m、深さ0.2m前後を測る。遺物は、溝内から土師器の小破片が少量出土しているが時期を明確にし得るものは無い。構築時期は本溝を切るSX102より古く、古墳時代中期

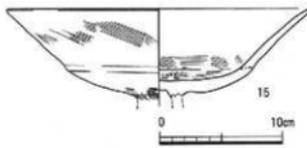
初頭以降と推定されるが詳細は不明である。

S X 102 (第18・19図、図版九・一〇・二一)

S X 101の東側に隣接するVI-10-1・2 J、VII-6-1・2 A地区で、南北約6m、東西約9mの範囲内で検出した。平面「コ」の字状を描く溝で、北部については4調査区との境界に設けた側溝および地層観察用のアゼのため不明であるが、4調査区内まで広がらないことは判明している。溝幅0.7~2.4m、深さ0.1~0.16mを測る。遺物は溝内から土師器の小破片が少量出土している。なお、南東部の溝の西および北肩付近にあたる地点から、古墳時代中期前半に比定される土師器高杯の杯部分(15)が出土した。15は土師器高杯の杯部で口縁部の一部を欠く以外は完存している。大形品で口径24.4cm、稜部径14.5cm、杯部高7.0cmを測る。皿状を呈する杯体部から稜を形成し斜上方に直線的に伸びる。器面調整は内面の口縁部がヨコナデ、杯底部が内面乱方向のハケ調整を行なう。外面の杯体部は脚部との接合部付近にハケを施す以外はナデ、口縁部は右上がりのハケ調整後ヨコナデを施す。色調は淡灰褐色~赤橙色を呈している。胎土には0.5mm以下の長石・石英・チャートが含まれている。遺物の所産時期は古墳時代中期初頭である。この土師器高杯はS X 102検出中に見つかったもので、検出当初は遺構に関わる祭祀土器と考えた。しかし、入念に遺物周辺の平面精査を行った結果、明瞭な掘方は確認されなかった。さらに本遺物を包含する地層が人為的に盛られたブロック土ではなく、構築層と同等と判断されることからS X 102に伴う可能性は極めて低いものと思われる。



写真3 S X 102検出状況(東から)



第19図 S X 102付近出土遺物実測図

・第2面(第10図、図版……一四)

1調査区～4調査区で検出した。検出面はT.P.+6.8～6.5m付近に存在する第Ⅵ層上面である。検出した遺構には古墳時代前期前半～後半(布留式古相～新相)に比定される土坑3基(SK201～SK203)、溝1条(SD201)、水田24筆(水田201～水田224)、畦畔28条(畦畔201～畦畔228)、自然河川2条(NR201・NR202)、足跡群1箇所(足跡群201)がある。

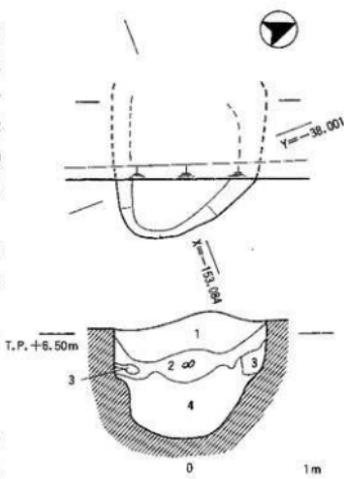
土坑(SK)

SK201

4調査区西部のⅥ-5-10J地区で検出した。平面の形状は楕円形で長径0.4m、短径0.3mを測る。断面はU字状を呈し深さ0.12mを測る。埋土は10YR7/8黄橙色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

SK202(第20図)

4調査区北西部のⅥ-5-9J地区で検出した。西部が調査区外に至るため、全容は不明である。検出部分では東西幅0.5m、南北幅1.1mを測るが、西壁部分で西部が確認されているため、東西幅については1.2m以上が推定される。深さについては西壁部分で1.0mを測る。埋土は上から1層7.5YR6/6橙色細粒砂混シルト、2層5B6/1青灰色粘土質細粒砂混シルト、3層5B2/1青灰色砂質シルト、4層5B4/1暗青灰色シルト質細粒砂混粘土の4層に分層される。遺物は2層から縄目タタキの平瓦1点が出土している。なお、第2面で検出したが、本来の構築面は第Ⅲ層から切り込まれている。遺構構築時期は平安時代頃が推定される。



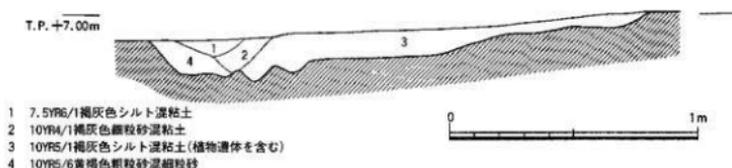
- 1 7.5YR6/6橙色細粒砂混シルト
- 2 5B6/1青灰色粘土質細粒砂混シルト(遺物出土)
- 3 5B2/1青灰色砂質シルト
- 4 5B4/1暗青灰色シルト質細粒砂混粘土

第20図 SK202平断面図

溝(SD)

SD201(第21図)

1調査地の中央より北部のⅥ-10-7G～I、8I地区で検出した。南東～北西に直線的に伸びる溝で、南部水田の北を区画し水口204を介して南部水田への導水の役割を果たしている。幅1.6～2.6mを測る。断面形状は浅い逆台形で、深さ0.17mを測る。埋土は上から1層7.5Y6/1褐灰色シルト混粘土、2層10YR4/1褐灰色細粒砂混粘土、3層10YR5/1褐灰色シルト混粘土、4層10YR5/6黄褐色粗粒砂混細粒砂である。遺物は出土していない。



第21図 S D 201西壁断面図

水田(水田)

水田は1調査区の中・南部、2調査区北東部、4調査区全域の3箇所で見出された。1調査区で見出した水田を南部水田、2調査区で見出した水田を中部水田、4調査区で見出した水田を北部水田と呼称した。

・南部水田〔水田201～水田211、畦畔201～畦畔213〕(第22図、図版一)

1調査区中部以南のVI-10-7～9 G～I地区の東西16m、南北16mにわたって見出した。検出部分で水田11筆(水田201～水田211)、畦畔13条(畦畔201～畦畔213)を確認した。水田の構築に際しては、水田群の北側を区画するS D 201の流路方向である北西～南東を基準として畦畔を並行ないしは直交する形が取られている。水田の一筆単位は水田208のように46.0㎡を測るものや、水田205のように小規模で18.4㎡を測るものがあるが、基本的には東～西辺が長い長方形を呈するものが多い。水田作土は第VI層で、畦畔は10YR5/2灰黄褐色粘土が盛られている。畦畔はS D 201の南側に付随し水田の北を区画する畦畔213を除けば、断面形状が低い台形状で法量は上幅0.12～1.28m、基底幅0.33～1.62m、高さ0.02～0.13mを測る。水口は検出部分で4箇所(水口201～水口204)を確認している。畦畔203の東端に水口201、畦畔206の北東部に水口202、畦畔212の東部に水口203、畦畔213の西端に水口204が設けられている。水田面の標高は水田210の北部にある水口204付近がT.P.+6.78mで最も高く、ここから南に向かって緩やかに傾斜しており、水田202の南部でT.P.+6.56mを測る。灌漑水利に関しては、北部のS D 201から水口204を通じて導水し、そこから南部への水利経路が想定される。水田作土は第VI層で酸化鉄・マンガンの集積が認められないため、水捌けの悪い湿田の環境が推定される。水田上面は洪水砂である第III層に覆われており、古墳時代後期末に比定される土器類が出土している。

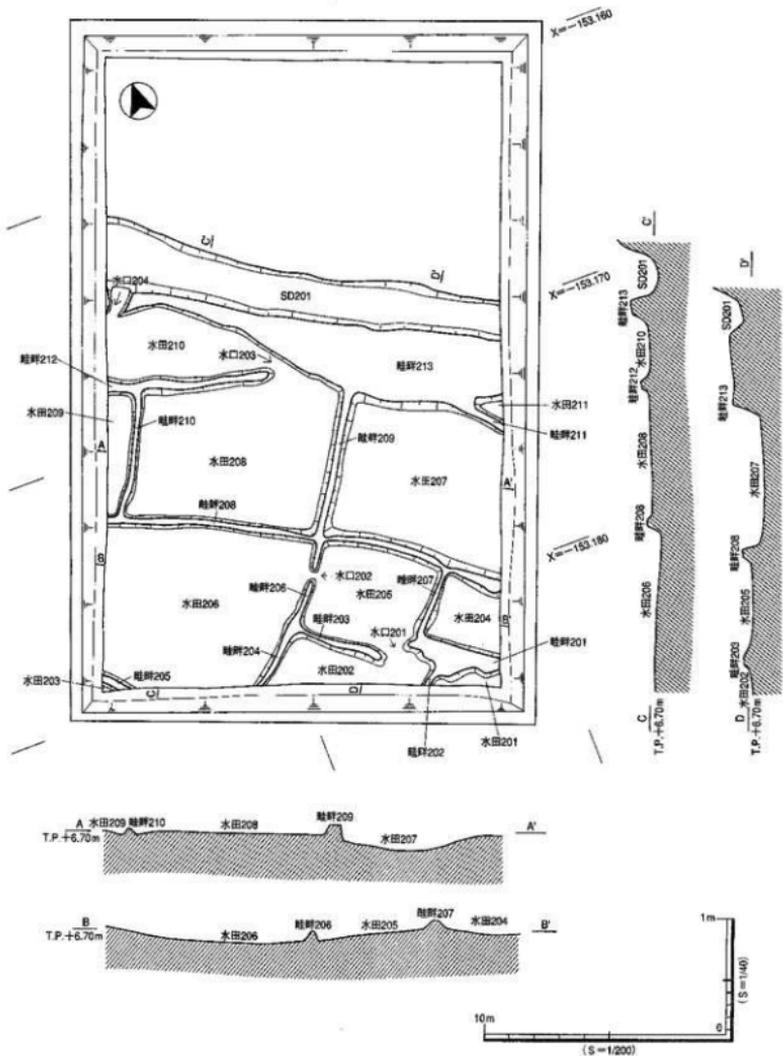
なお、南に隣接する位置で(財)大阪府文化財センターにより行われた99-1・2区調査の古代面II(下部水田面相当)に対応するもので、それらを総合すれば水田の範囲は東西80m、南北33m以上が推定される。また、この部分の水田では畦畔や水田面を削りながら東から西へ伸びる洪水砂層の流路痕跡が確認されており、本水田を覆う第III層もこの洪水によるものと考えられる。水田遺構の廃絶時期は飛鳥時代中期以前が推定される。各水田・畦畔の法量等の詳細については第10・11表に示した。

・中部水田〔水田212・水田213、畦畔214～畦畔217〕(第23図、図版一)

2調査区北東部のVI-10-4・5 J地区の第VI層上面で見出した。水田2筆(水田212・水田213)、畦畔4条(畦畔214～畦畔217)を見出したが、部分的な検出で一筆耕地を確認できたものは無く不明な点が多い。

0035E-A

0035E-A



第22図 1調査区 南部水田平面図

第10表 南部水田 水田法量表(単位m) ※田積は一筆として捉えたものに限定。

遺構番号	地区	形状	規模 (東西×南北)	田積(m ²)	標高(T.P.+)	備考
水田201	VI-10-9H	—	2.7×0.8	—	6.64~6.60	
水田202	VI-10-8H・9G・H	—	5.7×2.5	—	6.68~6.56	
水田203	VI-10-8G	—	0.4×0.5	—	6.70	
水田204	VI-10-8-9H	長方形	3.1×2.7	—	6.72~6.67	
水田205	◇	長方形	4.6×4.0	18.4	6.73~6.66	
水田206	VI-10-8G・H・9G	—	8.1×6.7	—	6.72~6.55	
水田207	VI-10-8H・I	—	6.7×5.8	—	6.66~6.54	
水田208	VI-10-7-8G・H	長方形	7.8×5.9	46.0	6.79~6.69	
水田209	VI-10-7-8G	—	1.0×5.1	—	6.71~6.67	
水田210	VI-10-7G・H	—	6.5×3.0	—	6.78~6.70	
水田211	VI-10-8I	—	1.1×1.2	—	6.67~6.66	

第11表 南部水田 畦畔法量表(単位m)

遺構番号	地区	検出長	上幅	基底幅	高さ	備考
畦畔201	VI-10-9H	3.80	0.46~1.28	0.78~1.62	0.05~0.08	
畦畔202	VI-10-9H	0.60	0.22~0.30	0.42~0.48	0.03~0.04	
畦畔203	VI-10-8-9H	3.70	0.12~0.30	0.40~0.68	0.02~0.05	水口201
畦畔204	VI-10-8-9G・8H	2.20	0.20~0.30	0.40~0.50	0.06	
畦畔205	VI-10-8G	1.10	0.26~0.31	0.54~0.56	0.02~0.03	
畦畔206	VI-10-8H	3.70	0.20~0.40	0.40~0.60	0.05~0.10	水口202
畦畔207	VI-10-8-9H	2.70	0.20~0.25	0.38~0.58	0.05~0.06	
畦畔208	VI-10-8G・8-9H	16.0	0.16~0.60	0.44~1.02	0.03~0.12	
畦畔209	VI-10-8H	6.10	0.26~0.36	0.62~0.74	0.09~0.13	
畦畔210	VI-10-7-8G	5.10	0.17~0.28	0.33~0.50	0.05~0.07	
畦畔211	VI-10-8I	2.24	0.28~0.42	0.54~1.00	0.03~0.05	
畦畔212	VI-10-7G・H	6.72	0.20~0.40	0.48~0.78	0.03~0.05	水口203
畦畔213	VI-10-7G・H・8H・I	16.0	0.40~3.00	0.60~3.30	0.08~0.17	水口204

水田212

2調査区北東部のVI-10-4・5J地区で検出した。東部は調査区外に至る。北部が未耕地部分、西部が畦畔214に区割されている。検出部分で東西幅1.7m、南北幅4.3mを測る。作土層は第VI層である。水田の標高はT.P.+6.58~6.49mで西に向かって傾斜している。

水田213

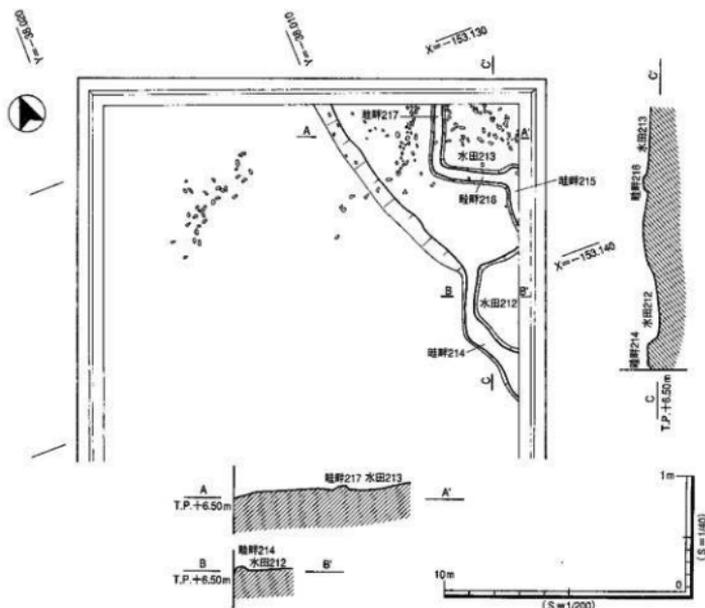
2調査区北東隅のVI-10-4J地区で検出した。北部および東部は調査区外に至る。西が畦畔217、南が畦畔216に区割されている。検出部分で東西幅3.1m、南北幅2.78mを測る。作土層は第VI層である。水田の標高はT.P.+6.56~6.63mで西に向かって傾斜している。

畦畔214

水田212の西側を区画している。「く」の字状に伸びるもので北は未耕地部分に取り付いている。検出長5.0m、上面幅0.33~0.90m、基底幅0.5~1.15m、高さ0.02~0.05mを測る。作土層である第VI層を盛り上げている。

畦畔215

畦畔216の東に取り付く畦畔で、南西-北東に伸びる。検出長2.4mを測るが上幅・基底幅は不明である。作土層である第VI層が盛られており、高さは0.05mを測る。



第23図 2調査区 中部水田断面図

畦畔216

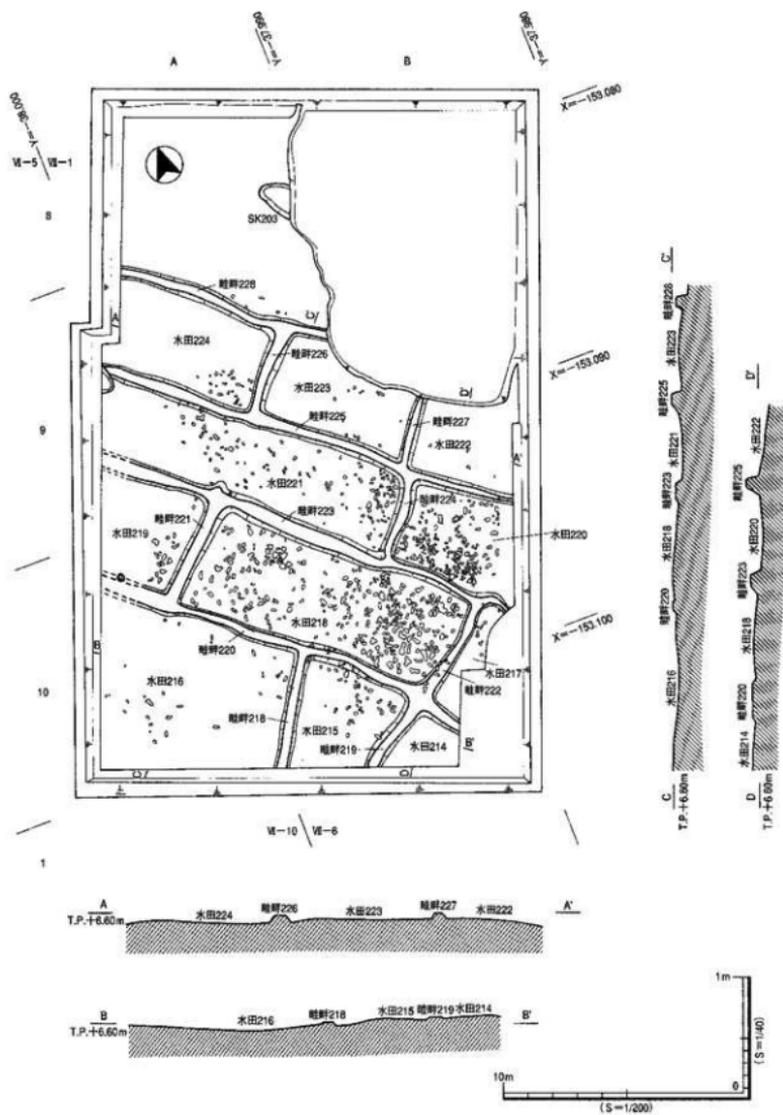
水田213の南側を区画する畦畔で、畦畔215の西に取り付く。検出長2.65m、上面幅0.37～0.45m、基底幅0.52～0.62m、高さ0.02～0.03mを測る。作土層である第Ⅵ層を盛り上げている。

畦畔217

水田213の西側を区画する畦畔で、畦畔216の西に取り付く。検出長2.69m、上面幅0.31～0.38m、基底幅0.18～0.52m、高さ0.01～0.03mを測る。作土層である第Ⅵ層を盛り上げている。

・北部水田〔水田214～水田224、畦畔218～畦畔228〕(第24図、図版一・一四)

4調査区のはほぼ全域の第Ⅵ層上面で検出した。検出部分で水田11筆(水田214～水田224)、畦畔11条(畦畔218～畦畔228)を確認した。水田の構築に際しては、北西-南東方向を基軸としてそれに直交する形が取られている。水田の一筆単位は水田218のように42.9㎡を測るものや、水田223のように小規模で22.0㎡を測るものがある。水田作土は第Ⅵ層で、畦畔は第Ⅵ層ないしは7.5YR5/3にぶい褐色砂質シルトが盛られている。畦畔は、断面形状が蒲鉾状で法量は上幅0.15～0.60m、基底幅0.30～0.90m、高さ0.03～0.11mを測る。水口は確認していない。水田面の標高は南東部が高くT.P.+6.67mで、最も低い北東部でT.P.+6.37m測りこの高低差を利用した灌漑水利が想定される。水田作土の第Ⅵ層には酸化鉄・マンガンの集積が認められないため、水捌けの悪い湿田の環境が推定される。水田215および水田217～水田221を中心として、多数の足跡が検出されており、水田上面に堆積している第Ⅲ層が足跡内に充填されている。なお、東接する位置で(財)大阪府文化財センターが行った多目的広場の発掘調査では本水田の東に続く水田(第



第24図 4調査区 北部水田断面図

3-1面)が確認されており、水田が東側へ約10m程度広がる事が確認された。各水田・畦畔の法量等の詳細については第12・13表に示した。水田の構築時期としては、第3面の遺構時期や水田の上面を覆う第Ⅲ層に古墳時代中期初頭に比定されるS X 101、S X 102が構築されていることから勘案して、古墳時代前期後半(布留式新相)が考えられる。

第12表 北部水田 水田法量表(単位m) ※田積は一筆として捉えたものに限定。

遺構番号	地区	形状	規模 (東西×南北)	田積(m ²)	標高(T.P.+)	備考
水田214	Ⅴ-6-1A	—	2.7×2.5	—	6.66~6.64	
水田215	Ⅴ-1-10A、Ⅴ-6-1A	—	4.0×4.1	—	6.67~6.58	
水田216	Ⅴ-5-10J、Ⅴ-6-1J Ⅴ-1-10A、Ⅴ-6-1A	—	7.7×6.8	—	6.62~6.54	
水田217	Ⅴ-1-10A・B、Ⅴ-6-1A	—	1.3×4.9	—	6.69~6.64	
水田218	Ⅴ-5-10J、Ⅴ-1-10A	長方形	11.0×3.9	42.9	6.65~6.54	
水田219	Ⅴ-5-9-10J、Ⅴ-1-9-10A	—	4.2×4.3	—	6.58~6.52	
水田220	Ⅴ-1-10A・B	—	4.5×4.0	—	6.60~6.50	
水田221	Ⅴ-5-9J、Ⅴ-1-9-10A	—	12.6×3.5	—	6.57~6.49	
水田222	Ⅴ-1-9B、10A・B	—	4.0×3.2	—	6.58~6.37	
水田223	Ⅴ-1-9-10A、9B	長方形	5.8×3.8	22.0	6.58~6.46	
水田224	Ⅴ-5-9J、Ⅴ-1-9A	—	6.5×3.8	—	6.54~6.49	

第13表 北部水田 畦畔法量表(単位m)

遺構番号	地区	検出長	上幅	基底幅	高さ	備考
畦畔218	Ⅴ-10-1A、Ⅴ-1-10A	4.90	0.30~0.40	0.60~0.70	0.04~0.10	
畦畔219	Ⅴ-6-1A	3.30	0.35~0.40	0.65~0.70	0.03	
畦畔220	Ⅴ-5-10J、Ⅴ-1-10A、 Ⅴ-6-1A	15.8	0.25~0.50	0.40~0.90	0.03~0.09	
畦畔221	Ⅴ-5-10J、Ⅴ-1-10A	4.30	0.40~0.60	0.70~0.85	0.03~0.06	
畦畔222	Ⅴ-1-10A、Ⅴ-6-1A	4.20	0.25~0.50	0.40~0.70	0.03~0.04	
畦畔223	Ⅴ-5-9J、Ⅴ-1-9- 10A、Ⅴ-1-10B	17.7	0.20~0.60	0.50~0.80	0.09~0.11	
畦畔224	Ⅴ-1-10A	3.50	0.30~0.45	0.60~0.70	0.06~0.10	
畦畔225	Ⅴ-5-9J、Ⅴ-1-9- 10A・B	17.6	0.15~0.45	0.30~0.70	0.03~0.10	
畦畔226	Ⅴ-1-9A	3.40	0.40~0.60	0.60~0.70	0.05~0.07	
畦畔227	Ⅴ-1-9B、10A・B	2.80	0.15~0.30	0.40~0.60	0.01~0.06	
畦畔228	Ⅴ-1-9A	8.70	0.25~0.50	0.60~0.65	0.03~0.08	

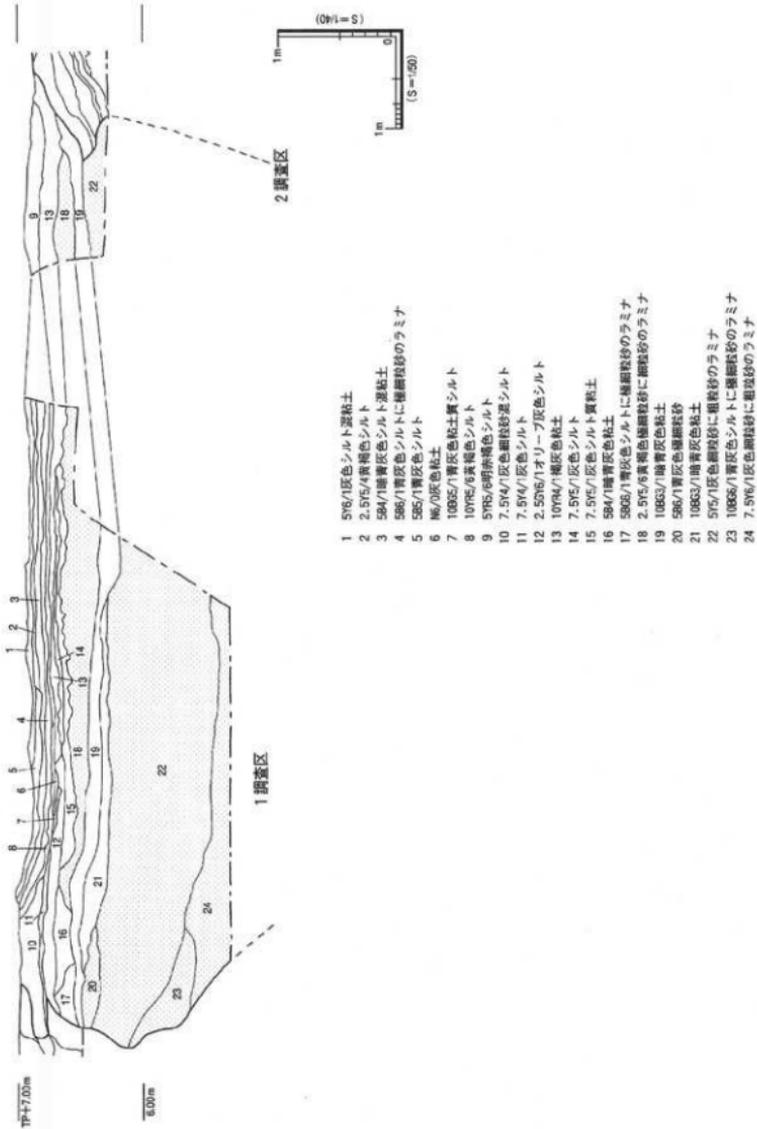
自然河川(NR)

NR201(第25・26図、図版二一)

1調査区北部から2調査区南部のⅤ-10-6・7HI地区で検出した。東西方向の流路を持つ自然河川であるが、その大半が下部調査の範囲に含まれているため平面的には捉えていない。西壁での観察では南北幅9.3m、深さ1.65m以上を測る。埋土は上部から0.6m迄に堆積する1層~21層がシルト・粘土・細粒砂の互層で、以下は細粒砂~粗粒砂が優勢な22層~24層が堆積している。2面で検出した近接する遺構との関係では、南部水田ならびにNR202より

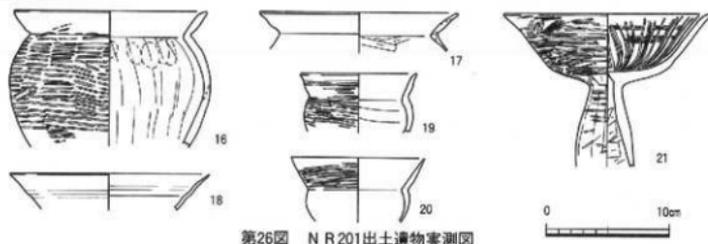


写真4 NR201西壁検出状況(東から)



第25図 N R 201断面図

先行するもので、それらの遺構構築時点では自然河川としての機能が停止していたようである。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式古相）～古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される土器類が少量出土している。土師器6点（16～21）を図化した。河川内堆積からの出土遺物であるためローリングを受けたものが大半を占める。16はV様式系甕の破片である。復元口径15.5cmを測る。口縁部は叩き出し技法によるもので、一部タタキの痕跡が残る。体部は内面が指頭圧痕と縦方向のナデ、外面は水平方向のタタキを施す。色調は淡褐灰色。胎土はやや粗く0.1～2mm大の長石、石英、黒雲母が多量に含まれている。古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される。17は庄内式甕の小破片である。色調は褐灰色。胎土中に1mm以下の長石、黒雲母、角閃石が多く含まれている。生駒西麓産。古墳時代初頭後半（庄内式新相）に比定される。18は口縁部が二段に屈曲する小形鉢である。復元口径16.4cmを測る。色調は褐灰色。胎土は精良。古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される。19・20は小形丸底壺である。共に口縁部の1/3が残存している。復元口径は19が9.3cm、20が10.8cmを測る。共に精製品で、色調は19が赤褐色、20が淡橙色である。形態的には口径が体部径を大きく凌駕する20が新しい様相を呈するもので、19が原田分類の小形壺B₃、20が小形壺B3にあたり、19が布留Ⅰ期、20が布留Ⅰ～Ⅱ期に盛行する器種である。21は高杯で裾部を欠く。口径16.6cmを測る。杯部は内面が放射状ヘラミガキ、外面は口縁部が横方向のヘラミガキ、体部がヘラケズリ。脚柱部は内面がヘラケズリ、外面が縦方向の面取りの後、横方向のヘラミガキを施す。色調は赤褐色。胎土中に0.1～1mm大の長石、石英を多量に含む。原田分類の高杯A₂に近い形態で布留Ⅰ～Ⅱ期に盛行する器種と考えられる。自然河川の埋没時期については、出土遺物から古墳時代前期前半（布留式古相）が推定される。なお、本河川は西接する（財）大阪府文化財センターによる水処理施設建設に伴う調査で検出された自然河川に対応するものである。



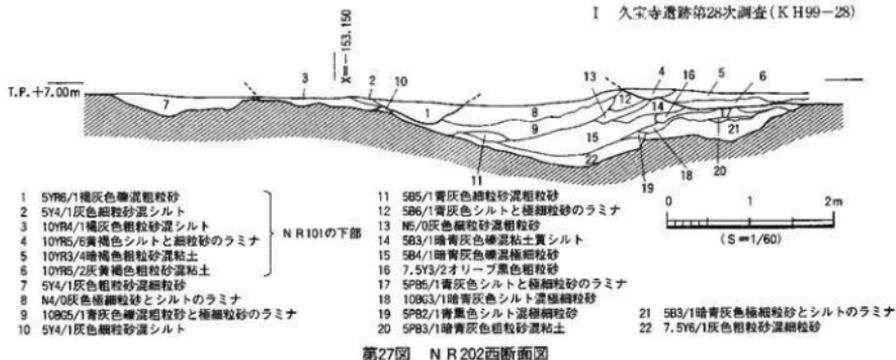
第26図 NR201出土遺物実測図

NR202（第27・28図、図版一三・二一・二二）

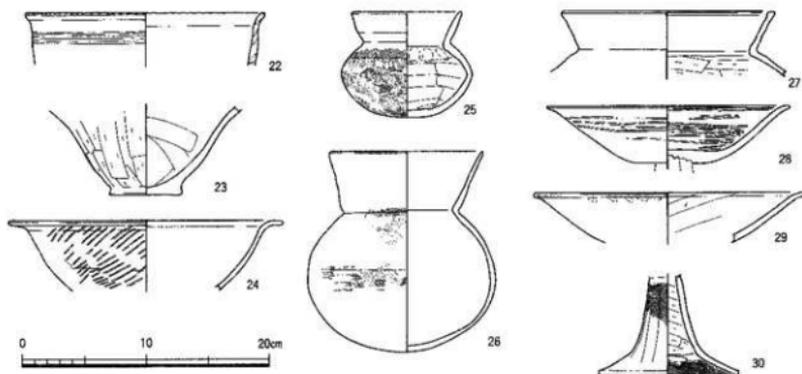
2調査区南部のVI-10-5・6H-J地区で検出した。上部はNR101として捉えている。北西-南東に流下するもので、検出長17.0m、幅7.0～7.9mを測る。断面形状は両岸が緩やかに下がるU字形で、深さは最深部で0.8mを測る。埋土は第25図に示した7～22層で、シルト～極粗粒砂が主体となっている。河川内からは弥生時代前期～古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される弥生土器、土師器、須



写真5 NR202検出状況(東から)



第27図 N R 202 西断面図



第28図 N R 202 出土遺物実測図

恵器の上器類の他、木製の板や杭が出土している。

9 点 (22~30) を図化した。内訳は22~24が弥生土器、25~30が古式土師器である。22はいわゆる如意形口縁を有する弥生土器の堯の小片である。復元口径19.3cmを測る。口縁端部に刻み目を有する他、体部外面上位に3条の沈線が巡る。色調は褐灰色。胎土中に0.5mm以下の長石・角閃石を多く含有する。生駒西麓産。弥生時代前期中段階に比定される。23・24は弥生土器の小形鉢で23は口縁部を欠く。残存部分で底径5.8cm、残存高7.0cmを測る。器面調整は体部外面が縦方向のヘラケズリ、内面は板ナデを施す。色調は褐灰色。胎土中に0.1~2mm大の長石・石英・チャートの他、スコープで角閃石の含有を認める。生駒西麓産。弥生時代後期初頭に比定される。24は内湾気味に伸びる体部に外折して大きく開く口縁部が付く鉢で底部を欠く。復元口径22.1cmを測る。口縁部は叩き出し技法によるもので、体部外面に施されたタタキが口縁部外面におよぶ。色調は淡褐灰色。胎土中に0.1~2mm大の長石・石英・チャート・赤色酸化土粒の他、スコープで少量の角閃石の含有を認める。弥生時代後期後半に比定される。25は土師器の小形丸底甕で、

体部最大径が口径を凌駕している。3/4以上が残存しており、口径8.6cm、器高8.8cm、体部最大径10.5cmを測る。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ。体部は内面屈曲部付近が指頭庄痕、以下横方向の指ナデで、外面は上半がタテハケ以下は乱方向のハケ調整が行なわれている。色調は淡褐色で胎土は精良である。外面の全面に煮沸された痕跡を残す煤が厚く付着しており、一部が火熱により器面剥離が認められる。古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される。26は土師器直口壺である。全体の1/2以上が残存している。口径12.2cm、器高16.5cm、体部最大径15.0cmを測る。器面調整は体部外面上半から頸部にかけてタテハケ、体部中位にヨコハケが施されているが全体に風化が進行しており不明瞭である。内外面の調整は丁寧で口頸部および体部にヨコナデないしはナデを多用して平滑にされている。色調は赤橙色で胎土は精良である。古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される。27は布留式壺の小破片である。復元口径16.8cmを測る。口縁部は「く」の字に屈曲するもので、口縁端部は内側に小さく肥厚する。体部内面のヘラケズリは屈曲部よりやや下がった地点以下に施されている。色調は内面が灰白色、外面が淡橙色である。胎土中に0.5mm大の長石・石英・チャートが多く含まれている。古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される。土師器高杯は3点（28～30）で28・29が杯部、30が脚部である。28は1/2が残存している。口径19.5cm、杯部高4.7cmを測る。杯部の屈曲部が丸味を帯びたもので、口縁部付近で小さく外反する。杯部内外面共に横方向のヘラミガキが施されているが、器面風化のため不明瞭である。色調は淡い灰褐色。胎土中に0.5mm以下の長石・チャート、角閃石が含まれている。29も28と同様の器形が推定される。色調は褐灰色。胎土は精良である。28・29共に古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される。28は土師器高杯の脚部である。裾径11.0cm、残存高8.0cmを測る。脚部外面はハケ調整の後、縦方向の面取り、内面はヘラケズリ、裾部はハケ調整を行なう。色調は赤褐色。胎土中に0.5cm大以下の長石粒が散見される。古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される。出土遺物には時期幅があるが、最も新しい遺物からみてN R 202の廃絶時期は古墳時代前期後半（布留式新相）が推定される。

足跡群（足跡群）

足跡群201

3調査区南部のVI-10-3 I・J、VII-6-3 A地区の第VI層上面で検出した。人にかかわるものが大半を占める。散発的に分布するが東部では一定歩行が確認できる部分がある。足跡内には、第2面を覆う第III層の洪水砂が入る。足跡の規模は20cm前後の成人のものが多くを占めるが、なかには10～15cmの子供と思われるものもある。

・第3面(第10図、図版一五～一九)

1～4調査区の下部調査で検出した。第X層上面で捉えた遺構面で、方形周溝墓2基(301号方形周溝墓・302号方形周溝墓)、溝1条(SD301)、水田(水田301)がある。但し、平面的な調査を実施したものは方形周溝墓2基のみで、他は断面観察によるものである。なお、水田については1筆耕地の単位が不明なため全体を水田301と捉えている。遺構の時期は古墳時代初頭前半～後半(庄内式古相～新相)が考えられる。

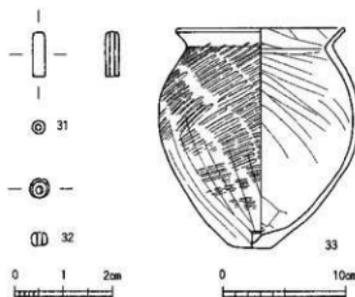
方形周溝墓(方形周溝墓)

3調査区の上部調査の終了後に管路布設部分を対象とした下部調査で、第X層上面(T.P.+6.3m前後)から切り込まれる溝と人為的に盛土された部分を確認した。そのため東西方向に拡張して平面調査を実施した結果、東西に並行して周溝を共有する古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される方形周溝墓2基(301号方形周溝墓、302号方形周溝墓)を検出した。なお、東接する位置で(財)大阪府文化財センターにより実施された多目的広場の調査では、割形形木棺を始めとして墳丘四隅の壺配置や祭祀土器群との関わりが推定される櫛状木製品が検出された「久宝寺1号墳」(古墳時代前期前半[布留式古相])が存在しており、西周溝の一部が本調査区に広がる可能性が高いが、この部分については面的な調査は実施していない。

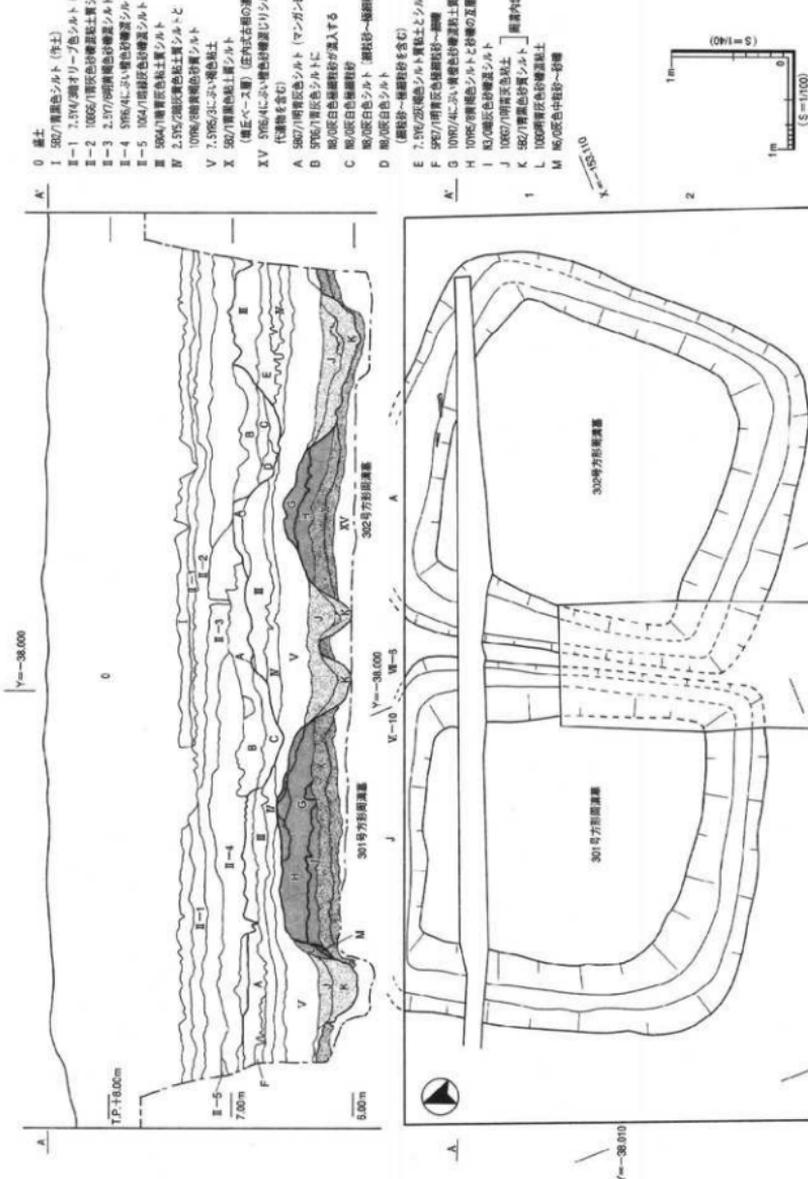
301号方形周溝墓(第29～32図、図版一五・一六・二三)

3調査区北部のVI-10-1J、VII-6-1A地区で検出した。主軸はN-35°-Eである。北周溝は調査区外に至り、南東部の墳丘および周溝は下部調査によって削平されている。墳形は方形で東西幅5.0m、南北幅5.5mを測る。周溝幅は1.2～1.9m、深さ0.2～0.3mを測るもので、東周溝が302号方形周溝墓の西周溝と共有している。墳丘は庄内式期に形成された土壌化層である第X層をベースとし、そこよりI層N3/0暗灰色砂礫混シルト、H層10YR5/8黄褐色シルトと砂礫の互層、G層10YR7/4にぶい黄橙色砂礫混粘土質シルトの3層が盛土されている。盛土高は0.33mで、周溝底から墳丘上面までの高さは0.55mを測る。周溝内の埋土は、上層がJ層10BG7/1明青灰色粘土、下層がK層5B2/1青黒色砂質シルトである。

埋葬主体部を構成する墓室は墳丘上面から約0.1m程度掘り下げた位置で検出した。検出位置は墳丘の中央部からやや西寄り、南北の主軸方向に並行している。隅丸長方形の形状で、東西幅1.15m、南北幅2.50m、深さ0.20mを測る。木棺は墓室内の中央部の南寄り位置で検出された。長方形の形状で、規模は東西幅0.33～0.38m、南北幅1.65m、深さ0.20mを測り、最下部ではベース層である第X層を切り込んでいる。棺材は頭位部分の小口板および側板の断片が僅かに遺存している程度であるが、おそらく組合式木棺であったと推定される。木棺内から人骨が検出された。頭位を北に持つ伸展葬で頭蓋骨、上腕骨、大腿骨、膝蓋骨が遺存していた。木棺内の出土遺物は左胸付

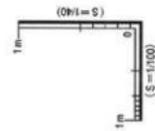


第29図 301号方形周溝墓出土物実測図



0 盛土

- I 50/7黄褐色シルト (粘土)
- II-1 7.5%の腐葉リブ色シルト (腐土)
- II-2 100%の黄褐色粘り強い粘土質シルト
- II-3 2.5%の腐葉粘り強い粘土質シルト
- II-4 5%の4Lに多い黄褐色粘り強いシルト
- II-5 100%の黄褐色粘り強いシルト
- III 50%の黄褐色粘り強い粘土質シルト
- IV 2.5%の黄褐色粘り強い粘土質シルトと10%の黄褐色粘り強いシルト
- V 7.5%の3Lに多い黄褐色粘り強いシルト
- X 50/7黄褐色シルト (粘土)
- XV 5%の4Lに多い黄褐色粘り強いシルト (急激な代換物を含む)
- A 50/7黄褐色シルト (マンガン質)
- B 5%の黄褐色シルトに1%の白色粘り強い土質を混入する
- C 100%の白色粘り強い土質
- D 100%の白色シルト (腐葉粘り強い粘り強い土質を含む)
- E 7.5%の2%の黄褐色粘り強いシルトの互層
- F 5%の1%の黄褐色粘り強いシルトの互層
- G 10%の4Lに多い黄褐色粘り強いシルトと粘り強い土質の互層
- H 10%の黄褐色粘り強いシルトと粘り強い土質の互層
- I 10%の黄褐色粘り強いシルト
- J 10%の黄褐色粘り強いシルト
- K 50/7黄褐色粘り強いシルト
- L 100%の黄褐色粘り強い土質
- M 100%の黄褐色粘り強い土質

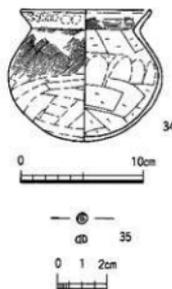


第30図 301号方形周溝、302号方形周溝平衡断面図

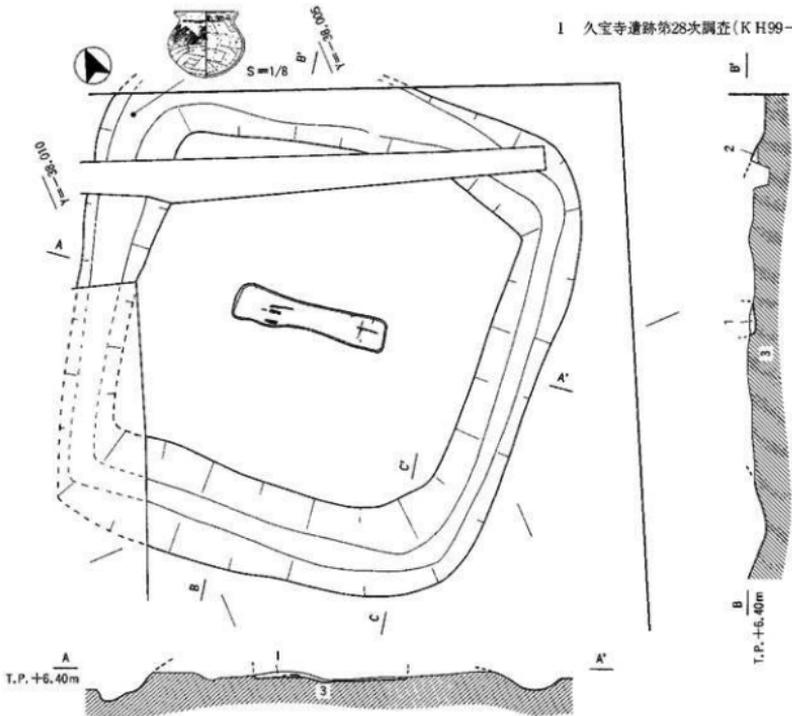
近から緑色凝灰岩製管玉1点(31)と木棺内埋土の中から発見されたガラス小玉1点(32)がある。周溝内からは周溝の北東隅から土師器甕1点(33)が出土している。31は緑色凝灰岩製管玉で完形品である。長さ9mm、幅2.5mm、紐孔径1mmを測る。色調は青灰色である。32のガラス小玉は埋葬主体部の墓壇内埋土を篩いかけた際に発見されたもので、棺内遺物であることは確実であるが出土地点は明確でない。側面の一部を欠く以外は完存している。上・下面が平滑に研磨されている。法量は径3mm、幅2mm、紐孔径1mmを測る。色調は明青色で光沢がある。33は土師器甕で体部の一部を欠くが、図上で完形に復元される。肩部に最大径を持つ体部から「く」の字に屈曲する口縁部が付くもので底部は突出しない平底を呈する。口縁部は叩き出し技法によるもので外面にタタキが残る他、口縁端部は内傾する小さな面を形成するが未調整で凹凸が目立つ。器面調整は内面がナデを多用し、外面は体部の上位から中位が単位幅の広い右上がりのタタキ、以下が縦方向の板ナデが施されている。体部外面には煤付着は認められないが中位以下に土器焼成時における器面剥離がある他、底部から体部下半に黒斑が認められる。色調は淡灰褐色。胎土中に0.5mm以下の砂岩・泥岩・チャートが多量に含まれており、その特徴から北摂地方からの搬入品と推定されるもので、中河内地域においては類例が少ない。構築時期は古墳時代初頭後半(庄内式新相)が考えられる。

302号方形周溝墓(第30・33~35図、図版一五・一七・二三)

3調査区北部のVI-10-1・2J、VII-6-1・2A地区で検出した。301号方形周溝墓の東に隣接し、西周溝が301号方形周溝墓の東周溝と共有する。主軸はN-42°-Eである。北周溝の北西部が調査区外に至り、南西部にあたる墳丘、周溝は下部調査によって削平されている。墳形は正方形で一辺5.6mを測る。周溝の幅は0.92~1.68m、深さ0.2~0.3mを測る。墳丘は301号方形周溝墓と同様、庄内式期に形成された土壌化層である第X層をベースとし、そこよりH層10YR5/8黄褐色シルトと砂礫の互層、G層10YR7/4にぶい黄橙色砂礫混粘土質シルトの2層が盛土されている。盛土高は最大0.25mで、周溝底から墳丘上面までの高さは0.60mを測る。周溝内は埋土は2層で上層がJ層10BG7/1明青灰色粘土、下層がK層5B2/1青黒色砂質シルトである。墳丘の中央部で墓壇を検出した。墳丘の主軸に対して垂直方向に設置されている。ただし、上部の第1面で検出したS X102調査時点で下部層を対象とした掘削を実施した結果、302号方形周溝墓の墳丘および埋葬主体部を削平するに至ってしまった。したがって、検出部分での墓壇形状は本来の形状を示していない。検出部分で東西幅2.51m、南北幅0.42~0.61m、深さ0.02~0.1mを測る。墓壇内からは棺材片および人骨片が少量出土しており、西部で検出した人骨を大腿骨、膝蓋骨と考えれば頭位が東であったと推定される。遺物は、墓壇内からガラス小玉1点と周溝内から土師器甕1点と壺の破片が数点出土している。土師器甕1点(34)とガラス小玉1点(35)を図化した。34の土師器甕は周溝北西隅の最下部から出土した。球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付く小形の甕で、体部外面にハケを多用することから布留式影響の庄内式甕に分類される。体部の一部を欠くが2/3以上が残存している。口径10.5cm、器高10.9cm、体部最大径12.5cmを測る。器面調整は内面口縁部がヨコハケ、体部は上位と下位

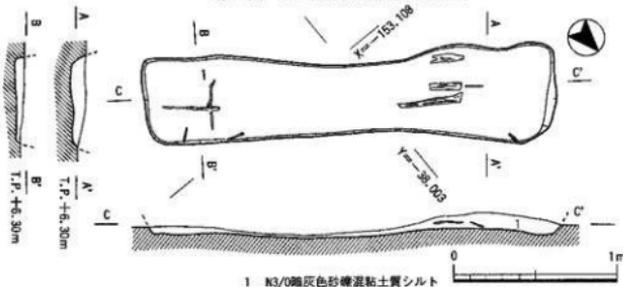


第33図 302号方形周溝墓出土遺物実測図



- 1 N3/0暗灰色砂礫混粘土質シルト (主体部内埋土)
 - 2 2.5Y6/4にぶい黄色~2.5Y4/2暗灰色砂礫混シルト (墳丘盛土) (G層)
 - 3 N3/0暗灰色砂質シルト (庄内式古相根曲層) (X層)
 - 4 10B67/1明黄灰色粘土質シルト (植物ラミナを含む) (V層)
 - 5 10B67/1明黄灰色粘土 (I層)
 - 6 2.5G5/1オリブ灰色粘土質シルト (J層)
 - 7 5R2/1黄黒色砂礫混シルト
 - 8 5Y6/4にぶい橙色砂礫混シルト
- 周溝内埋土

第34図 302号方形周溝基平断面図



- 1 N3/0暗灰色砂礫混粘土質シルト

第35図 302号方形周溝基主体部平断面図

がヘラケズリで中位が指ナデを施す。外面は口縁部がヨコナデであるが指頭による圧痕が残る。体部は上位から中位にかけて右上がりのハケ調整が多用されており、庄内式墓の新相段階に特有な右上がりの細筋タタキは部分的に認められる程度である。中位以下は指ナデにより平滑にされている。色調は褐灰色。胎土中に0.2～4mm大の長石・石英・チャートを多く含む他、スコープで角閃石の含有が確認できる。体部外面の中位以下に煤の付着が認められる。古墳時代初頭後半（庄内式新相）のものとして推定される。35のガラス小玉は埋葬主体部の墓壇内埋土を篩ひにかけた際に発見されたもので、棺内遺物であることは確実であるが出土地点は明確でない。完形品で上・下面が平滑に研磨されている。法量は径3.5mm、幅3mm、紐孔径1mmを測る。色調はコバルトブルーで光沢がある。構築時期は古墳時代初頭後半（庄内式新相）に比定される。

小結

3調査区北部の第3面で検出した301号方形周溝墓・302号方形周溝墓については、形状、規模の共通性ならびに隣接して構築されていることから地縁・血縁的な結びつきが強い有力家父長の墓が想定される。構築時期については、2基共に古墳時代初頭後半（庄内式新相）に比定される。2基の先後関係については、周溝が接近する301号方形周溝墓東周溝と302号方形周溝墓西周溝の双方の堆積状況が観察できた北壁断面では切り合いや再掘削の痕跡が認められないことから、同時期ないしは近い時期が想定される。本調査以降、本調査地の東部で（財）大阪府文化財センターにより実施された多目的広場の発掘調査では、割竹形木棺を主体部に持つ久宝寺1号墳が検出された他、西部では水処理施設建設に伴う発掘調査で60基におよぶ墳墓群が検出されている。約22000㎡におよぶ水処理施設建設に伴う発掘調査では、庄内式期～布留式期の間、溝に区画された墓域と生産域を持つ集落構成が確認されており、墓域については東西の2箇所が存在することが明らかとなった。本調査検出の301号方形周溝墓・302号方形周溝墓は、東部の墓域に含まれており、水処理施設建設に伴う発掘調査で検出された墳墓6基（3号墳～8号墳）および久宝寺1号墳を含めた9基以上からなる墳墓で墓域が構成されている。東部の墓域のなかで、301号方形周溝墓・302号方形周溝墓は墳墓の配置関係からみて南東に隣接する久宝寺1号墳との有機的な関係が推定される。構築時期は301号方形周溝墓・302号方形周溝墓が庄内式新相、墳丘規模が前者に比して大きい久宝寺1号墳が布留式古相に比定される。久宝寺遺跡の西側に隣接する大阪市の加美遺跡第1次調査で検出された46基の墳墓群においては、庄内式期～布留式期にかけて連続的に構築された墳墓群のなかで、特に布留式古相段階以降に墳丘規模が拡大することが指摘されており、本例も加美遺跡墳墓群内で顕在化した事象と符合した推移が考えられる。

なお、301号方形周溝墓・302号方形周溝墓の主体部からは各1体の人骨が出土している。遺存状態の良好な301号方形周溝墓については、主体部全体の切り取りを実施し展示資料として保存処理を講じている。さらに2体の人骨については、性別等の諸データの詳細から当該期の墓制の在り方を追及する目的でDNA分析を実施している。結果的には、人



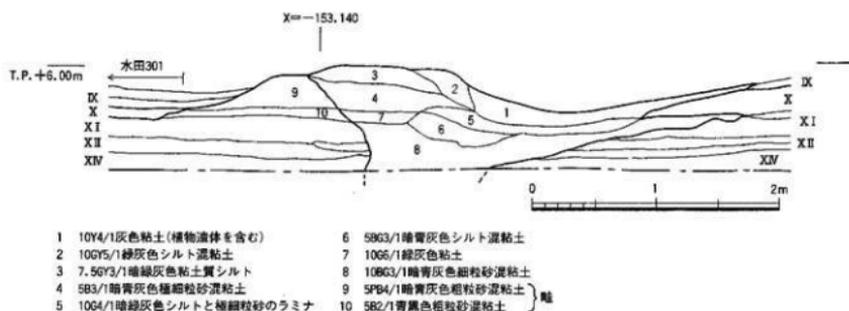
写真6 301号方形周溝墓埋葬主体部取り上げ風景

骨の保存状態が良好でなくDNAの抽出作業が困難であったようである。詳細については、第4章第1節で示しているが新たな知見は見い出せず満足な結果は得られていない。今後、このように墳墓から人骨が検出されるケースにおいては、調査時点において現代人のDNAが混入しない適切な対応を講じる必要がある他、このような自然科学分野の分析が恒常的に実施できる調査組織内の環境を整備し、有用なデータの蓄積を計ることが今後の課題であろう。

溝 (SD)

SD301 (第36図)

2調査区北部のVI-10-4・5I地区の下部調査で検出した。平面的には捉えていないが、東西の断面で検出されていることから流路方向は東-西が推定される。そのうち西断面の形状はV字形を呈するもので、規模は検出部分で上幅3.6m、深さ0.85mを測る。埋土は粘土を主体とする8層から成る。南肩部分に9層・10層で構成される畦を形成し、そこより南側に水田301が広がっている。遺物は出土していないが堆積状況や他遺構との関係から、古墳時代前期前半(布留式古相)には機能が停止している。なお、西接する(財)大阪府文化財センターによる水処理施設建設に伴う発掘調査においては、本溝の西側に続く部分が検出されており、本調査地と同様北側の墓域と水田で構成される南側の生産域を画する溝であったようである。



第36図 SD301西壁断面図

水田 (水田)

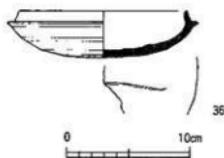
水田301

1・2調査区の下部調査断面で畦畔を認めたことから水田と認識したもので、平面では捉えていない。T.P.+5.7~5.5mに存在する第X層を作上とするもので、2調査区の北部で検出したSD301より南部に展開しており、西接する(財)大阪府文化財センターによる水処理施設建設に伴う発掘調査で検出された水田に続く。水田上面は極細粒砂~中粒砂が優勢な第IX層が堆積している。なお、1調査区の水田作土を構成する第X層から古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土師器・重口緑壺の小破片が出土していることや、水田上部の第VIII層中から古墳時代前期前半(布留式古相)のが出土していること等を勘案して水田の存続時期は庄内式期の範疇に収まるものと推定される。

2) 遺構に伴わない遺物

第Ⅲ層出土遺物 (第37図、図版二三)

須恵器杯身1点(36)を図化した。出土位置は1調査区北部のVI-10-6 H地区である。36は須恵器杯身で約1/3が残存している。復元口径13.4cm、器高3.8cmを測る。やや浅日の体部から受部が短く水平方向に伸びた後、たちあがり内傾して短く伸びる。底部に直線状のヘラ記号があるが破片のため全容は不明である。色調は灰青色。焼成は堅緻。田辺縄年のTK43型式(6世紀末)に比定される。



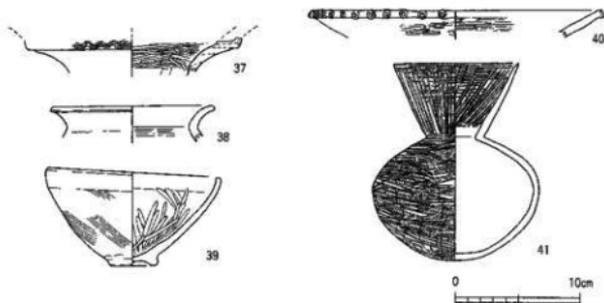
第37図 第Ⅲ層出土遺物実測図

第Ⅴ層出土遺物 (第38図、図版二三)

3点(37~39)を図化した。37は二重口縁壺の頸部の小破片である。頸部端に擬山縁を形成した後、外反する口縁部が付くもので、頸部と口縁部の境に幅広の稜を持つ。器面調整は頸部内外面にヘラミガキ、外面はヨコナアでの他、稜部分に波状文が施文されている。色調は淡灰褐色。胎土中に1mm大の長石、赤色酸化土粒が散見される。古墳時代初頭前半(庄内式古相)のものか。38は甕口縁部の小破片である。復元口径12.9cmを測る。小破片のため体部外面の調整が不明瞭であるが、その特徴から庄内式期に比定されるV様式系甕と考えられる。色調は褐灰色。胎土中に0.1~1mm大の長石、チャートをよく含む。39は上げ底の底部を有する小形鉢である。一部を欠くがほぼ完形に復元が可能である。口径13.7cm、器高7.7cm、底径4.0cmを測る。器面調整は口縁部内外面にヨコナア、体部内面に縦方向のヘラミガキ、外面がハケの後ナアを施す。色調は淡褐灰色。胎土中に1mm大の長石が散見される。弥生時代後期末に比定される。

第Ⅹ層出土遺物 (第38図、図版二三)

X層は当調査地付近一帯に広く分布する土壌化層で、2調査区の北部以南では水田作土層を構成している。2点(40・41)を図化した。40は1調査区南部のVI-10-8 H地区から出土した。二重口縁壺の口縁端部片と考えられる。復元口径23.3cmを測る。内傾する端部に竹管押入円形浮文が施文されている。色調は淡橙色。胎土は精良。古墳時代初頭前半(庄内式古相)のものか。41は2調査区北部のVI-10-4 J地区で検出した。球形の体部に斜上方に直線的に伸びる直口の口頸部が付く直口壺で、口縁部を欠く以外は完存している。口径10.0cm、器高16.1cm、体部最大

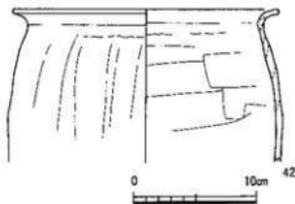


第38図 第Ⅴ層(37~39)・Ⅹ層(40・41)出土遺物実測図

径13.4cmを測る。器面調整は全体に丁寧で、口頸部内外面が横方向のヘラミガキの後、放射状にヘラミガキ。体部は内面がナデ、外面は上位から中位迄が左上がりのハケ調整の後、横方向のヘラミガキ、中位以下がヘラケズリの後横方向のヘラミガキが施されている。色調は褐灰色。胎土は精良であるが、赤色酸化土粒による橙色の斑点が多く認められる。時期的には古墳時代初頭後半(庄内式新相)～古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される。

第XII層出土遺物(第39図、図版二三)

第XII層からの出土遺物は極少量で図化し得たものは弥生土器壺1点(42)のみである。42は如意形口縁を呈する壺の破片で2調査区のVI-10-6 I地区から出土した。復元口径21.5cmを測る。口縁部内外面がヨコナデ。体部は内面が横方向の板ナデ、外面が縦方向指ナデを施す。色調は淡灰褐色～淡橙色。胎土中に0.1～3mm大の長石、石英、黒雲母、角閃石が含まれている。畿内第II様式に比定される。



第39図 第XII層出土遺物実測図

参考文献

・弥生土器

- 小林行雄・佐原 真 1964『紫雲出』詫間町文化財保護委員会
寺沢 薫・森井貞雄 1989「1河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編 I』木耳社

・古式土師器

- 原田昌則 1993「第5章 まとめ 3」中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案「II久宝寺遺跡(第1次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告37

・須恵器

- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ
◇ 1981『須恵器大成』角川書店

・古代の土師器

- 佐藤 隆 1992「平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告 V』(財)大阪市文化財協会

・黒色土器

- 橋本久和 1986「畿内の黒色土器(1)」『中近世土器の基礎研究 II』中世土器研究会

・瓦器椀

- 尾上 実 1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論叢』同刊行会

・近世井戸

- 河内 浩 1995「讀・近世農耕井戸試考」『関西近世考古学 III』関西近世考古学研究会

第4章 自然科学的分析

第1節 久宝寺遺跡第28次調査(KH99-28)出土人骨DNA鑑定業務

(株)ベックス 森泉俊幸

大阪府八尾市の久宝寺遺跡第28次調査で古墳時代初頭後半(3世紀後半)の2基の方形周溝墓の発掘が行われた。本報告書は、その主体部より検出された人骨2体のDNA分析の結果について述べる。

分析材料

今回分析に用いたサンプルの検出地点は以下のとおりである。平成11年9月1日より平成12年3月10日に実施した久宝寺遺跡第28次3調査区(KH99-28-3)において2基の方形周溝墓、301号方形周溝墓および302号方形周溝墓が発掘された。301号方形周溝墓は全身骨格がほぼ残存しており、302号方形周溝墓は遺物状況が悪く一部のみが残存していた。DNA分析用には301号方形周溝墓の骨盤部分(サンプル1)および302号方形周溝墓の一部(サンプル2)、いずれも繊維状の遺物を供試した。

DNA分析の方法

現代人のDNAであれば性別鑑定および2体の親子鑑定などを行うことが可能であるが、この鑑定には1細胞に1コピーしか含まれていないDNA領域を解析する必要がある。本サンプルではこの解析とともに、細胞に複数コピーが含まれるミトコンドリアDNA(以下、mtDNAと呼ぶ)の解析を行う。mtDNAは核DNAより5~10倍速く塩基置換がおこっており、さらにmtDNAのnoncoding(Dループ)領域では他の領域に比べ、塩基置換が数倍速いことで知られている。すなわち、各個体間の変異を調べるのには非常によい領域である。したがって、mtDNAのDループにおける塩基配列の決定を試みる。

まず、以下のとおりAからDのDNA抽出方法の検討を行った。

抽出法A:

1. 液体窒素に3分入れ、粉末状に粉砕。
2. 0.5M EDTAを10ml加える。
3. 水飽和フェノール抽出(5ml)、CIAA抽出(クロロフォルム溶液24:イソアミールコール溶液1を5ml)を各2回行う。
4. -20Cのエタノール20mlを加え、沈殿。
5. Milli-Q water 2mlを加え、溶解。
6. 10Mリチウム・クロライド0.5mlを加える
7. オンアイスで30分
8. 遠心後、上澄みを新チューブに取り出し、2倍量のエタノールで沈殿。
9. Milli-Q water 0.1mlで溶解

抽出法B：

1. 液体窒素に入れ、粉末状に
2. 0.5M EDTAを10ml加える。
3. プロテナーゼKを5mg加える。(歯の場合はコラゲナーゼ5mgをプラス)
4. 10時間37度でインキュベート
5. 飽和水フェノール・クロロフォルム溶液24：イソアミルアルコール溶液1 半量で2回精製
6. 上層を捨て、-20℃のエタノール20mlを加え、沈殿。
7. d.d.w. 2mlに溶解
8. 10Mリチウム・クロライド(4c) 0.5mlを加える
9. オンアイスで30分
10. 遠心後、上澄みを捨て、2倍量のエタノールで沈殿。
11. d.d.w. 0.1mlで溶解

抽出法C：

1. 液体窒素に入れ粉末状に
2. 0.5M EDTAを10ml加える。
3. 飽和水フェノール・クロロフォルム溶液24：イソアミルアルコール溶液1 半量で2回精製
4. 上層を捨て、-20℃のエタノール2倍量を加え、沈殿。
5. d.d.w. 2mlに溶解
6. 10Mリチウム・クロライド(4c) 0.5mlを加える
7. オンアイスで30分
8. 遠心後、上澄みを捨て、2倍量のエタノールで沈殿。
9. d.d.w. 0.1mlで溶解

抽出法D：

一ヶ月以上、4℃の0.5M EDTAに保存。

液体窒素を入れ、Cryo-Press CP-100で破砕

Silica based Thethod

1. リシスバッファー 1mlを入れる

Lysis Buffer

0.1M Tris-HCl(pH6.4) 10ml

GuSCN 12g

0.02M EDTA 2.2ml

Triton X-100 0.5ml

2. よくボルテックス後、65℃でオーバーナイト時々、攪拌する。
3. 1500gで5分、遠心後、上澄み500ulを新チューブに移す
4. Lysis Buffer 500ulを加える
5. 室温、遮蔽保存の3% Silicon Dioxide Solution 40ulを加える。

6. 室温で15分
7. 数分遠心後、上澄みを捨てる
8. ベレットを0.1Mtris-HCl(pH6.4) 500ulで2回洗う10M GuSCN
9. ベレットを70%エタノールで2回洗った後、アセトンで洗う。
10. 60℃のヒートブロックでDry up後、超純水65ulを入れ56℃で溶解50ulをTemplateとする。

上記の結果より、サンプル表面にUVを照射後、抽出法Aを改変し、以下の方法で本サンプルよりDNAを抽出した。

1. 0.5M EDTAを500ul加え、ボルテックス。
2. 水飽和フェノール(1/2vol.)、クロロフォルム溶液24：イソアミルアルコール溶液1を(1/2vol.) 500ul (CIAA抽出)加え、ボルテックス後15000rpm、3分遠心。このCIAA抽出を2回繰り返す。
3. 3分、15000rpm遠心。
4. -20℃のエタノール2 vol. (900ul)を加え、-20℃で30分以上保管(エタノール沈殿)。
5. 10分、15000rpm遠心。
6. 上澄み液を捨て、Water100ul (Milli-Q)を加え、ボルテックスし、溶解。
7. 10Mリチウム・クロライド溶液25ulを加える。
8. オンアイスで30分。
9. 10分遠心後、上澄みを新チューブ(125ul)に取り出し、2 vol (250ul)の100%エタノールを加える。-20℃で30分以上Overnight(エタノール沈殿)。
10. 10分遠心後、60℃のDryBathで10分以上乾燥。(エタノールを完全に揮発)
11. Water10ul (Milli-Q)で溶解、ボルテックス。
12. 60℃のDryBathで5分、その後2、3分遠心

次に、上記の方法で抽出されたDNAのPCRを行う。本サンプルではmtDNAのDループの塩基配列を決定するため、人骨の抽出液10ulから増幅した。使用したプライマーは以下のとおりである。

プライマー-A：5' -16, 190CCCCATGCTTACAAGCAAG16, 208-3'

プライマー-B：5' -16, 422ATTGATTTTCACGAGGATGG16, 403-3'

[数字はAndersonら(1981)のヒトmtDNAの塩基番号による]。

このプライマーにより、mtDNAのDループ領域である233塩基対の断片の増幅が予想される。

PCRの反応条件は検討の結果、以下のとおりである。

DNAの変性：94℃、30秒

アニーリング：55℃、30秒

DNAの合成：72℃、60秒

この条件下で40サイクル行った後、バンドが検出されない場合は、さらに1回目のPCRプロダクトをテンプレートと同じ条件でPCRを行った。増幅されたDNA断片を1.5%アガロースゲルにより電気泳動で分離。それをエチジウムブロマイドで染色し、検出した。

分析の結果と考察

分析で増幅したサンプル1についてAndersonら(1981)によってすでに報告されている配列および宝来ら(1990)によって報告されている浦和1号との比較を試みた。

この浦和1号とは1988年、浦和市地下5mから6000年前のヒトの頭骨が発掘されたものである。これは頭骨の形態的特長から典型的な縄文人骨と見なされた。

図1より配列の読めた部分だけをAndersonらの配列と比較すると、一箇所ですべてT-Cの相違がある。浦和1号を同様に比較すると、2箇所、N.C.の検出者とは3箇所の相違が見つかった。よってサンプル1については浦和1号とも主実験者とも異なる配列を有していたことがわかった。なおmtDNAは母親から子にだけ伝わるいわゆる母系のDNAである。つまり本結果は、サンプル1が浦和1号と異なる母系に由来することを示す。

なおサンプル2について配列は読めたものの、コンタミの恐れがあり、なお、実験を要する。また、今回の結果では前半部分の配列が読めなかった。ここはDループ内のいわゆる超過変領域であり、ここを読むことでさらに詳細なデータが得られるものと期待される。この部分については今後更なる実験を試みたい。なお超可変ドメインはわずかに14塩基の領域で、塩基置換や欠失、挿入などがあり、17種の異なる配列が観察されている。これにより、日本人が2大クラスター、黒人集団とモンゴロイドの一部(日本人I)、および白人集団とモンゴロイド集団(日本人II)に分かれることも報告されている。

参考文献

- Oota H., Saitou N., Matsushita T., Ueda S., Molecular Genetic Analysis of Remains of a 2000-Year-Old Human Populair in China-and Its Relevance for the Origin of Modern Japanese Ppuraion, *Am.J.Hum.Genet.*64:250-258, 1999
- Oota H., Saitou N., Matsushita T., Ueda S., S genetic study of 2000-year-old human remains from Japan using mitochondrial DNA sequences *Am J Phys Anthropol* 98:133-145, 1995
- Brown, W.M., George, J.R.M., Wilson, A.C.:*Proc.Natl.Acad.sci.USA*76:1967-1971, 1979
- Anderson, S., Bankier A.T., Barrell B.G., DeBruijn M.H.L., Coulson A.R., Drouin J., Eperon I.C., Neirlich D.P., Roe B.A., Sanger F., Schreier P.H., Smith A.J.H., Staden R., Young I.G., *Nature*296:457-465, 1979
- Horai S., Gojobori T., Matunaga E., in *Human Genetics*(eds.Bogel F.,Sperling K.), *Proceeding of the 7th International Congress:177-181, Springer-Verlag, Heidelberg*

図1 Dループ領域の一部(190塩基対)の塩基配列

	16190				
Anderson	CCCCATGCTT	ACAAGCAAGT	ACAGCAATCA	ACCC	TCAACT
サンプル1					
浦和1号					T
N.C.					
	50				
Anderson	ATCACACATC	AACTGCAACT	CCAAAGCC	AC	CCC
サンプル1					
浦和1号					
N.C.				C	C
	100				
Anderson	CTAGGATACC	AACAAACCTA	CQCACCC	T	ACAG
サンプル1					
浦和1号				T	
N.C.					
	150				
Anderson	GTACATAAAG	CCATTTACCG	TACATAGCAC	ATT	TACAGTCA
サンプル1					
浦和1号					
N.C.					
	190				
Anderson	AATCCCTTCT	CGTCCCATG	GATGACCCCC		
サンプル1					
浦和1号				C	
N.C.				C	

注：上段にはAndersonら(1981)によって報告された配列、2段目には今回のサンプル1、3段目には浦和1号、4段目N.C.は今回の検出者で、変異があった部分を上段に下線で示し、下段に塩基を示した。なお、-は塩基が決定されなかった部分。

第5章 まとめ

本調査では3面（第1面～第3面）に亘る調査を実施した結果、古墳時代初頭～近世に至る遺構・遺物を検出した。ここでは、旧国鉄竜草操車場跡地内で実施した既往調査成果をもとに古墳時代初頭前半以降の集落の推移を概観してみる。

・古墳時代初頭前半～後半（庄内式古相～新相）

当該期の遺構としては、第3面で検出した方形周溝墓、水田、溝がある。2区の北部を横断するS D 301を境に北部に墓域、南部に水田を中心とする生産域が広がっている。北部の墓域では301号方形周溝墓・302号方形周溝墓が東西に隣接して検出された他、平面的には捉えていないが東断面では東接する多目的広場の調査で検出された「久宝寺1号墳」の西周溝が確認されている。これら3基の墳墓は隣接した位置に構築されていることから地縁・血縁的な紐帯を核とする有力家父長の連続した遺構と推定される。構築時期は301号方形周溝墓・302号方形周溝墓が古墳時代初頭後半（庄内式新相）、「久宝寺1号墳」が古墳時代前期前半（布留式古相）に比定されるもので、特に「久宝寺1号墳」については、割竹形木棺の使用、墳丘四隅における壺形埴輪の使用と言った古墳文化の初期段階の様態を中河内地域でいち早く受容した古墳として位置付けられる。なお、近接する位置で（財）大阪府文化財センターにより実施された久宝寺（99-1～5）、多目的広場、水処理施設の調査および（財）八尾市文化財調査研究会による本調査、第23次調査の調査成果を総合すれば、当該期の集落は水処理施設調査地の中央部分を南西から北東方向に伸びる西側の自然河川および並行して伸びる東側の溝と東側の溝に合流する溝（本調査のS D 301に該当）により集落内の分化が計られている。その内の墓域については、自然河川、溝により区画されて東西の2箇所が存在することが認められ、本調査地検出の301号方形周溝墓・302号方形周溝墓および水処理施設検出の6基（3号墳～8号墳）、多目的広場の「久宝寺1号墳」を含めて現時点は9基からなる東部の墓域を構成している。

・古墳時代前期前半（布留式古相）

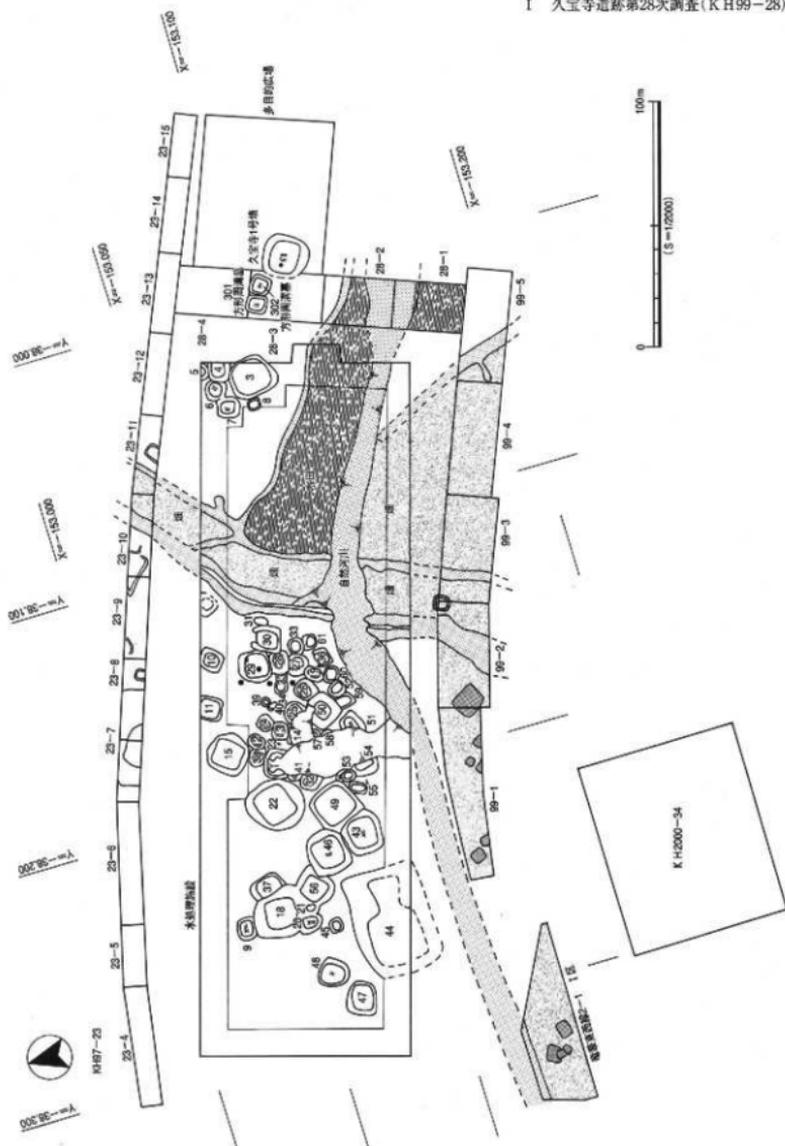
当該期の遺構としては、1調査区の北部から2調査区南部で検出したN R 201がある。東西方向に伸びるもので、西部が水処理施設の調査で検出されており、庄内式古相～新相の生産域を構成する自然河川、溝、水田を切って西側に流下している。

・古墳時代前期後半（布留式新相）

2調査区で検出したN R 202および4調査区で検出した北部水田がある。N R 202はN R 201の北部に隣接するもので、N R 201が布留式古相に機能を停止した後の流路と考えられる。N R 201と同様、西部の水処理施設の調査で検出されている自然河川に続くものである。北部水田は、東接する位置で実施された多目的広場の調査で本水田の東に続く水田（第3-1面）が検出されており、東部に約10m程度広がることが確認されている。

・古墳時代中期

3調査区北部で性格不明な遺構2箇所（S X 101・S X 102）を検出している。いずれも溝状の遺構を呈するものであるが、北接する4調査区まで広がらず全容が不明で、機能の位置付けが断定できないものである。出土遺物については、S X 102付近から出土した高杯の年代観から、築



第40図 本道跡周辺の古墳時代初頭前半(庄内式古相)～前期前半(布留式前半)の集落分布図

時期は古墳時代中期初頭以降であることが言える。その他、1調査区北部～南部で検出した小穴群がこの時期に該当する。当該時期の集落域の中心は南東約250m地点の第24次調査地で検出されている。

・飛鳥時代中葉

1調査区で検出したSK102が該当する以外は検出されておらず、また明瞭な包含層を形成していない。当該期の遺構は北東約160mで実施された95-8トレンチ第5面で検出されている。

・平安時代前期

2調査区で検出されたSK105がある。当該期の遺構は北東部に近接する23次調査15・16地区や南東部に接する24次調査3・5調査区で散発的な広がり確認されている。なお、電華操車場建設により寸断された久宝寺と亀井の集落を南北に伸びる道路が現在の久宝寺駅の東部を通過したものと推定され、当該期の集落はこの道路に沿って展開したものと推定される。

・平安時代後期

2調査区で検出したSK106がある。23次調査の17調査区、24次調査の4・5調査区で検出されており、先述した久宝寺と亀井の集落を結ぶ道路の東部を中心とした分布が認められる。

・近世

第1面で検出したSE101・SK103・SK108や東西方向および南北方向に伸びる小溝が当該期に比定されるもので性格としては、余て農耕に関連した遺構と推定される。

参考文献

- ・原田昌則・吉田珠己・岡田清一・古川晴久・樋口 薫 1999「8.久宝寺遺跡第23次調査(KH97-23)」『平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村 歩・酒井春子 2000「平成10.11年度久宝寺遺跡(電華東西線)発掘調査終了報告』(財)大阪府文化財調査研究センター 内部資料
- ・原田昌則 2001「中河内地域における定型化する古墳以前の墓制について」『実証の地域史-村川行弘先生頌寿記念論集-』村川行弘先生頌寿記念会
- ・西村 歩 2001「久宝寺1号墳の調査成果」『大阪府埋蔵文化財研究会(第43回)資料』大阪府教育委員会、(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・原田昌則他 2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書-大阪電華都市拠点地区電華東西線3工区の掘削工事に伴う-」『(財)八尾市文化財調査研究会報告69』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・(財)大阪府文化財センター 2002年8月24日「久宝寺遺跡現地説明会資料」
- ・(財)大阪府文化財センター 2003年5月24日「久宝寺遺跡現地公開資料」
- ・西村 歩・南条直子 2003「八尾市亀井地内所在 久宝寺遺跡・電華地区発掘調査報告書V-大阪電華都市拠点土地区画整理事業(都市機能更新事業)に伴う発掘調査-」『(財)大阪府文化財センター調査報告書第103集』(財)大阪府文化財センター

図 版



保存処理を行った301号方形周溝基埋葬主体部
(八尾市立埋蔵文化財調査センター展示室)



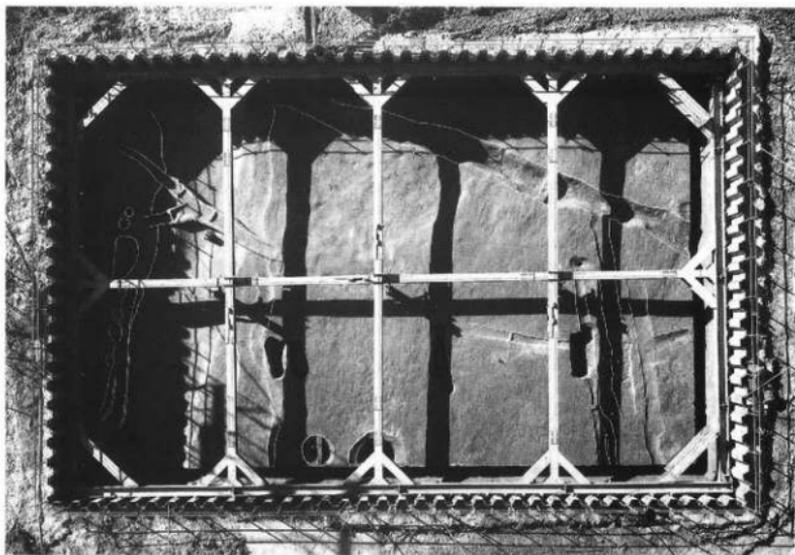
調査地遠景(東から)



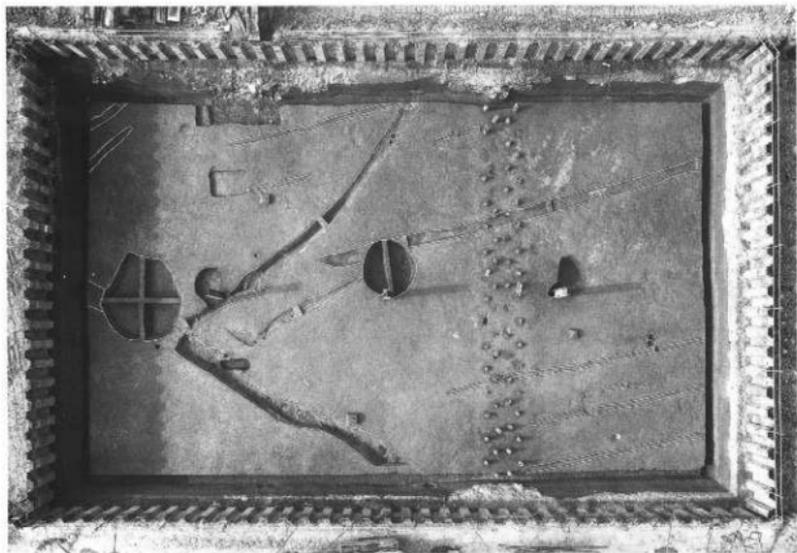
調査地遠景(南から)



28-1 調査区 第1面全景(東から)



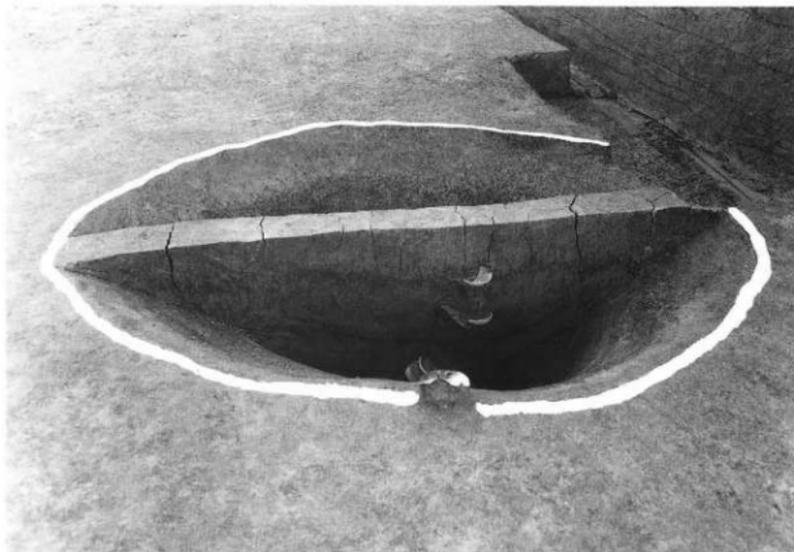
28-2 調査区 第1面全景(東から)



28-3 調査区 第1面全景(東から)



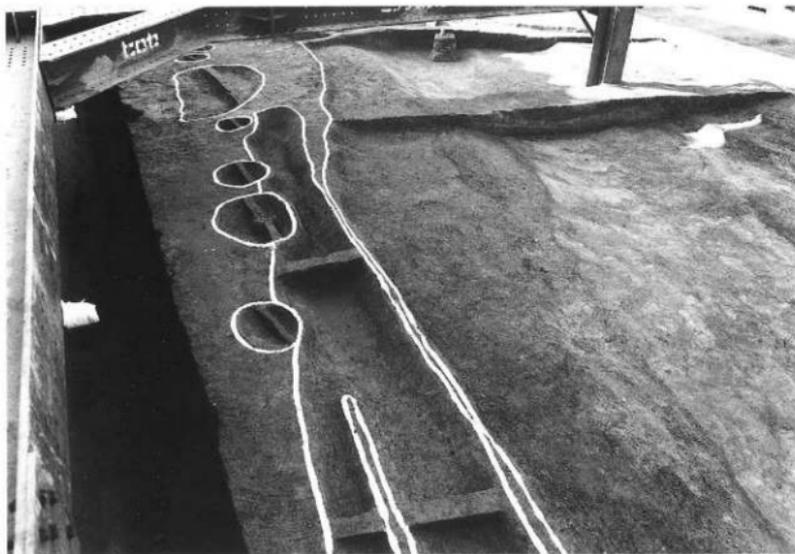
28-4 調査区 第1面全景(東から)



28-1 調査区 SK102検出状況(南から)



28-1 調査区 同上 遺物出土状況(南から)



28-2 調査区 S K 104他検出状況(東から)



28-2 調査区 S K 105検出状況(南から)



28-2 調査区 S K106検出状況(西から)



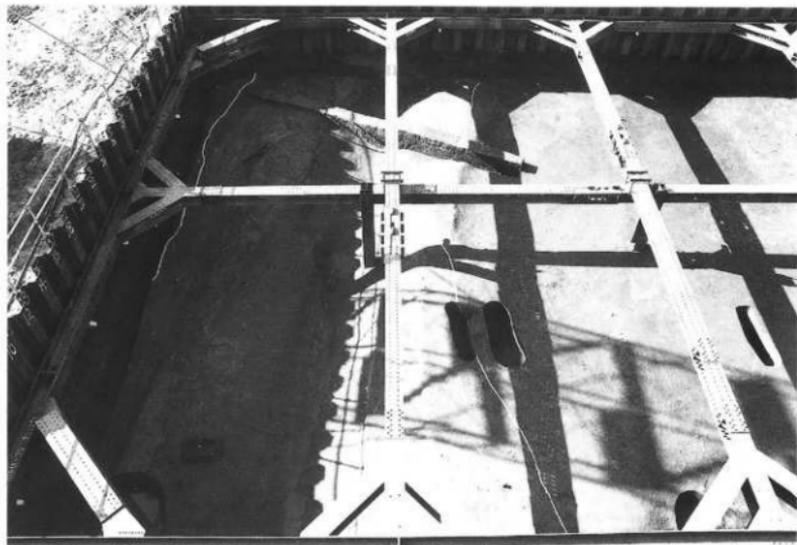
28-3 調査区 S K107検出状況(南から)



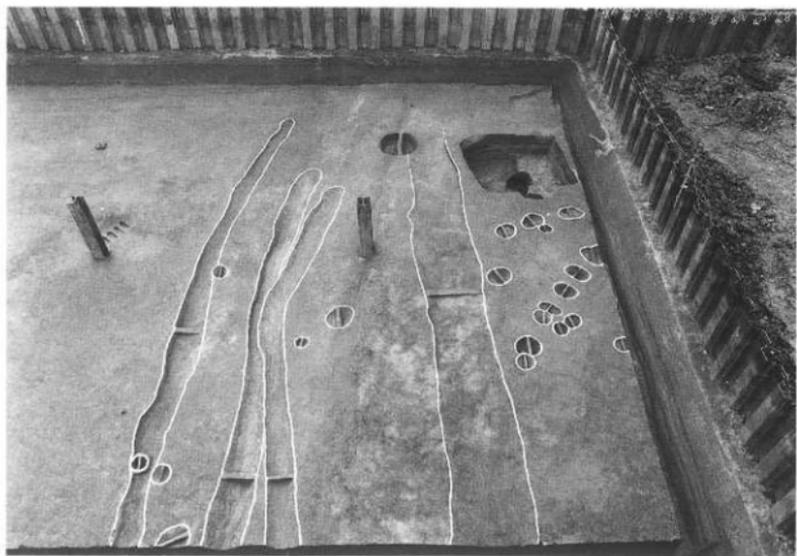
28-3 調査区 S K 108 検出状況 (南から)



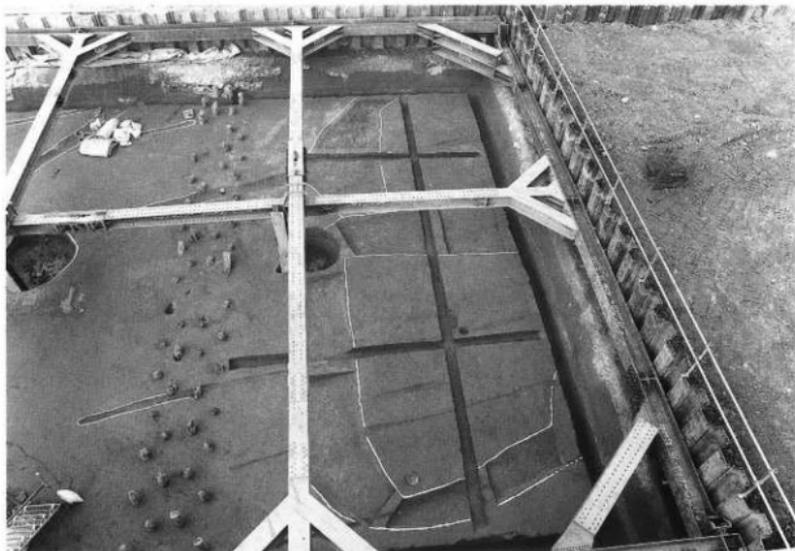
28-3 調査区 S D 115 遺物出土状況 (北東から)



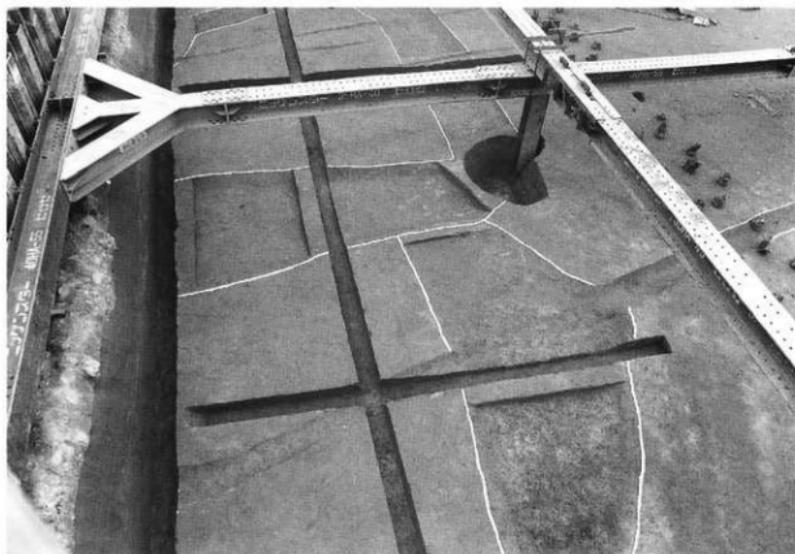
28-2 調査区 NR101検出状況(東から)



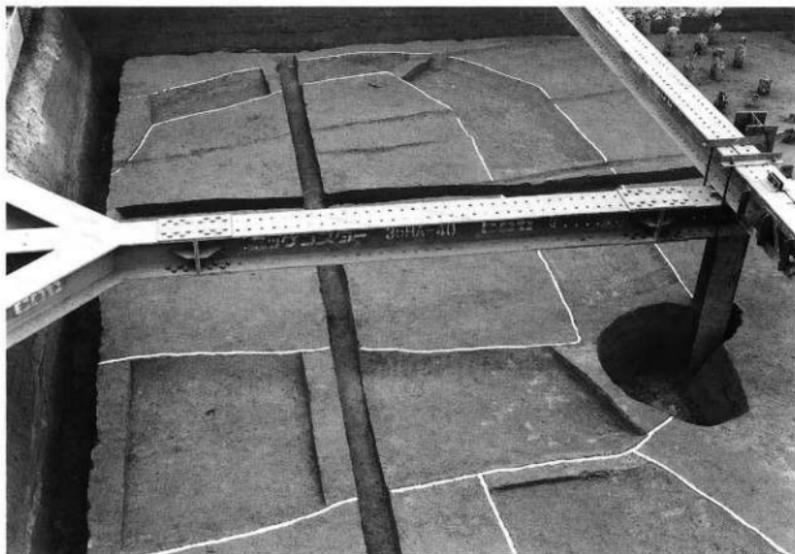
28-1 調査区 溝および小穴検出状況(東から)



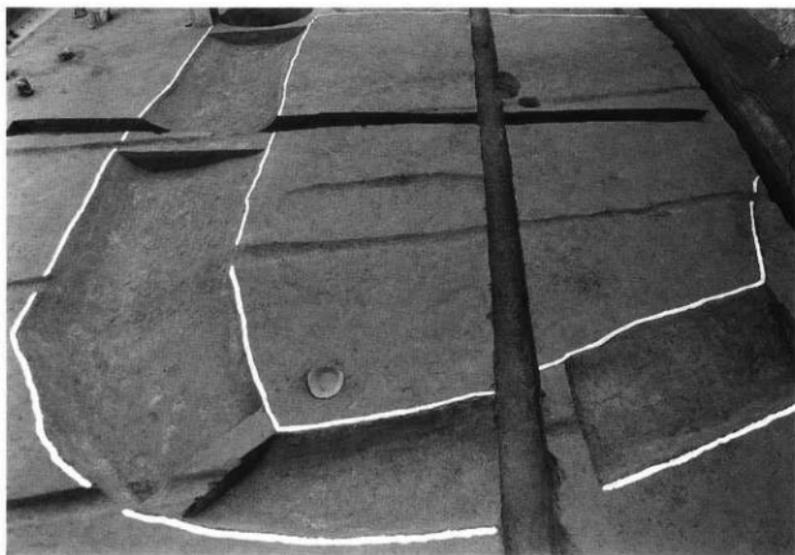
28-3 調査区 S X 101・S X 102検出状況(東から)



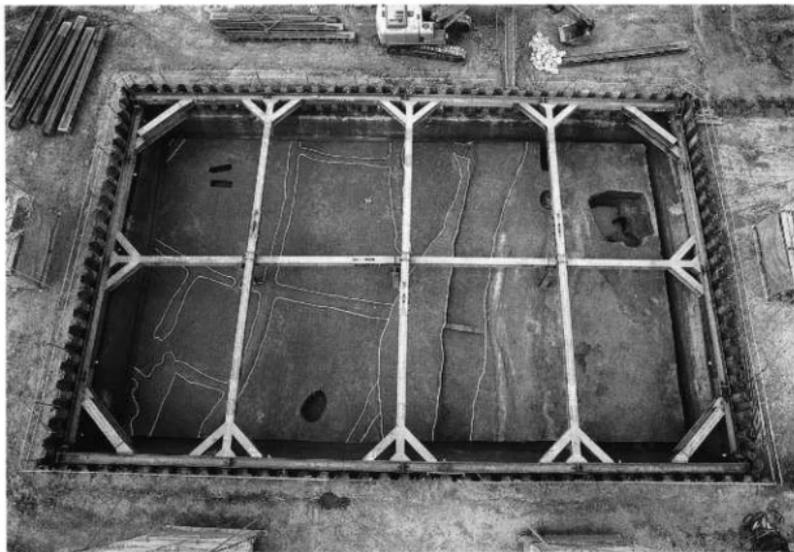
28-3 調査区 S X 101検出状況(西から)



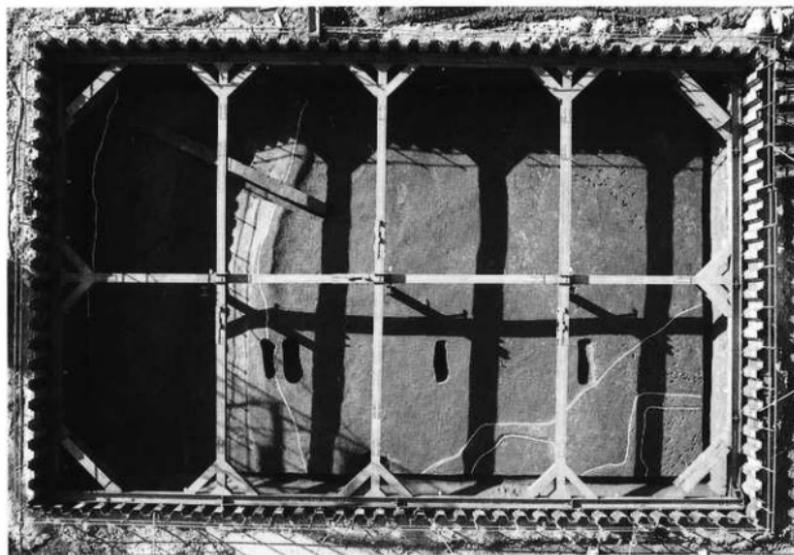
28-3 調査区 S X102検出状況(西から)



28-3 調査区 同上(東から)



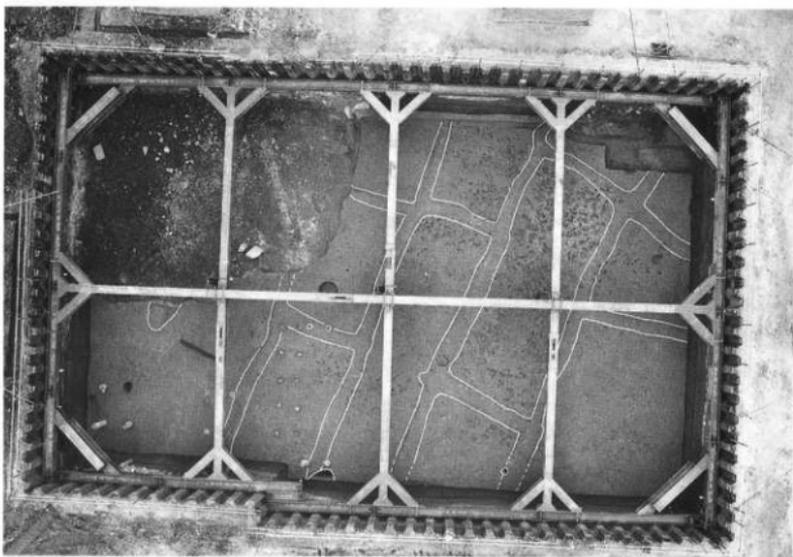
28-1 調査区 第2面全景(東から)



28-2 調査区 第2面全景(東から)



28-3 調査区 第2面全景(北東から)



28-4 調査区 第2面全景(東から)



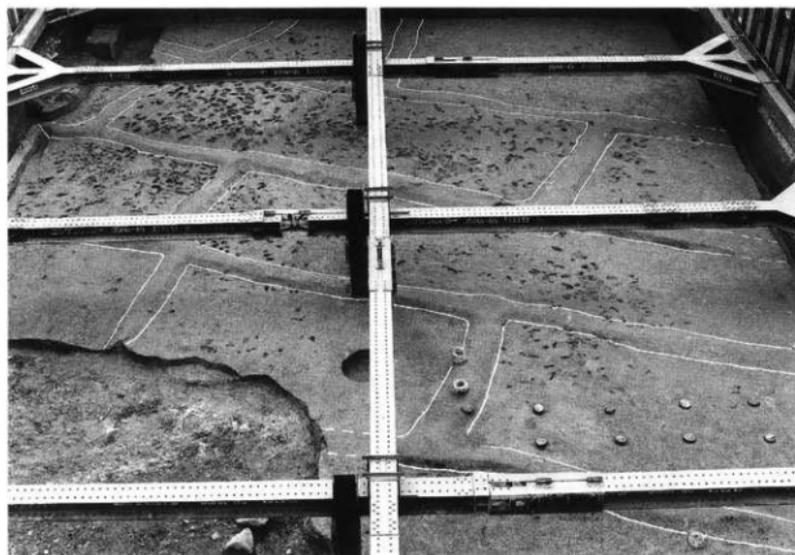
28-2 調査区 N R 202検出状況(東から)



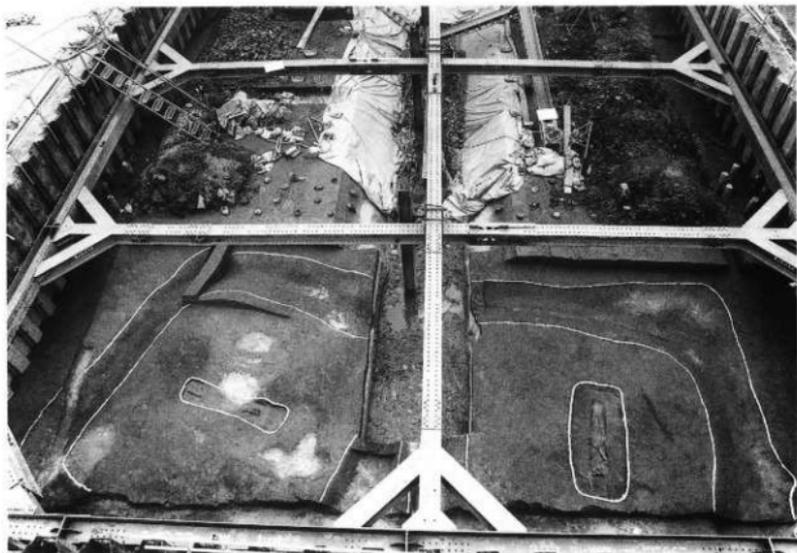
28-2 調査区 N R 202細部(東から)



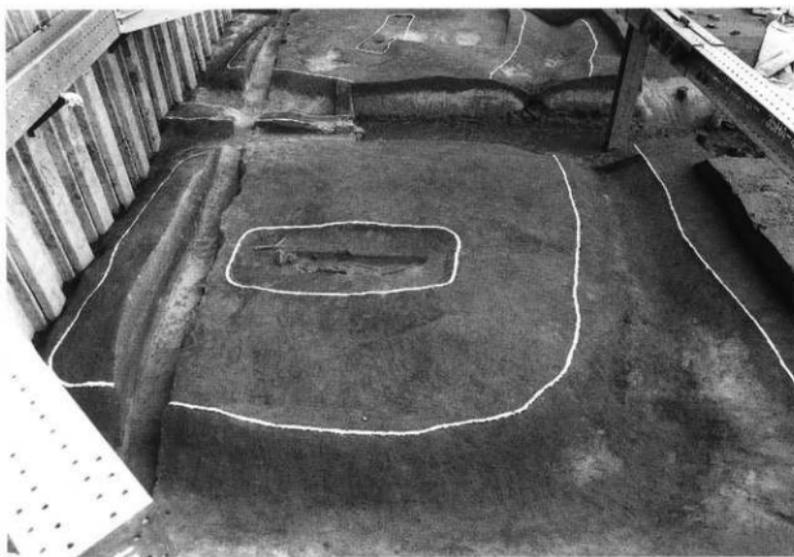
28-4 調査区 北部水田検出状況(南東から)



28-4 調査区 同上(北から)



28-3 調査区 301号方形周溝墓・302号方形周溝墓検出状況(北から)



28-3 調査区 同上(西から)